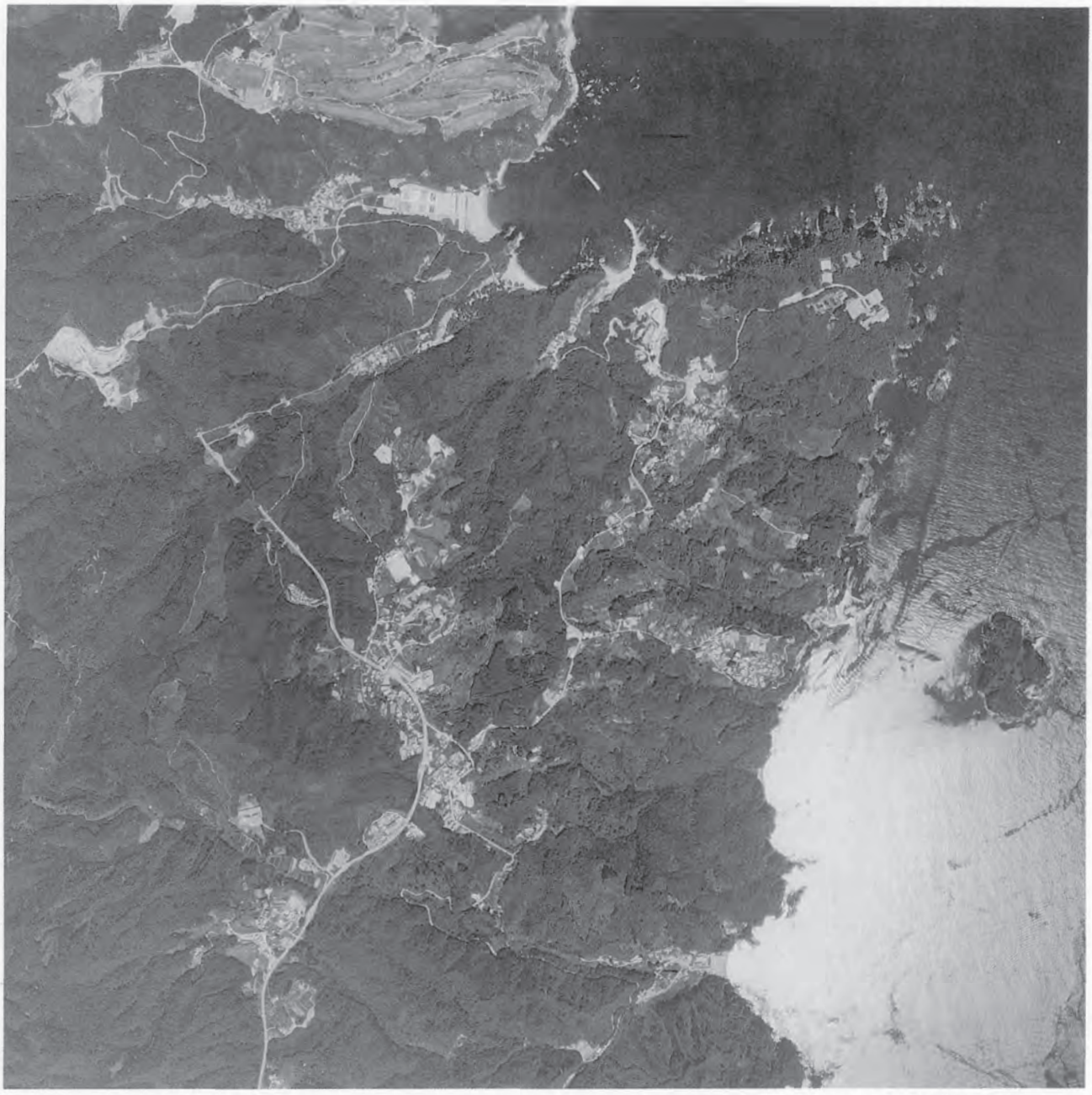
宮古市埋蔵文化財調査報告書18
Archaeological Researches in Miyako

# 崎山遺跡群 III

## —昭和63年度発掘調査概報—



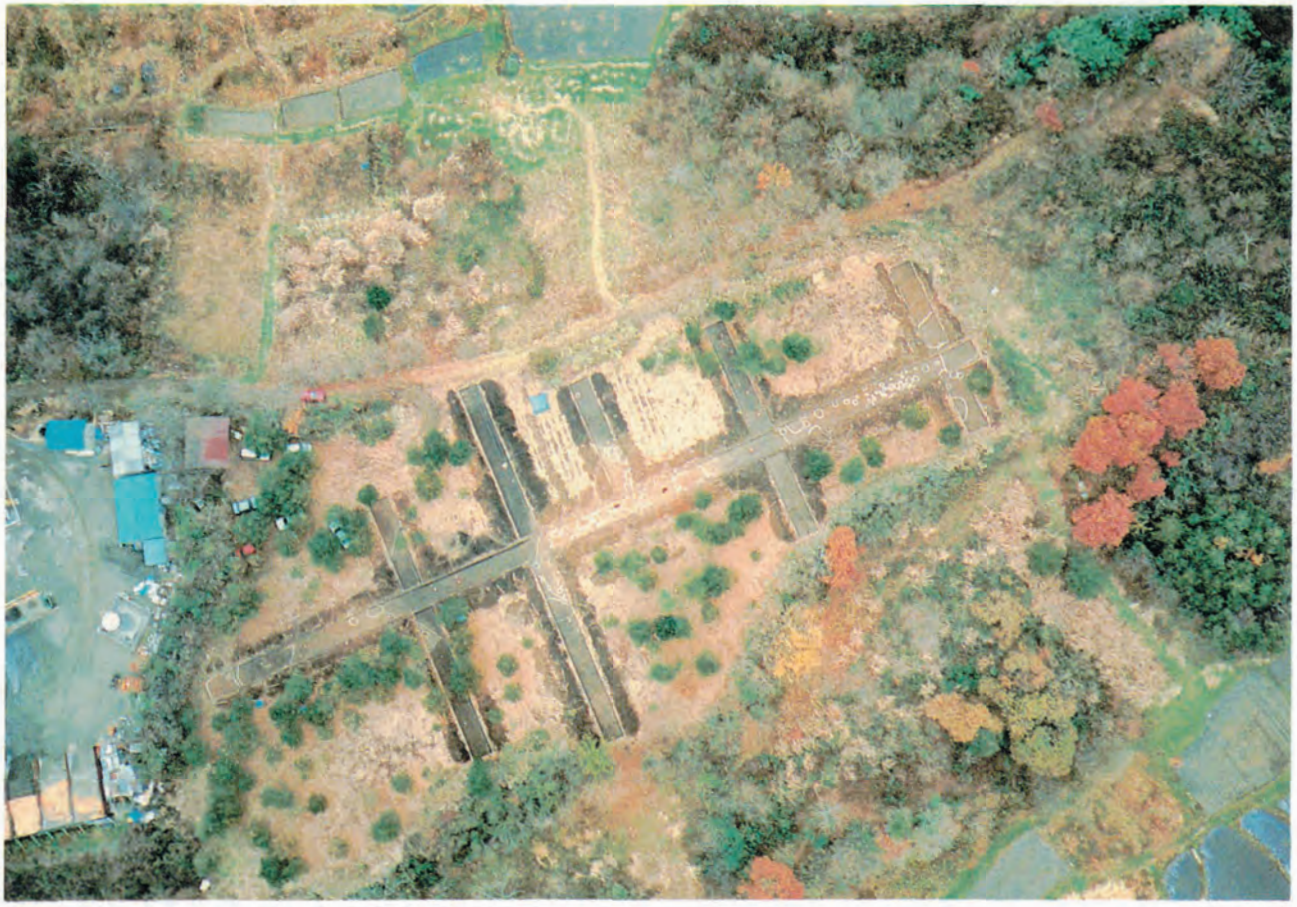
1 崎山遺跡群垂直写真

1989.3
岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

カラー1　崎山貝塚航空写真

カラー2　崎山貝塚第3次調査区垂直写真

（カラー１）



（カラー２）

カラー3　崎山貝塚第3次調査区全景

（カラー3）

カラー4　Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡堆積状況

カラー5　Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡貝層検出状況

（カラー4）

（カラー5）

カラー6　N21E３－１号土坑跡マグロ椎骨検出状況

カラー7　Ｎ３Ｅ９－立石（自然石）検出状況

（カラー６）

（カラー７）

# 序　　文

宮古市における考古学的な調査は明治時代末年頃の貝塚の発掘調査を端緒としていますが、崎山遺跡群内に所在する大付遺跡（貝塚）や崎山貝塚なども古くから調査研究が成されて来ました。

崎山遺跡群は市街地から遠く離れていることもあり、遺跡が比較的良好に保存されて来ましたが、近年、種々の開発に伴い事前の緊急調査が増加しております。

宮古市では、遺跡群の保護を前提とした範囲確認調査および個人住宅等の緊急調査に対処するために、国庫、県費補助を受け崎山遺跡群発掘調査事業を実施しております。

本書は、崎山遺跡群の３年目の調査成果をまとめた概報でありますが、調査の結果、大付遺跡からは縄文時代晩期に伴う土坑跡を検出しております。

トロノ木Ⅰ遺跡からは遺構は検出されませんでしたが、過去の調査成果と合わせて、遺跡の南限をほぼ定めることができました。

崎山貝塚からは縄文時代中期を主体とする遺構群が密集した状態で検出されております。

これにより崎山貝塚の集落跡は、中央に立石を伴う土坑域、外側に地山の落ち込み、更に外側に居住域という構成をとるということがわかってまいりました。

また、発掘調査と併行して実施したボーリング調査の結果、南斜面には、貝層の周辺に広範囲に自然遺物を包含する層が存在することを確認しており、新たに北斜面にも貝層を検出しております。

これらの調査に伴い出土した遺物は、縄文時代早期末葉から縄文時代晩期、弥生時代、平安時代にまでおよび、従来、縄文時代早期末葉から縄文時代中期末葉とされてきた崎山貝塚の存続期間を大幅に書きかえることになりました。

崎山貝塚は、大規模な集落跡と広範囲な貝層や自然遺物包含層が良好な状態で保存されている非常に貴重な遺跡でありますが、今後とも調査を継続させながら、できるだけ良好な形で保護できるように努力してまいりたいと考えております。

最後に、調査にあたり様々な御指導や御協力をいただきました関係者各位には心より感謝申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会
教育長職務代理者
教育次長　鈴　木　哲　夫

# 例　　言

1．本書は昭和63年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群大付遺跡第３次調査・トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査・崎山貝塚第３次調査の概報である。

2．発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長　小野寺聰・教育長職務代理者教育次長　鈴木哲夫）で、発掘調査および本書の執筆、編集は高橋が担当し、鎌田・盛合が補佐した。

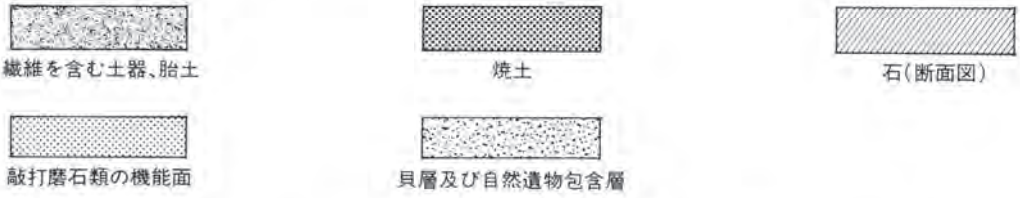
3．調査座標は平面直角座標第Ｘ系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためＲを冠して表示した。

　　座標軸方向――第Ｘ系に準じる

　　調査座標原点――Ｘ－3580.000、Ｙ＋97000.000

4．高さは標高値をそのまま使用した。

5．遺構、遺物の表現については下記のとおりとした。




6．発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 西本　豊弘 | （国立歴史民俗博物館） | 武田　将男 | （宮古市教育委員会） |
| 高橋　信雄 | （岩手県教育委員会文化課） | 佐藤　正彦 | （陸前高田市立博物館） |
| 佐々木　勝 | （　　〃　　） | 熊谷　　賢 | （東北学院大学学生） |
| 小田野哲憲 | （岩手県埋蔵文化財センター） | 高橋　一成 | （東北大学学生） |
| 熊谷　常正 | （岩手県立博物館） | 中嶋　　隆 | （宮古市在住） |
| 八木　光則 | （盛岡市教育委員会） | | |

7．本文中の引用文献は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979　『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』　小田野哲憲・熊谷　常正――→『大付報文79』

1983～86　『宮古市遺跡分布調査報告書　１～４』　武田将男――→『分布調査１～４』

1986　『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』　武田将男――→『分布図86』

1987　『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』　上野猛――→『崎山報文87』

1987　『崎山遺跡群Ⅰ　昭和61年度発掘調査概報』　高橋憲太郎――→『崎山遺跡群　Ⅰ』

1988　『崎山遺跡群Ⅱ　昭和62年度発掘調査概報』　高橋憲太郎――→『崎山遺跡群　Ⅱ』

1989　『トロノ木Ⅰ遺跡　第１次～第７次調査報告書』　高橋憲太郎――→『トロノ木報文89』

# 目　　次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　調査経過……1
1．調査要旨……1
2．調査体制……1
Ⅱ　調査内容……4
1．大付遺跡第３次調査……4
(1)　過去の調査……4
(2)　遺構の検出状況……7
(3)　検出された遺構と遺物……7
2．トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査……14
(1)　過去の調査……14
(2)　基本層序……14
(3)　検出された遺構と遺物……17
3．崎山貝塚第３次調査……19
(1)　第１次、第２次調査の概要……19
(2)　調査の方法と目的……19
(3)　基本層序……20
(4)　遺構の検出状況……28
(5)　検出された遺構と遺物……28
(6)　ボーリング調査……54
(7)　北斜面の貝層……57
Ⅲ　調査のまとめ……63

# 図 版 目 次

第１図版　崎山遺跡群航空写真、大付遺跡垂直写真
第２図版　大付遺跡第３次調査区遺構検出状況
第３図版　第１号土坑跡・第２号土坑跡・第３号土坑跡
第４図版　第１号土坑跡・第２号土坑跡・第３号土坑跡堆積状況（Ｂ層、Ｃ層）
第５図版　第１号土坑跡・第２号土坑跡・第３号土坑跡堆積状況（Ａ層）
第６図版　第１号土坑跡・第２号土坑跡・第３号土坑跡堆積状況（Ａ層）、第１号土坑検出状況
第７図版　Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８、Ｐ７・Ｐ８堆積状況
第８図版　Ｐ４・Ｐ５、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３
第９図版　トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査区全景
第10図版　Ｎ－Ｓ　Section堆積状況
第11図版　Ｅ－Ｗ　Section堆積状況
第12図版　崎山貝塚第３次調査区全景
第13図版　調査区中央部（土坑域）遺構検出状況、調査区東半部（居住域～土坑域）遺構検出状況
第14図版　Ｎ３Ｗ15～Ｓ30Ｗ15付近遺構検出状況、Ｎ21Ｅ３～Ｎ３Ｅ３付近遺構検出状況
第15図版　Ｎ21Ｅ51～Ｓ９Ｅ51付近遺構検出状況、Ｎ３Ｗ66～Ｎ３Ｗ51付近遺構検出状況
第16図版　Ｎ27Ｗ15～Ｎ３Ｗ15付近検出状況、Ｎ21Ｗ15～Ｓ30Ｗ15付近検出状況
第17図版　Ｎ21Ｅ24～Ｓ９Ｅ24付近検出状況、Ｎ18Ｗ33～Ｓ24Ｗ33付近検出状況
第18図版　Ｓ３Ｗ33～Ｓ24Ｗ33付近遺構検出状況、Ｎ18Ｗ33～Ｎ３Ｗ33付近検出状況
第19図版　Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡堆積状況、Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡貝層検出状況
第20図版　Ｎ３Ｅ９－１号土坑跡堆積状況、Ｎ３Ｅ９－１号土坑跡遺物出土状況
第21図版　Ｎ21Ｅ３－１号土坑跡マグロ椎骨出土状況、Ｎ21Ｅ３－１号土坑堆積状況
第22図版　Ｓ３Ｗ15－１号土坑跡検出状況、Ｓ６Ｗ15－１号土坑跡検出状況
第23図版　Ｓ６Ｗ15－２号土坑跡検出状況、Ｓ６Ｗ15－３号土坑跡検出状況
第24図版　Ｎ３Ｅ９－立石検出状況、北斜面貝層出土骨角器類
第25図版　Ｎ21Ｅ３－１号土坑跡出土マグロ椎骨、北斜面貝層出土自然遺物

**カラー口絵**

１．崎山貝塚航空写真
２．崎山貝塚第３次調査区垂直写真
３．崎山貝塚第３次調査区全景
４．Ｎ３Ｗ３－１号土坑堆積状況
５．Ｎ３Ｗ３－１号土坑貝層検出状況
６．Ｎ21Ｅ３－１号土坑跡マグロ椎骨出土状況
７．Ｎ３Ｅ９－立石検出状況

**内表紙写真**

１．崎山遺跡群垂直写真

# 挿 図 目 次


第１図　位置図……2
第２図　崎山遺跡群と周辺の遺跡……3
第３図　大付遺跡周辺地形図……4
第４図　大付遺跡第１次・第２次調査（昭和53年度）出土遺物・人骨……5
第５図　大付遺跡第３次調査区全体図……9
第６図　大付遺跡第３次調査土層断面図……10
第７図　大付遺跡第３次調査出土遺物(1)……11
第８図　大付遺跡第３次調査出土遺物(2)……12
第９図　トロノ木Ⅰ遺跡周辺地形図……15
第10図　トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査区全体図……16
第11図　トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査土層断面図……17
第12図　トロノ木Ⅰ遺跡第４次調査（昭和58年度）検出遺構遺物……18
第13図　崎山貝塚周辺地形図……21・22
第14図　崎山貝塚第３次調査区全体図……23・24
第15図　崎山貝塚第３次調査土層断面図(1)……25
第16図　崎山貝塚第３次調査土層断面図(2)……26
第17図　崎山貝塚第３次調査土層断面図(3)……27
第18図　崎山貝塚第３次調査区西端部平面図……29・30
第19図　崎山貝塚第３次調査区中央部平面図……31・32
第20図　崎山貝塚第３次調査区東端部平面図……33・34
第21図　崎山貝塚第３次調査Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡・Ｎ３Ｅ３－１号土坑跡……37
第22図　崎山貝塚第３次調査Ｎ３Ｅ９－１号土坑跡……38
第23図　崎山貝塚第３次調査Ｎ21Ｗ３－１号土坑跡……39
第24図　崎山貝塚第３次調査Ｎ３Ｅ45－１号炉跡……40
第25図　崎山貝塚第３次調査出土土器(1)……43
第26図　崎山貝塚第３次調査出土土器(2)……44
第27図　崎山貝塚第３次調査出土土器(3)……45
第28図　崎山貝塚第３次調査出土石器(1)……47
第29図　崎山貝塚第３次調査出土石器(2)……48
第30図　崎山貝塚第３次調査出土石器(3)……49
第31図　崎山貝塚第３次調査出土石器(4)……51
第32図　崎山貝塚第３次調査出土石器(5)……52
第33図　崎山貝塚第３次調査出土石器(6)……53
第34図　崎山貝塚南斜面ボーリング柱状図(1)……55
第35図　崎山貝塚南斜面ボーリング柱状図(2)……56
第36図　崎山貝塚北斜面貝塚出土遺物……59

# Ⅰ　調査経過

## 1．調査要旨

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度より平成２年度までの５ヶ年間を第Ⅰ期として崎山遺跡群発掘調査事業を実施している。

昭和63年度の発掘調査は、大付遺跡第３次調査（倉庫建築）、トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査（個人住宅建築）および崎山貝塚第３次調査（範囲確認調査）の３件である。総事業費は 300万円である。

○大付遺跡第３次調査　昭和63年５月20日～６月４日　　64㎡

遺跡のほぼ中央部に位置し、縄文時代晩期の土坑跡３基、小ピット８口を検出している。

○トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査　昭和63年８月22日～９月12日　　145㎡

遺跡の南端部に位置する緩斜面で、遺構は検出されなかったが、縄文土器片がわずかに出土している。

○崎山貝塚第３次調査　昭和63年10月17日～12月２日　　837㎡

貝塚の中央部に相当する台地上を調査した。調査区のほぼ中央部には立石を伴う土坑域を外側に地山の落込み、更に外側に居住域を検出している。遺構群の大半は検出のみにとどめたが、土坑跡を３基断ち割ったところ、１基からムラサキインコガイなどにより構成される貝層を検出し、もう１基からはマグロの椎骨11個の集積を検出している。

## 2．調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 調査総括 | 吉田　昌義 | 宮古市教育委員会社会教育課長 |
| 事務担当 | 小本　　哲 | 宮古市教育委員会社会教育係長 |
| 〃 | 佐藤　広昭 | 宮古市教育委員会社会教育係主事 |
| 調 査 員 | 高橋憲太郎 | 宮古市教育委員会社会教育係主事　（主担当） |
| 〃 | 鎌田　祐二 | 宮古市教育委員会社会教育係主事 |
| 〃 | 盛合　義信 | 宮古市教育委員会社会教育係主事 |

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

〈地 権 者〉　山内正光、三浦辰吉、前川孫八

〈発掘調査〉　阿部豊、前川友宏、吉田昭、村岡憲一、竹田末人、佐伯裕則、北村忠治、大越貞蔵、小島貞一、田崎昭吾、森田隆、佐々木茂、木村博、古舘友三、山本寛、中居磯雄、

〈整理作業〉　斉藤薫、八木由美子

青森市
八戸市
馬淵川
雨滝遺跡
中曽根遺跡
馬場野遺跡
蒔前台遺跡
馬場平遺跡
八戸市
二子貝塚
根井貝塚
N 40°
長者屋敷遺跡
水切場遺跡
森の越遺跡
茂師貝塚
大館町遺跡
日戸遺跡
柿ノ木平遺跡
つなぎ遺跡
盛岡市
宮古市
崎山遺跡群
銚子崎館山貝塚
鍋越貝塚群
閉伊川
津軽石川
西田遺跡
立石遺跡
大地渡遺跡
観音堂遺跡
田ノ浜貝塚
崎山弁天貝塚
鳩岡崎遺跡
九年橋遺跡
長谷堂貝塚
大河貝塚
中島遺跡
宮野貝塚
鮫の浦貝塚
N 39°
東裏遺跡
陸前高田市
門前貝塚
中沢浜貝塚
草ケ沢遺跡
田柄貝塚
北上川
貝鳥貝跡
糖塚貝塚
前浜貝塚
青島貝塚
長根貝塚
栗山貝塚
天雄寺貝塚
上深沢遺跡
南境貝塚
大松沢遺跡
沼津貝塚
勝負沢遺跡
西ノ浜貝塚
里浜貝塚
大木囲貝塚
仙台市
湯坪遺跡
上川名貝塚
概木貝塚
N 38°
E 141°
E 142°
0
1:140000
50km

第1図 位 置 図

第2図　崎山遺跡群と周辺の遺跡

# II　調査内容

## 1．大付遺跡第３次調査（第３図）

### (1) 過去の調査

大付遺跡（大付貝塚）は、宮古市の遺跡コードＬＧ14－2291、岩手県のコードＬＧ04－2291として登録された周知の遺跡であり、昭和53年度に第１次、第２次調査を実施しているため調査次数をこれに続けた。本遺跡は、明治30年代後半に地元の研究者中嶋吉兵衛により発見されて以来、中央でも注目されて来ているが、明治44年に刊行された岸上鎌吉の『Prehistoric Fishing in Japan』では本遺跡から出土した自然遺物として、ツメタガイ・スズキ・マダイ・クジラ目などを報告している。中嶋も自ら収集した資料を『先史遺物帖』にまとめており、この中にも本遺跡から出土した貝輪などの骨角器類が多数収録されているが、未刊のままである。

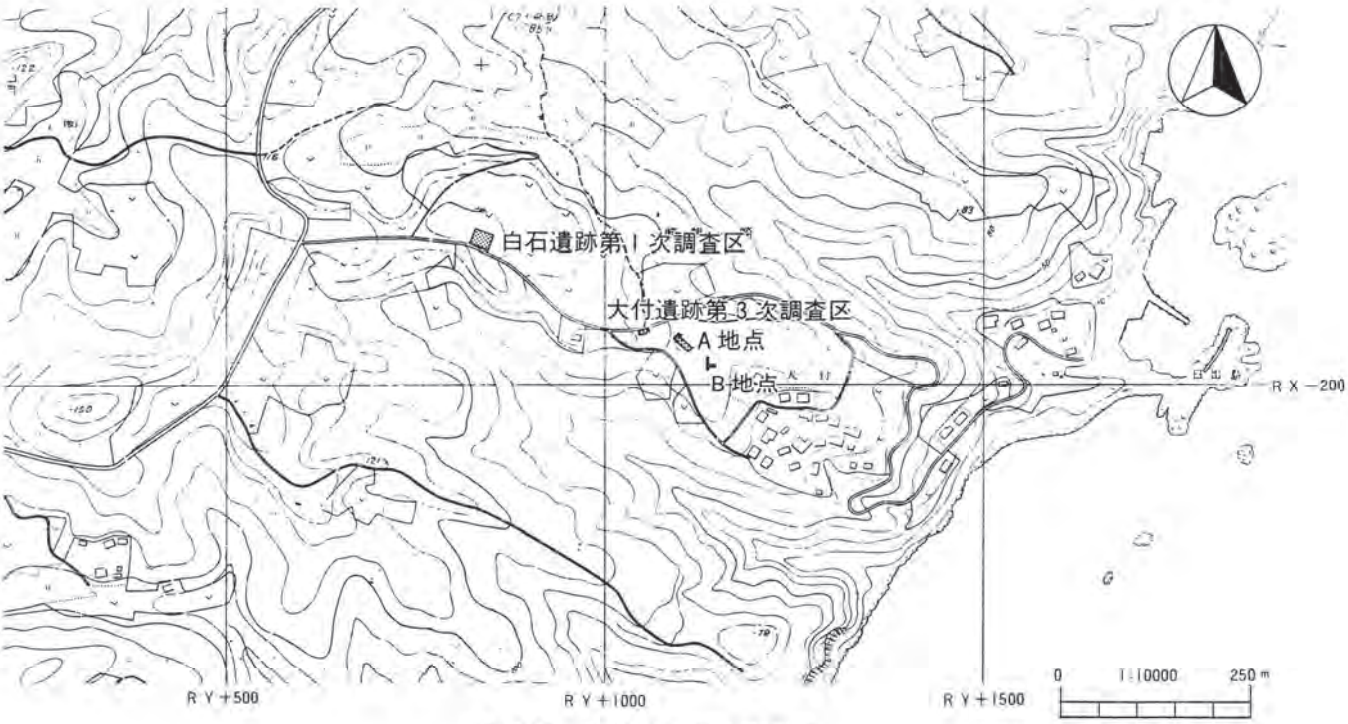
**明治時代**

大正11年に刊行された『下閉伊郡史』の中で中嶋は「付録・石器時代遺跡考」を執筆しており、「崎山村大附（オオツケ）（蝦夷森）　〔貝塚〕　骨角加工品、土器片、石器、灰、木炭」との記述がある。

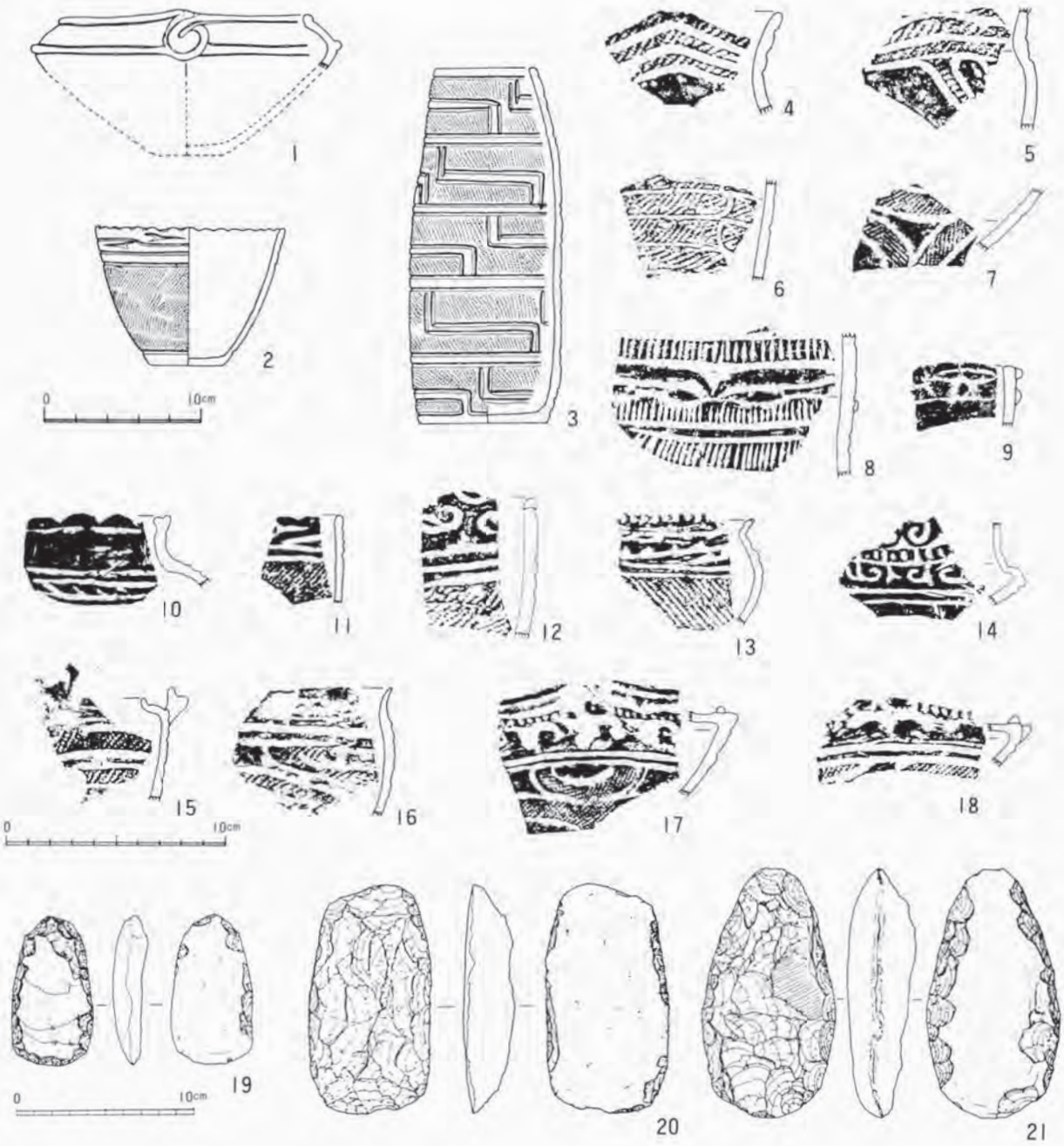
中嶋の収集した資料は、現在子息の隆氏が保管されており、その一部は『分布調査　１』や『宮古市史　漁業・交易』に紹介されている。これらによると大付遺跡から出土した骨角器類は実に多様で、釣針・銛頭・刺突貝類・骨ベラ・角ベラ・貝輪・弭（ゆはず）形角製品などのほかに蟬（せみ）（あるいは哺乳類の頭部か？）を模したものかと思われる骨角偶なども見られる（Photo １）。

**大正時代**

大正13年には柴田常恵、小田島禄郎の調査が行われている。これは史跡指定候補地としての本遺跡の内容確認を目的としたものであったが、調査地点の貝層が意外に薄く十分な成果を上




第３図　大付遺跡周辺地形図



第４図　大付遺跡第１次、第２次調査(昭和53年度)出土遺物、人骨(『大付報文79』より)

げることができず指定はなされなかった。

これ以降、本遺跡での発掘調査は実施されなくなるが、本遺跡周辺が漁村として古くから集落が営まれて来たこともあり、宅地や海藻乾燥場としての造成や耕作の進行などにより、遺跡の現状変更が進んでいた。

こうした中で、昭和53年秋に本遺跡内で個人住宅建築の申請が出されたため、田村忠博、中嶋隆（両名とも当時宮古市文化財保護審議会委員）らによる試掘調査を経て、昭和53年11月に第１次調査、昭和54年１月に第２次調査の国庫補助による発掘調査が実施され、この調査成果が報告されている（『大付報文　79』）。報文による調査内容は次のとおりである。

**第１次調査（S53年度）**

第１次調査は個人住宅建築に先だつ緊急調査で、大付部落の入口に位置する丘陵上**（A地点）**を調査している。この調査では縄文時代晩期（大洞Ｂ式）に伴うと思われる屈葬人骨１体と縄文時代後期～晩期初頭の竪穴住居跡１棟を検出したほか、時期は特定できないが焼土遺構や小ピット群なども検出されている。

人骨は、田村らの試掘調査で掘り下げが進んでおり、左骨盤および両下肢骨の大部分ですでに取り上げられていたため、埋葬遺構については十分な調査が不可能であった。ただし、上半身部分に黒褐色土が残存していることからあまり大きくない墓坑が存在した可能性が指摘されている。埋葬状態は仰臥屈葬位（N40°E）であり、胸部に切断された鹿角が、また右肩部分に大洞Ｂ式の小形鉢（第４図２）が、さらに助骨部分などにわずかな魚骨等が伴出している。

**第２次調査（S53年度）**

第２次調査は本遺跡の範囲確認調査であるが、Ａ地点より南東約20ｍの斜面部を**Ｂ地点**としさらに南東約 130ｍに**Ｃ地点**、**Ｄ地点**の調査区を設定している。このうち遺物を検出できたのはＢ地点のみであった。出土土器は縄文時代前期初頭、後期～晩期中葉（大洞Ｃ２式）にわたるが、特に後期～晩期のものが圧倒的に多い。また、石器では打製石斧の出土が特徴的であった。これらは４類に分類されており、中でも４類とした片面に自然面を大きく残すものが最も多い（第４図19～21）。しかし、Ｂ地点の層序は再堆積の可能性が強いため、この打製石斧の所属時期は決定できなかった。

**分布調査（S57年度）**

この後、宮古市では昭和57年度から昭和60年度までの４年間、国庫補助による分布調査を実施し、崎山地区を初年度に調査、報告している（『分布調査　１』）。これによると、縄文時代後期～晩期の遺物に加え、早期末葉から前期、中期の資料が報告されている。また、晩期に伴うと思われる中空の小土偶や、中嶋吉兵衛により収集された骨角器類なども報告されている。

**貝層**

ところで、中嶋や柴田、小田島らが調査した貝層は、現在所在不明である。中嶋は『先史遺物帖』に〝ホラ〟という屋号を持つ人家の後の畑に貝層があるとしており、また、小田島は海に向かった丘陵の斜面で獺沢（そさわ）型の地点に１尺内外の貝層があり、斜面の下方では流れ落ちた黒土が２、３尺の層厚で堆積していると記述している（註１）。これらによると、貝層はＡ地点の真南且Ｂ地点の真東に相当するようである。しかし、ここはだいぶ以前に住宅が建っており地表面からは確認できない。また、小田島のいう斜面下方の黒土が堆積している地点はＢ地点に相当するようで、『大付報文　79』でもＢ地点からニホンシカ、イノシシなどの獣骨や魚骨の出土が報告されているし、現在でも少数ながら獣、魚骨が表面採集される。

---

（註１）小田島禄郎　「岩手県東海岸の史蹟調査」（岩手日報連載）1924

### (2) 遺構の検出状況

本年度の調査は個人住宅（倉庫等）の建築に先だつ緊急発掘調査である。調査区は遺跡のほぼ中央部に位置し、付近の畑等からは縄文時代前期～晩期の遺物が表面採集される。また、前述したように第３次調査区の西約50ｍに位置する第１次調査区（Ａ地点）では竪穴住居跡や屈葬人骨などが検出されており、同様なものの検出される可能性も考慮された。

発掘調査は建物の建築により破壊される部分の全体を対象としたが、調査区北東隅に不整だ円形の土坑跡が３基重複して検出されたほか、調査区南半部に柱穴状の小ピットや浅い皿状の土坑跡、焼土遺構などがまばらに検出されたのみであった。

基本層序は、台地上であるため堆積層の発掘が悪く、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が旧表土で、その直下に地山の粘質土（原地山層）が存在している。遺構の検出面は地山の上面である。

### (3) 検出された遺構・遺物

調査区南東隅に検出した土坑跡は第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡の３基であり、いずれも重複している。これら３基の土坑は黒褐色土～やや暗い暗褐色土を基本土とするＡ層に覆われている。Ａ３層は炭化物粒を含む層で、小型獣の焼骨片などもわずかに含む。遺物が出土しているのはＡ１層とＡ２層であるが前者のほうが多い。しかし、土器片などは大半が細片であり、図示できたものは極めて少ない。Ａ１層から出土したものは第７図14～16である。14は半粗製(?)深鉢の口縁部破片であるが口唇部を小波状に作り出す。15は体部に沈線を有する深鉢である。これら２点はほぼ大洞Ｃ１式～大洞Ｃ２式に伴うと思われる。16は注口土器の口縁であるがほぼ大洞Ｂ－Ｃ式に伴うと思われる。18はＡ２層から出土した粗製深鉢の口縁である。

**第１号土坑跡**（第５図、第６図）

第２号土坑跡、第３号土坑跡を切る。平面形は不整だ円形で、検出面での長径2.75ｍ、短径1.9ｍ、深さ0.4ｍを計る。

壁は北東壁がややゆるやかに立ち上がり、南壁は２段に掘り込まれるほかは、ゆるやかに立ち上がっている。底面は平坦でややしまっている。

埋土はＢ層で７層に細分されいずれも人為堆積と思われるがあまりしまりがない。Ｂ１層・Ｂ２層・Ｂ４層・Ｂ６層は暗褐色土を基本とし、褐色土塊などを多量に含む。Ｂ３層・Ｂ５層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多量に含む。Ｂ７層は地山に近い褐色土を基本土とし、わずかに暗褐色土などを含む。Ｂ７層から第８図32の石器が出土している。

**第２号土坑跡**（第５図、第６図）

第１号土坑跡に切られ、第３号土坑跡を切る。平面形は不整だ円形で、検出面での長径 2.4ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.4ｍを計る。第１号土坑よりはやや小振りである。

壁は南壁が２段に掘り込まれるほかは、ゆるやかに立ち上がっている。底面は平坦でややしまっている。

埋土はＣ層で４層に細分され、いずれも人為堆積と思われるがあまりしまりがない。Ｃ１層・Ｃ３層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多量に含む。Ｃ２層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。Ｃ４層は地山に類似する褐色土を基本土とし、わずかに暗褐色土などを含む。

**第３号土坑跡**（第５図、第６図）

第１号土坑跡、第２号土坑跡に切られる。平面形、規模は不明であるが、検出面からの深さ0.2ｍを計る。

壁はややゆるやかに立ち上がり、底面は平坦でややしまっている。

埋土はＤ層で４層に細分され、いずれも人為堆積と思われるがあまりしまりがない。Ｄ１層とＤ３層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。Ｄ２層は褐色土を基本土とし褐色土塊などを多量に含む。Ｄ４層は地山に類似する褐色土を基本土とし、暗褐色土などをわずかに含む。

**Ｐ１**（第５図、第６図）

調査区南西隅に検出した柱穴状のピットである。検出面での径0.2ｍ、深さ0.08ｍを計る。

埋土は単層で黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。柱痕跡は確認されなかった。

**Ｐ２**（第５図、第６図）

Ｐ１の北東に隣接する柱穴状のピットである。検出面での径0.18ｍ、深さ0.15ｍを計る。

埋土は単層で暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含むがややしまりがない。柱痕跡は確認されなかった。

**Ｐ３**（第５図、第６図）

Ｐ２の北東に隣接するだ円形のピットである。長径は 0.8ｍ、短径は 0.4ｍ、深さ0.15ｍを計る。底面は平坦でしまっており、小ピットを伴う。埋土は２層に細分される。ａ１層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むがややしまりがない。ａ２層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を多く含む。

**Ｐ４**（第５図、第６図）

調査区南東部に検出した柱穴状のピットである。検出面での径0.25ｍ、深さ0.15ｍを図る。底面に小ピットを伴うが柱痕跡は検出されなかった。

埋土は単層で暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊などをやや多く含む。また、図示できなかったが縄文土器片を含む。

**Ｐ５**（第５図、第６図）

Ｐ４の東に隣接するだ円形のピットであるが、何基か重複している可能性もあるが不明瞭であり、１基として処理した。長径 0.7ｍ、短径0.33ｍ、深さ 0.2ｍを計る。埋土は単層で黒褐色を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。

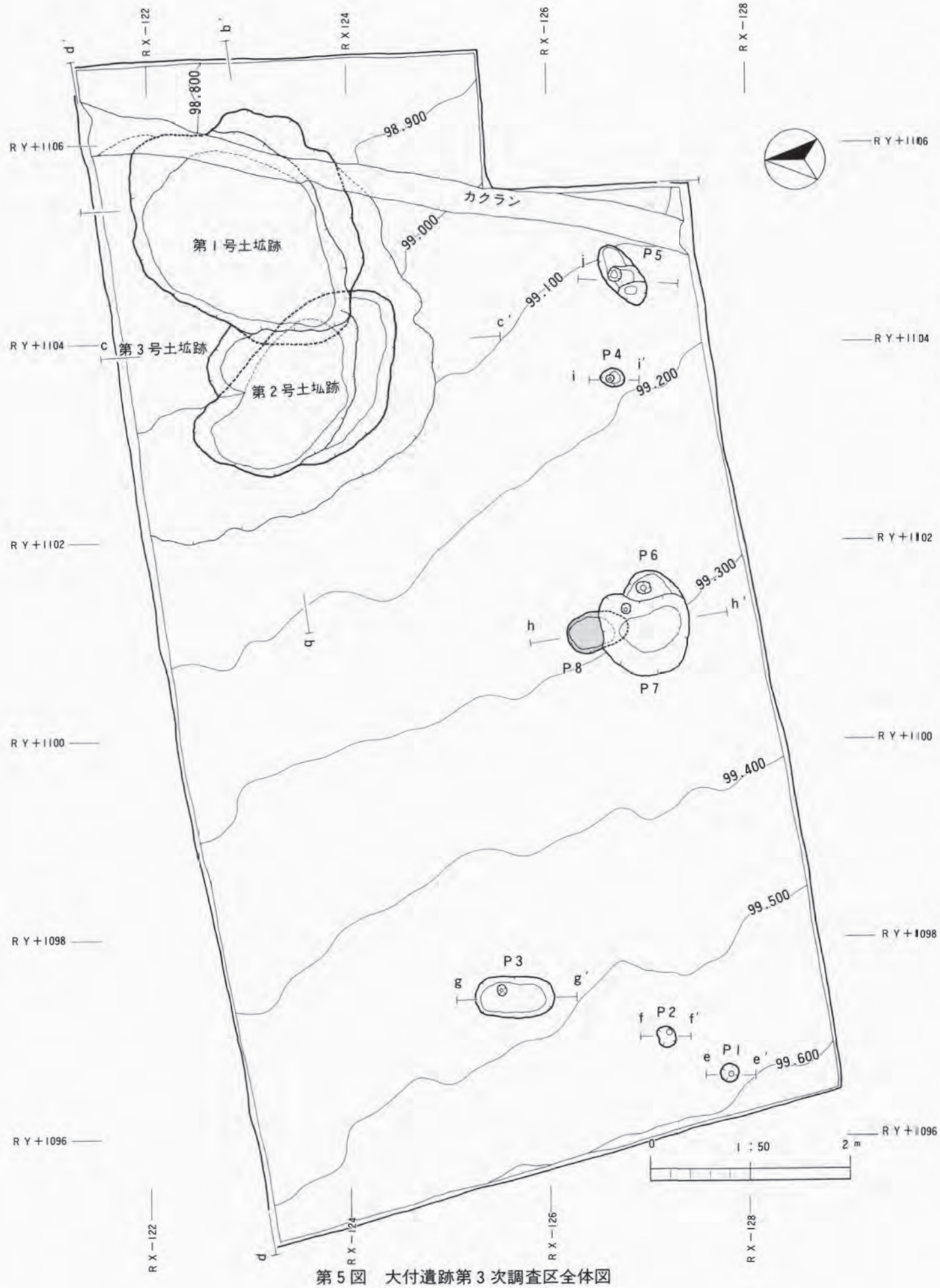
**Ｐ６**（第５図）

調査区南半部のほぼ中央に検出した。Ｐ７に切られる浅い皿状のピットである。底面に小ピットを伴う。埋土は単層で暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。

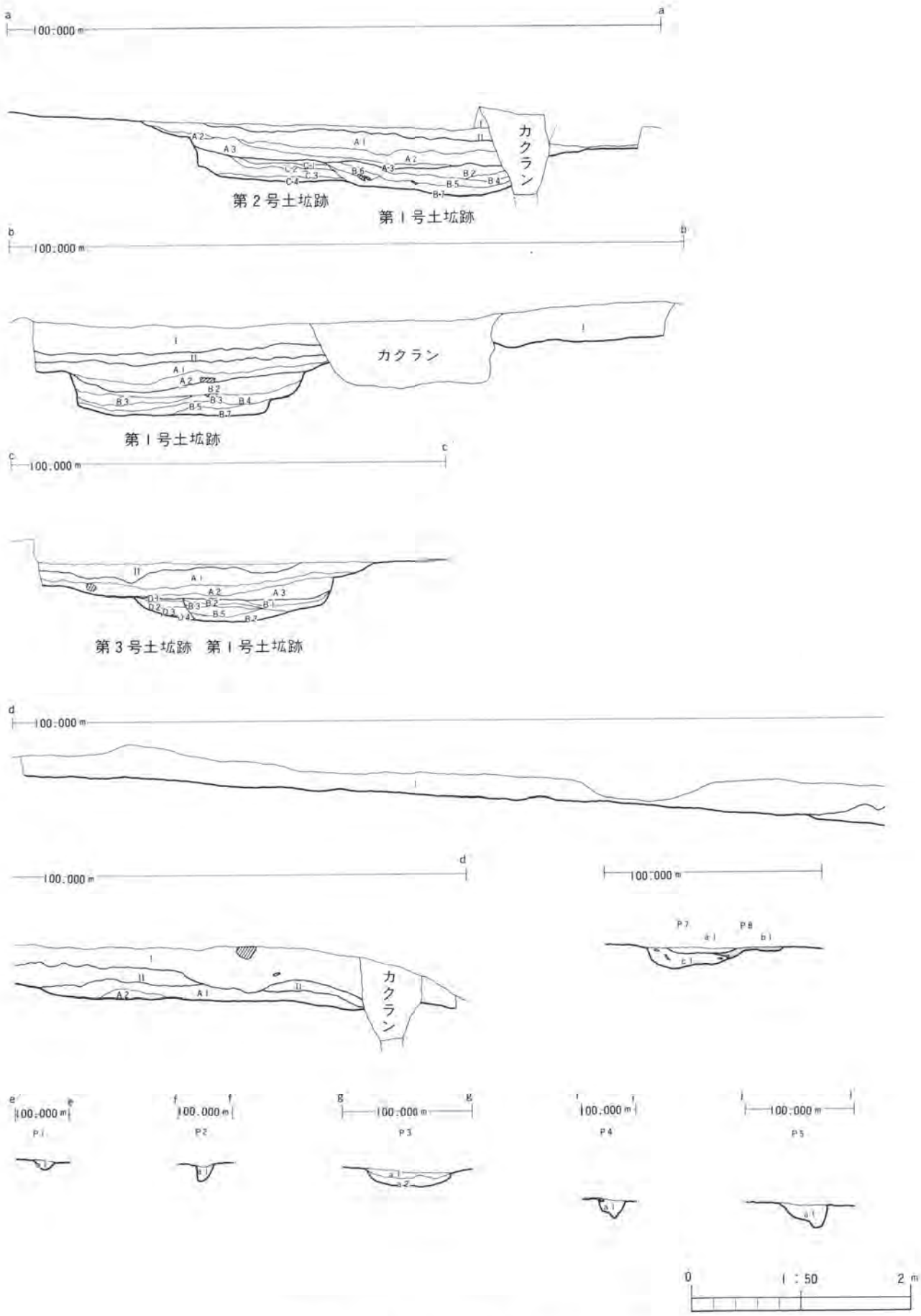
**Ｐ７**（第５図、第６図）

Ｐ６を切り、Ｐ８より古い。径0.75～0.85ｍ、深さ 0.2ｍを計る小土坑である。埋土はＣ１層のみであり、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊やわずかに暗い暗褐色土塊などを多量に含み固くしまっている。また、縄文土器片を比較的多く含むほか、焼土粒や炭化物粒なども少量含む。

出土遺物は第７図１～11および第８図30、33である。土器は深鉢、つぼなどが多く、大洞Ｃ




第5図　大付遺跡第3次調査区全体図




第6図　大付遺跡第3次調査土層断面図

1式～C2式が主体を占める。30は石鏃、33は削器である。

**P8**（第5図、第6図）

P7のC1層上面につくられた不整だ円形の焼土遺構である。長径 0.6m、短径 0.4mを計る。b1層は焼土層であるがよく焼けており固くしまっている。a1層はP7、P8の両方を覆う層で、暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊をわずかに含み、固くしまっている。炭化物粒をわずかに含む。

**出土遺物**（第7図、第8図）

遺構の内外から出土したものを一括した。縄文時代晩期のものが主体を占めるが、全体的に出土量は少ない。特に土器片は小さな破片のものが多く、時期のわかるものはわずかであった。

**土器**（第7図）

縄文時代晩期のものがほとんどであるが、中でも前葉～中葉のものが主体となる。

12、16、23、24、26、27は大洞B－C式に伴うと思われるものである。12、16、20、28は注口土器の破片と思われるものである。28は注口部の破片、16、20は口縁部破片、12は底部付近の

第7図　大付遺跡第3次調査出土遺物(1)

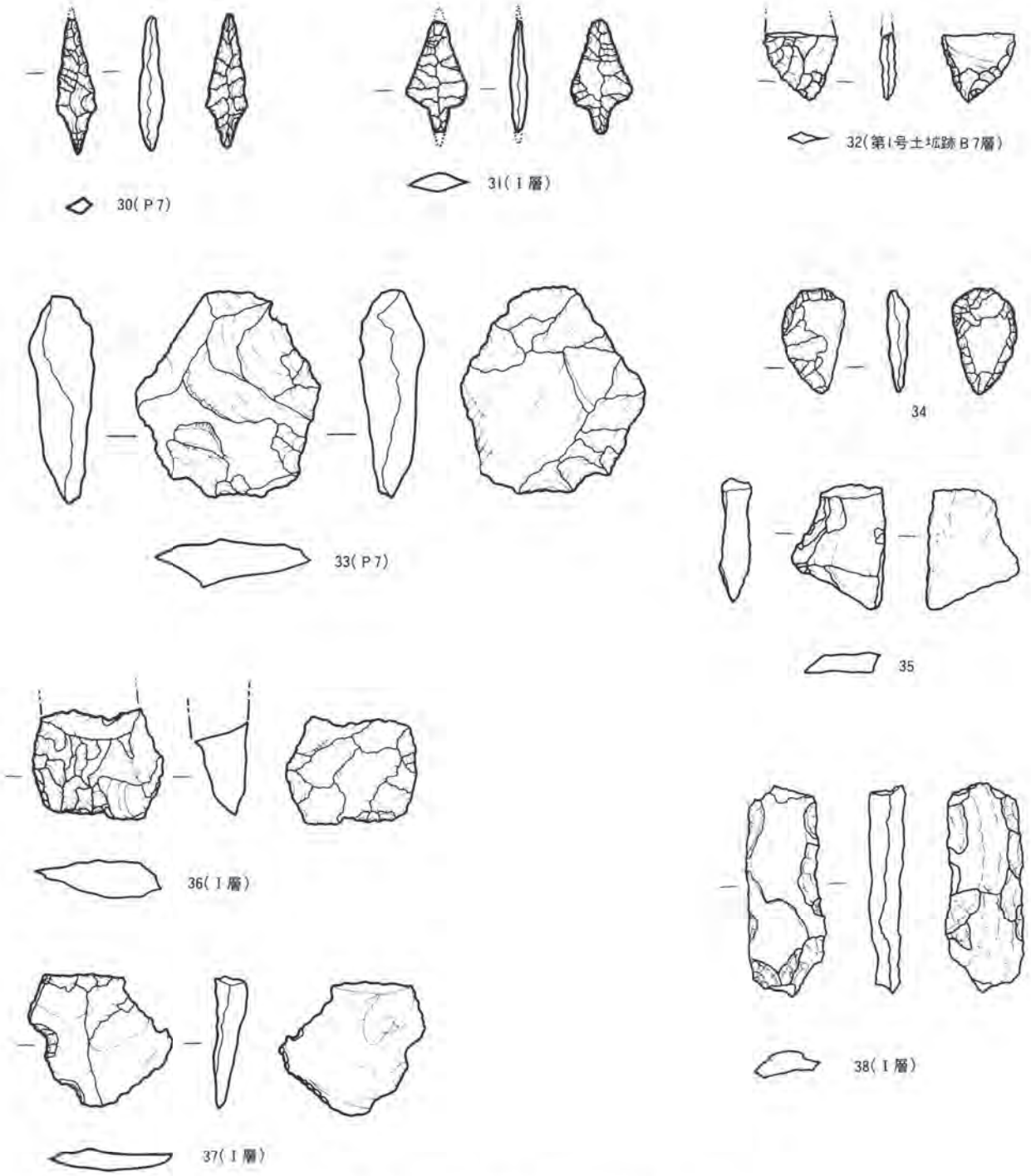
破片である。

1、4、7、8、15、17は大洞C1式に伴うと思われるものである。1、4は深鉢の口縁部破片。7、8は体部破片であるが、雲形文などを施文する。

3、5、6、は大洞C2式に伴うと思われるものである。3は深鉢の口縁部。5は内面にも列点文を有する隆帯などを施文するものである。

14、25は大洞C1式～C2式に伴う半粗製土器である。

22は大洞A式～A'式に伴うものである。




第8図　大付遺跡第3次調査出土遺物(2)

**石器**（第７図、第８図）

今回の調査で出土した石器は極めて少ないが、前回の調査で多数出土した打製石斧類が極端に少ないほか、石錐、石匙、掻器、磨製石斧などの基本的な器種が欠落している。

30～32は石鏃である。30、31は有柄であるが、30は細身で31はやや幅が広い。32は木葉形のものの基部である。

33～35は削器である。33は両側縁を片面調整とするものである。34は両面調整の小形の削器で、35は一方の側縁を片面調整とするものである。

36は石べらかと思われるものである。

37は一方の側縁にノッチ状の刃部をもち、もう一方の側縁に細かな剥離を有するものである。

38は石棒の破片であるが、欠損後に両側縁を両面から調整し削器様の刃部を作り出している。

39は片面に大きく自然面を残す打製石斧である。やや不整なだ円形の剥片の周縁を調整している。

Photo Ⅰ　大付遺跡出土骨角器類－中嶋コレクション　（『分布調査 Ⅰ』より）

## 2．トノロ木Ⅰ遺跡第8次調査（第9図）

### (1) 過去の調査（第12図）

トロノ木Ⅰ遺跡は、宮古市の遺跡コードＬＧ14－2048、岩手県のコードＬＧ04－2058として登録された周知の遺跡である。本遺跡は、崎山貝塚とは尾根をひとつ隔てた北側約 300ｍに位置し、小本丘陵とよばれる丘陵が開析されてわずかに残った段丘面上に位置している。

昭和57年度の分布調査によると、縄文時代中期を主体とした土器片のほかに砂岩質の石を磨いて作った男根状の石製品が出土している。

本遺跡では、昭和55年度から昭和60年度にかけて７次にわたる発掘調査が実施されているため調査次数をこれに続けた。これらの調査による縄文時代中期（大木８ｂ式）に伴う竪穴住居跡３棟と土坑跡１基および遺構とほぼ同時に形成された遺物包含層を検出している。

竪穴住居跡は伴出土器や主軸方向の斉一性からいずれも同時期と見られるが、このうち２棟の炉は複式炉の最も古いタイプのものである。

**複式炉**

縄文時代の遺構群とはやや地点を異にして近世に伴うと思われる掘立柱建物跡や井戸跡などを検出している。

これらの他に、時期を特定できなかったが炭窯跡１基と土坑跡１基を検出している。

また、昭和57年度～昭和60年度に実施した岩手県内の中、近世城館跡の分布調査によると（註１）、本遺跡周辺に「崎山館」が存在するとされている。確かに本遺跡の南約 700ｍにある山陵は「館ヶ森」とよばれ、東約 300ｍには「崎山神社」が存在する。また、場所は特定できないが、付近に「館ヶ下」という屋号の家があるという。

**崎山館**

しかし、本遺跡周辺には館に伴う空掘りや郭などの遺構が確認されていないため、どこが「崎山館」に相当するのかは確定されていないと言える。

### (2) 基本層序（第11図）

本調査区内の層序は次のとおりである。

Ⅰ層は表土層であるが、次の２層に細分される。

Ⅰａ層　粘性のある褐色土を基本土とし、暗褐色土を含む。柔らかくしまりのない層である。

Ⅰｂ層　粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりがない。

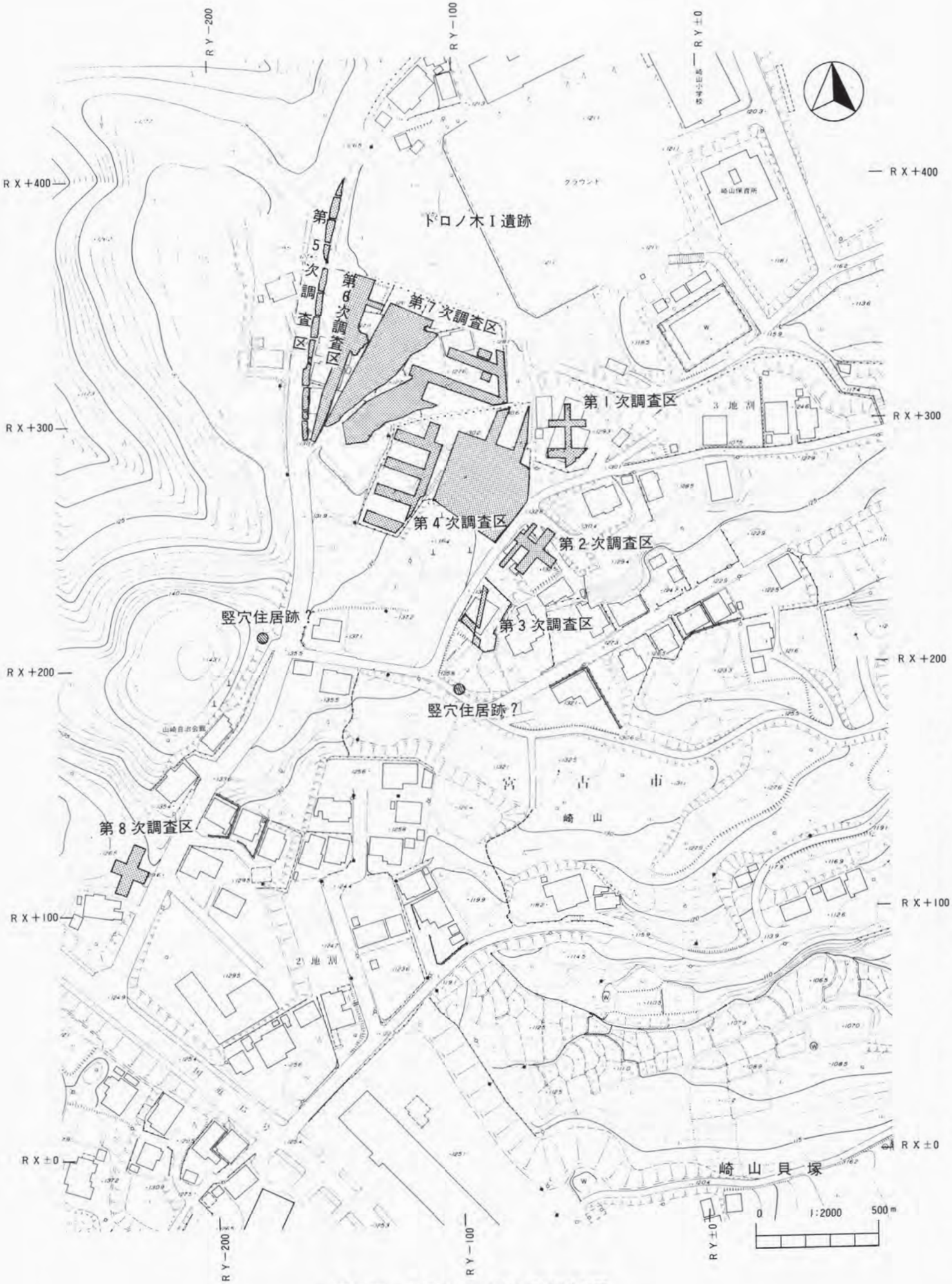
Ⅱ層　粘性のある暗褐色土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や褐色土塊を含むほか炭化物粒なども含む。柔らかくしまりがない。また、近世に伴うかと思われる陶磁器の小片や鉄片などを出土している。

Ⅲ層　粘性のある褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含む。固さやしまり具合は中程度である。縄文土器の細片が３点ほど出土している。

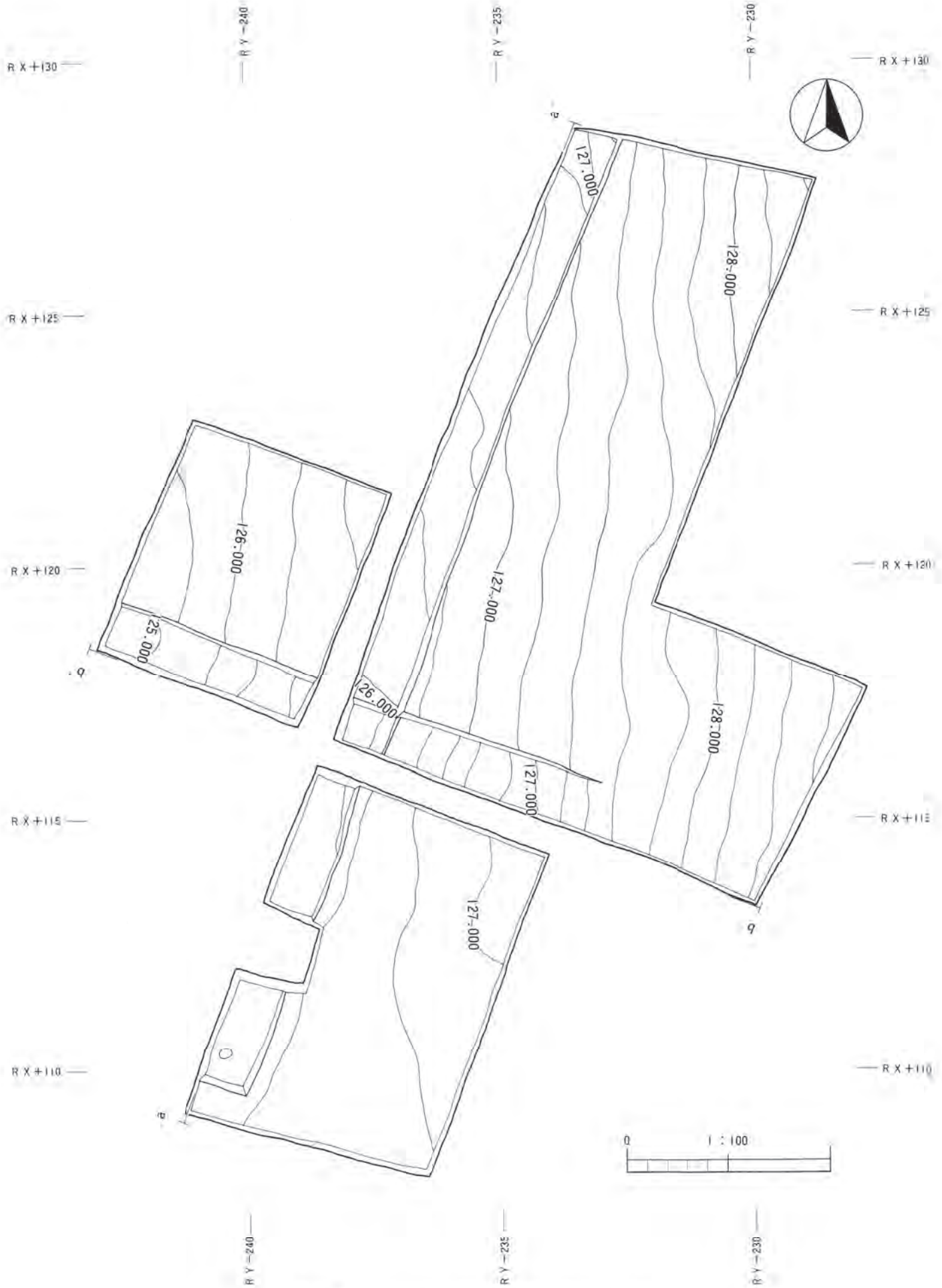
Ⅳ層　粘性のある褐色土を基本土とし、次の２層に細分される。

---

（註１）『岩手県中・近世城館跡分布調査報告書』　岩手県教育委員会　1986.3




第9図　トロノ木Ⅰ遺跡周辺地形図




第10図　トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査区全体図

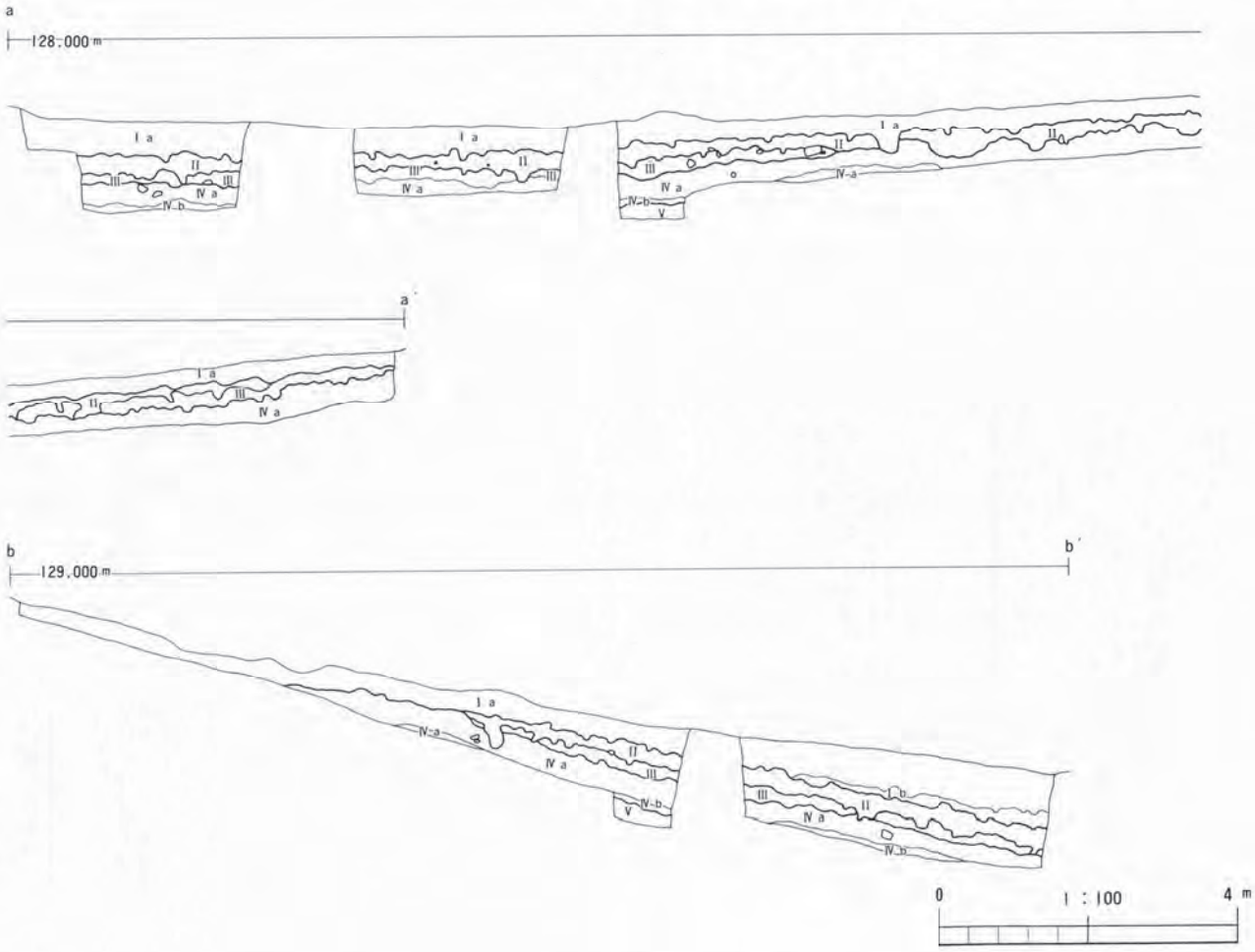
Ⅳａ層　やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を含む。固さやしまり具合は中程度である。遺物は全く含まない。

Ⅳｂ層　Ⅳａ層に似るが、全体に明るい。また、Ⅳａ層に比してやや固く、しまっている。本層の下面は漸移的に下層の地山層へ移行していく。遺物は全く含まない。

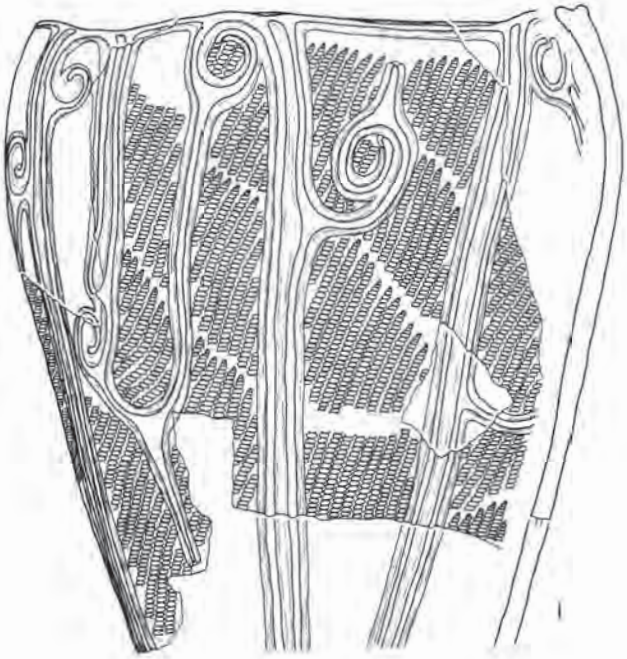
Ⅴ層　粘性のあるやや明るい褐色土を基本土とし褐色土塊や黄褐色土塊を少量含む。地山層であるが、固く、しまっている。

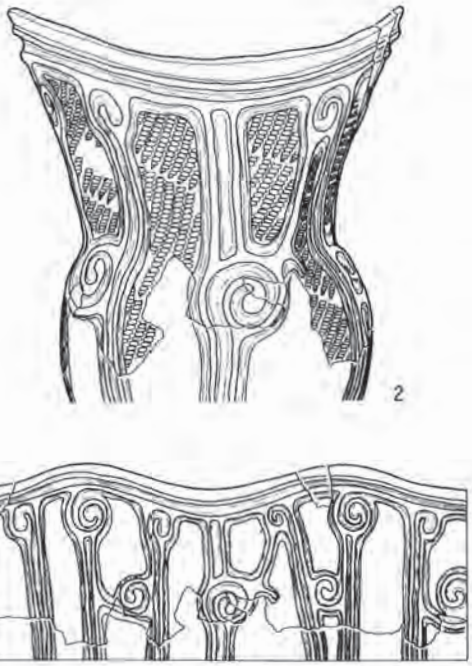
**(3) 検出された遺構と遺物**（第10図）

本調査区内で遺構は検出されなかった。また、出土遺物は前述したようにⅢ層からわずかに縄文土器の細片が出土したが、図示できるものはなかった。




第11図　トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査土層断面図





1.第1号竪穴住居跡、埋甕
2.第1号竪穴住居跡、埋土出土土器　　Scale 1:3

第12図　トロノ木Ⅰ遺跡第4次調査(昭和58年度)検出遺構遺物(『トロノ木報文89』より)

## ３．崎山貝塚第３次調査

### (1) 第１次、第２次調査の概要

崎山貝塚は、宮古市のコードＬＧ14－2079、岩手県のコードＬＧ04－2180として登録された周知の遺跡である。

第１次、第２次調査は貝塚南斜面のほぼ中央部において貝層や自然遺物包含層（混貝土層）の堆積状況・範囲・堆積した時期および構成物の内容を確認することを目的として実施した。

第１次調査

第１次調査は南斜面の中央よりやや東寄りに調査区を設定したところ、斜面の上端部に大木１式以前に伴う貝ブロック３ヶ所と大木２式～大木３式に伴う自然遺物包含層を検出している。

出土した遺物は、土器が縄文時代前期から中期にわたり、なかでも大木１式から大木３式に伴うものが最も多いようである。石器ではチョッパーに類似する礫器や断面三角形の自然礫を用いた特殊磨石のほかに石皿や砥石などが多く出土している。

骨角器はイノシシの下顎犬歯製刺突具などが少量出土している。また、同定された自然遺物は二枚貝綱１種、蔓脚亜綱１種、海胆綱１種、硬骨魚綱６種、哺乳綱５種のほかに人骨（上腕骨Ｌ、尺骨Ｒ）が出土している。人骨（尺骨）の近位端には明らかに石器によると思われる擦痕が認められ、特筆される。

第２次調査

第２次調査は南斜面のほぼ中央部に調査区を設定し、比較的規模の大きな貝層を検出した。貝層はほぼ大木１式期から大木６式期あるいは大木７ａ式期にわたり堆積しているが、周辺にも、これに前後する時期の自然遺物包含層が広く堆積している。

出土した遺物は骨角器類が注目され、釣針５点、刺突具類６点、骨針２点、へら３点、髪針？２点、垂飾品３点、環状垂飾品？１点、札状装飾品？１点、叉状角製品１点、加工痕を残す素材10点などが出土している。

同定された自然遺物は復足綱８種、二枚貝綱３種、蔓脚亜綱２種、海胆綱２種、軟骨魚綱２種、硬骨魚綱23種、爬虫綱１種、鳥綱３種、哺乳綱12種の外にヒトの臼歯などが出土している。

自然遺物のなかで最も主要なのは魚類と哺乳類であったが、魚類についてはイワシ、カサゴ科、マダイ、アイナメ、カツオ、マグロ、ブリなどが多く、他のものは非常に少ない。また、同様に哺乳類ではシカ、イノシシが多く、他のものは非常に少ない。

### (2) 調査の方法と目的（第13図、第14図）

本年度は台地上の平坦面に調査区を設定した。ここでは集落の存在が予想されていたが、具体的な遺構の配置状況や存続期間および貝層との併行関係などを探ることを目的とした。

ただし、発掘調査は遺跡の保存を前提とするものであったため、遺構は検出のみに留めて、特に必要があるものを半分だけ掘り下げることとした。

調査区の設定にあたり、地形的な制約や第１次、第２次調査区との関係から公共座標からそのまま調査区を設定するのは不都合であったために新たに調査座標を設けることとした。台地のほぼ中央に原点を設定し、台地の長軸方向をＥ－Ｗとし、これに直交する方向をＮ－Ｓとした。調査座標は真北より28°30′東へ傾いている。

また、グリッドは３ｍ四方を単位とし、グリッド名の表示については第13図の右下に般例を

示したが、原点から最も離れた隅の点をＮ－Ｓ、Ｅ－Ｗの座標で示している。つまり、原点より北へ３ｍ、東へ３ｍのグリッドをＮ３Ｅ３グリッドとし、その東隣のグリッドをＮ３Ｅ６グリッドと表示している。

調査区は、中軸線上から北へ幅３ｍのトレンチを原点より東へ54ｍ、西へ63ｍの長さで設定し、これに直交する南北トレンチをW33Line、W15Lineからそれぞれ東へ３ｍ幅とＥ３Line、E24Line、E51Lineからそれぞれ西へ３ｍ幅の計５本を設定し、遺構の検出を行っている。

**(3) 基本層序**（第15図、第16図、第17図）

調査区内で確認された層は４層に大別される。

Ｉ層は表土であるが次の２層に大別される。

Ｉａ層　遺跡全体を覆う耕作土で粘性のある暗褐色土を基本土とする。やや固いがしまりがない。

Ｉｂ層　N27W15グリッド付近でのみ確認した。Ｉａ層に類似するがやや暗い。耕作時に盛土による整地を行ったものと見られ、自然礫や礫石器などを多量に含む。

II層　粘性のあるやや暗い暗褐色土を基本土とし、黒褐色土を含む。固さやしまり具合は中程度である。近世以降と思われる陶磁器片や鉄片等が出土している。

III層　粘性のある黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を比較的多く含む。固さやしまり具合いは中程度である。

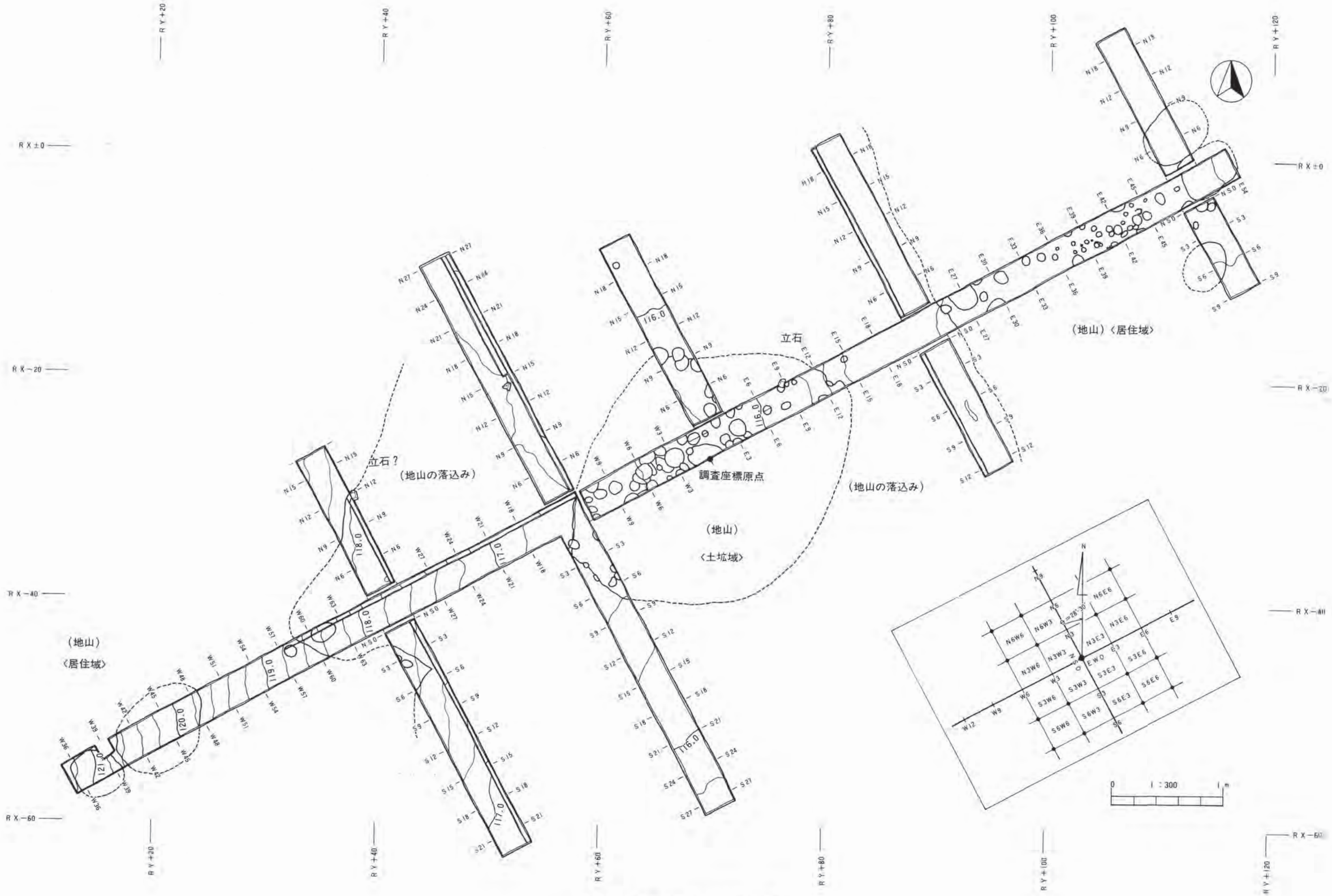
IV層　粘性のある暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを比較的多く含む。固さは中程度であるがややしまりがない。斜面部の包含層に土色や混入土の様相などが類似している。

サブトレンチにより確認したのはIII層までであり、IV層は上面を検出したのみである。したがって、IV層以下はどのような堆積状況を呈すのか不明である。

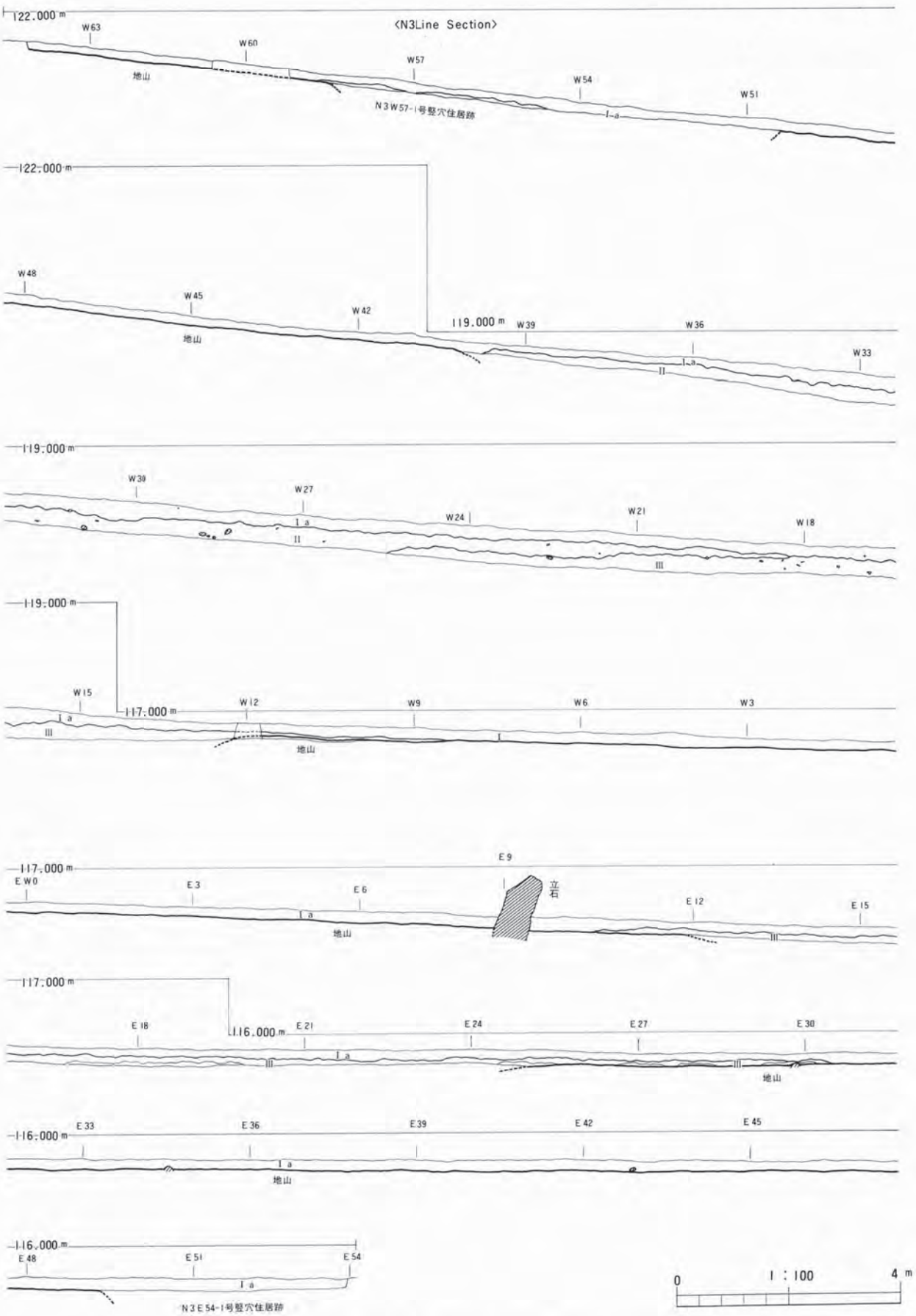
次にこれらの層の堆積する範囲であるが、Ｎ３Lineのセクションではw12付近からＥ12付近にかけて地山の高まりがありその両側（W40付近からW12付近にかけてとＥ12付近からＥ25付近にかけて）に地山の落ち込みがある。この地山の落ち込みは中央部の地山の高まりをとりまく形に分布し、これの埋土最上層としてII層とIII層が堆積する。ただし、西半部ではII層が堆積するが東半部ではこれを欠きＩ層の真下がIII層となっている。

この落ち込みの更に外側にも地山が見られる。中央部の地山が比較的粘性が弱くサラサラした感じなのに対し、外側の地山は非常に粘性が強く、固くしまっている。また、ところどころ礫層が露出しているところもある。

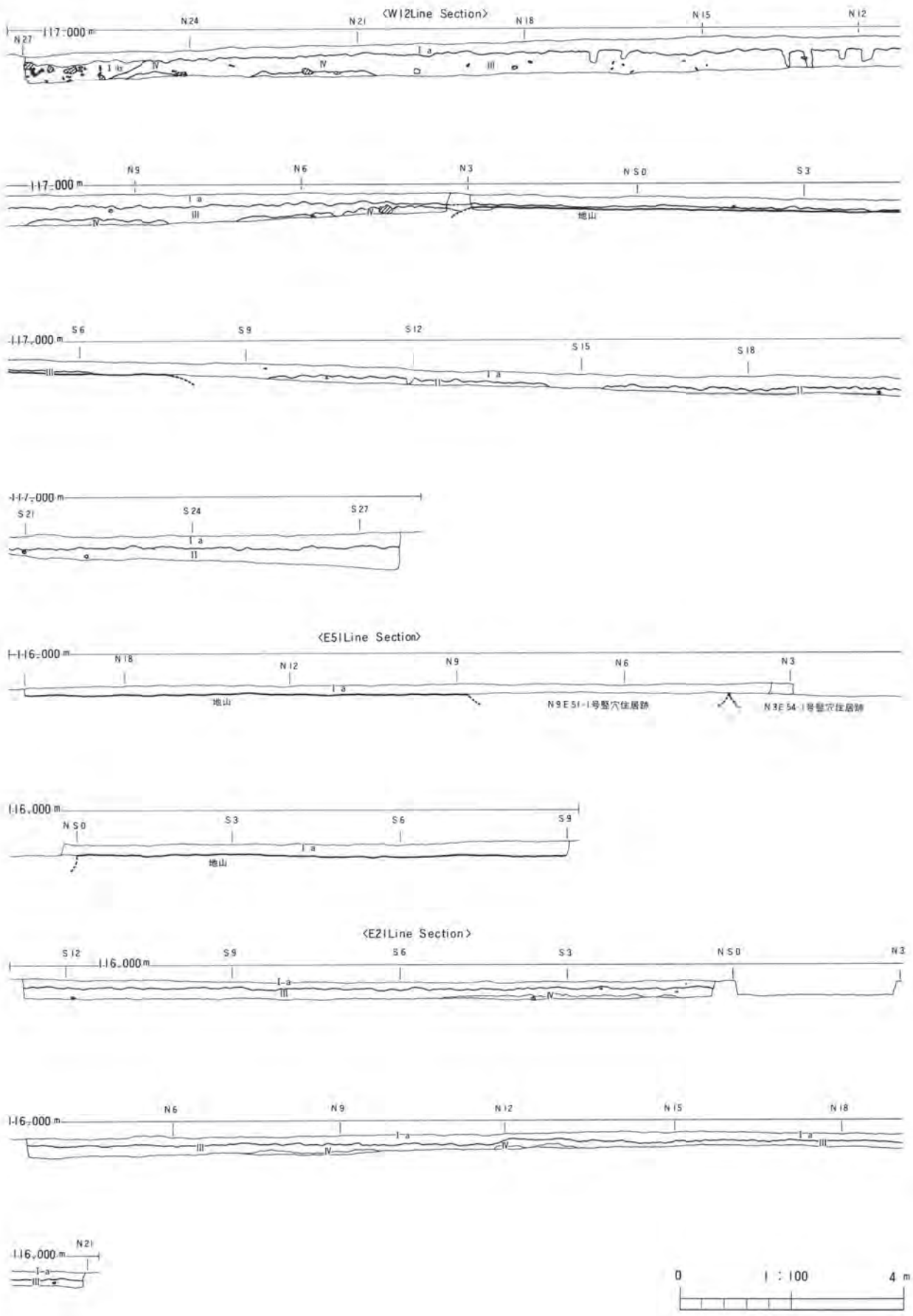
第13図　崎山貝塚周辺地形図



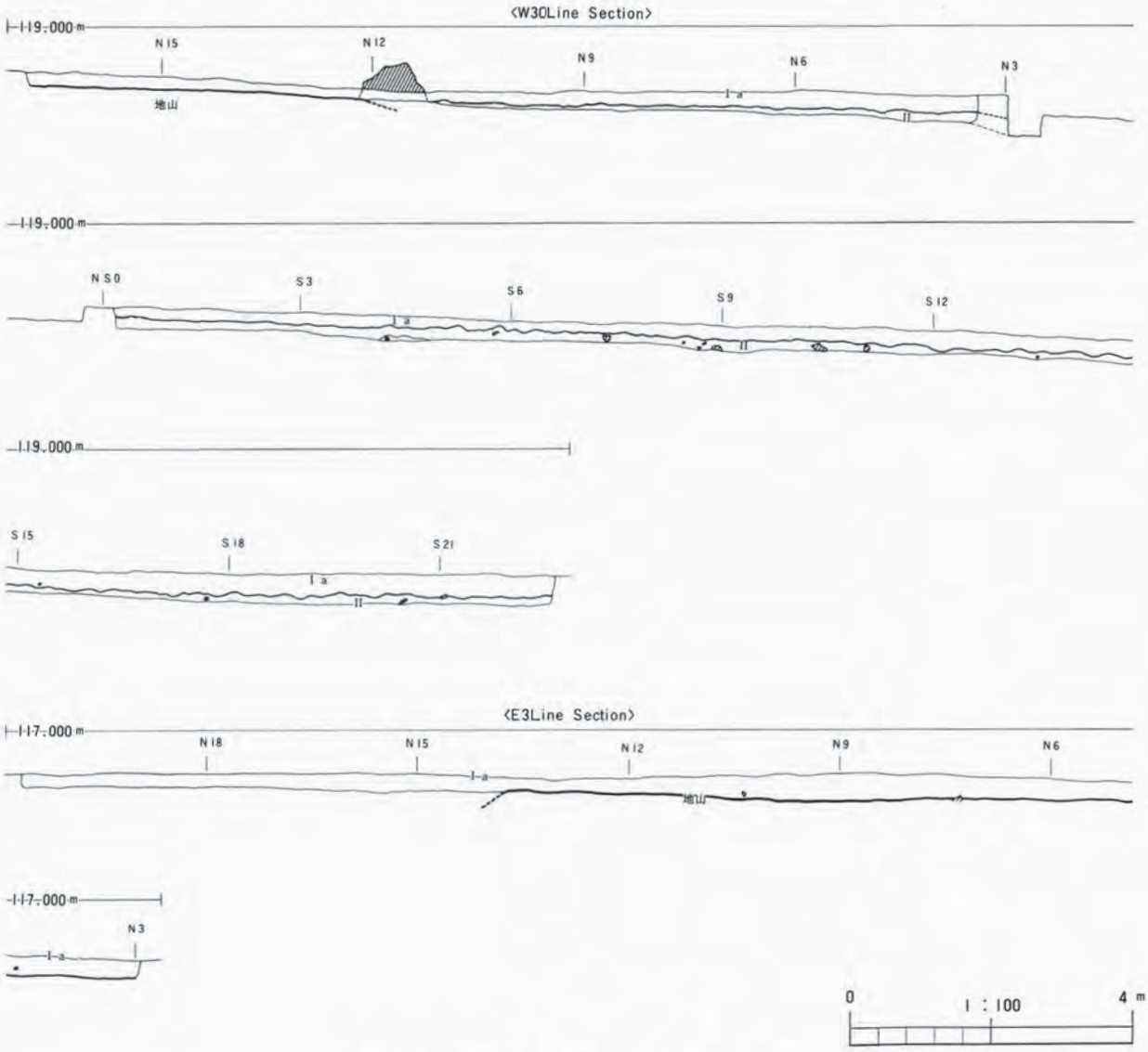

第14図　崎山貝塚第３次調査区全体図




第15図　崎山貝塚第３次調査土層断面図(1)




第16図　崎山貝塚第3次調査土層断面図(2)




第17図　崎山貝塚第３次調査土層断面図(3)

### (4) 遺構の検出状況（第14図、第18図、第19図、第20図）

前述したように調査区の中央部は表土直下に東西29m、南北23m（推定）の範囲で地山が広がっており大小様々な土坑と思われる遺構が密集した状態で検出された。これらのうちN3W3－1号土坑、N3E3－1号土坑、N3E9－1号土坑の3基を断ち割ったところN3W3－1号土坑とN3E9－1号土坑はいずれも中期末葉の大木10式期のフラスコ状土坑であった。また、前者からはムラサキインコガイを主体とする貝層が検出されている。

**フラスコ状土坑**

**貝層**

N3E3－1号土坑は浅い皿状土坑であるが、時期は特定できなかった。

これら以外の土坑は検出のみであり性格や時期は特定できないが、径1mから2m程度の円形土坑は大半がフラスコ状またはビーカー状の土坑となるものと思われる。

また、S3W15グリッド、S6W15グリッド付近には長軸1m程のだ円形土坑が検出されているが、集石と思われる礫が伴うものもあり、前2者の土坑とは性格を異にするもののようである。

この調査区中央部の土坑密集域を〈土坑域〉と呼ぶことにする。この土坑域の東半部（N3E9）には検出面からの高さ1mの立石が伴っている。

**土坑域**

**立石**

土坑域の外側には地山の落ち込みがみられ、遺構の分布が希薄となる。N21E3－1号土坑はⅣ層上面で検出した浅い皿状土坑があるが、埋土中にマグロ推骨の集積がみとめられた。

この更に外側にも地山がみられ、遺構が検出されている。E25ラインからE45ラインにかけて大小の遺構が検出されているが、特にE36ライン以東には柱穴状の小ピット・小土坑・石囲炉などが密集した状態で検出されている。これらは竪穴住居跡の床面以上が前平されたものと判断した。これに続きE45ライン以東には竪穴住居跡と思われる大きな遺構が検出されている。

また、西端部でも同様にW51ライン以西に竪穴住居跡と思われる大きな遺構を検出している。これらの遺構が分布する地区を〈居住域〉と呼ぶことにする。

**〈居住域〉**

### (5) 検出された遺構と遺物

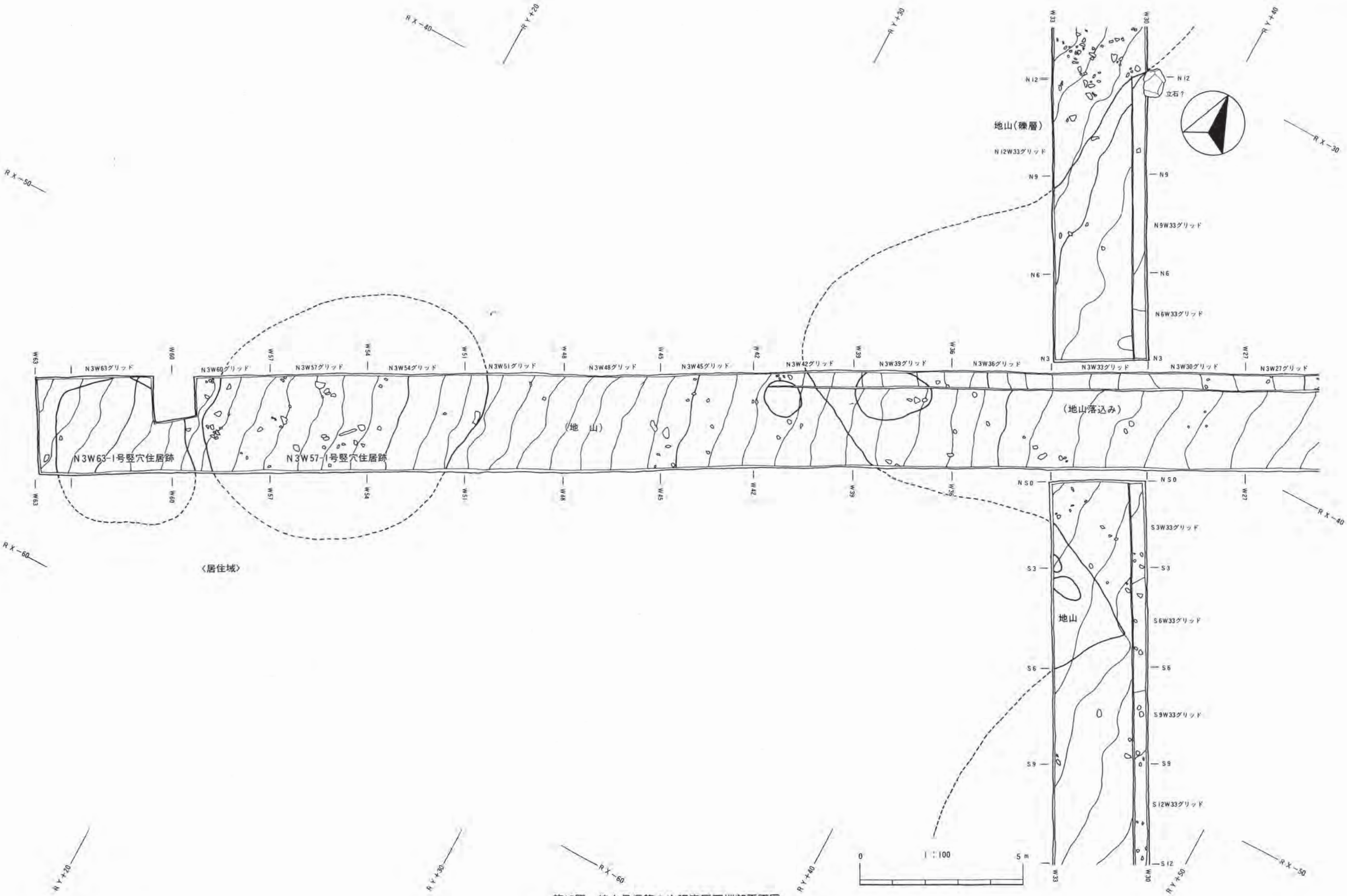
今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡と思われるもの5基、土坑跡（小ピットを含む）110基以上、石囲炉1基などである。土坑跡は未検出のものがあると思われるので実数はさらに増えるものと思われる。また、土坑跡としたものの中にやや規模の大きなものがあり竪穴住居跡となる可能性も考えられる。いずれにしろ遺構のほとんどは検出のみに留めているため大半のものは内容、性格が不明であると言わざるを得ない。ここでは断ち割り等によりある程度内容のわかるものなどを記述するに留める。

**N3W63－1号竪穴住居跡（？）（第18図）**

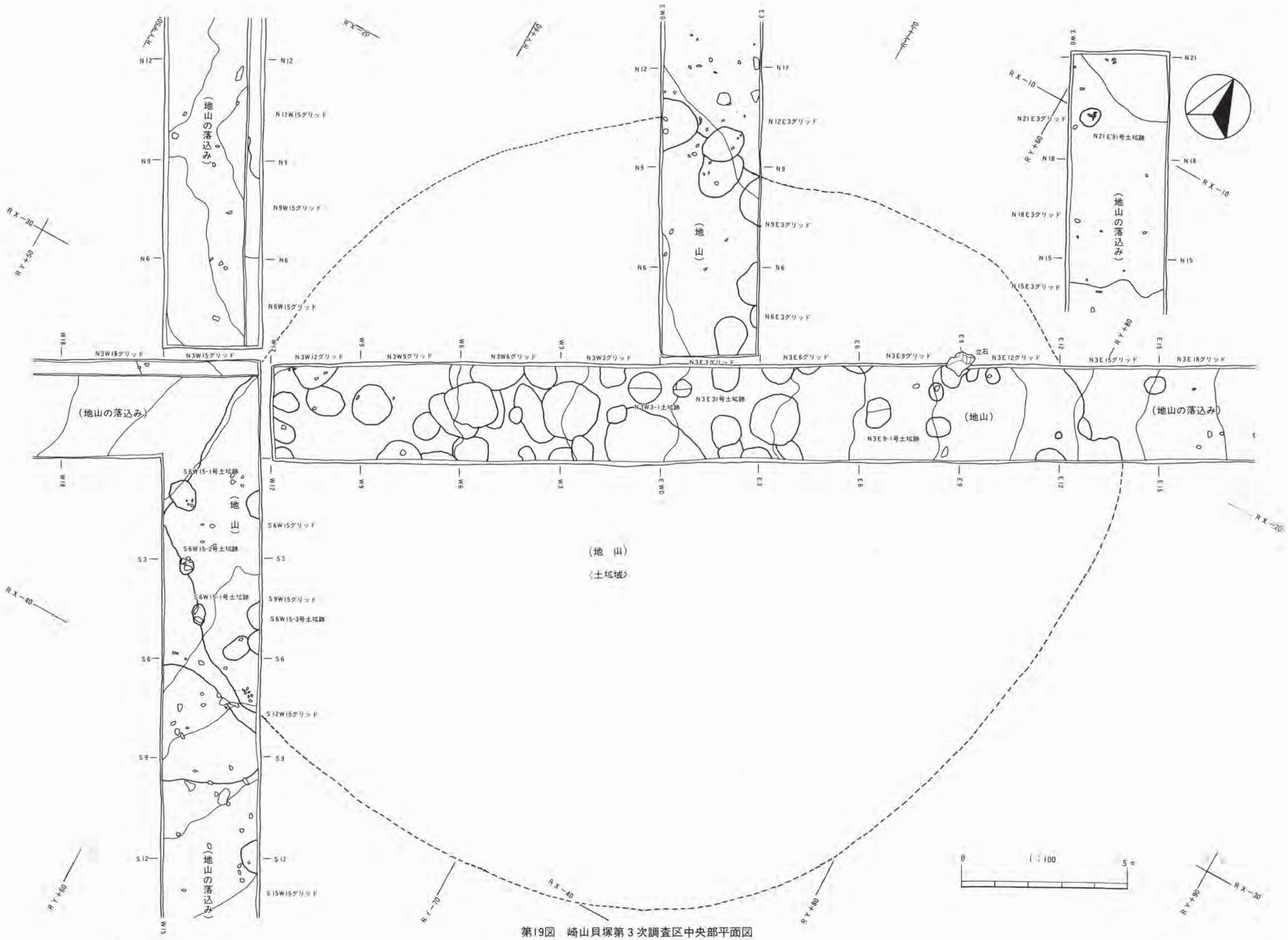
N3W63グリッドを中心に地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の東西方向で約 4.0mを計る。

付近の表土からは第24図28～30などの土器片が出土しているが大木8b式に伴うものが主体を占めるようである。

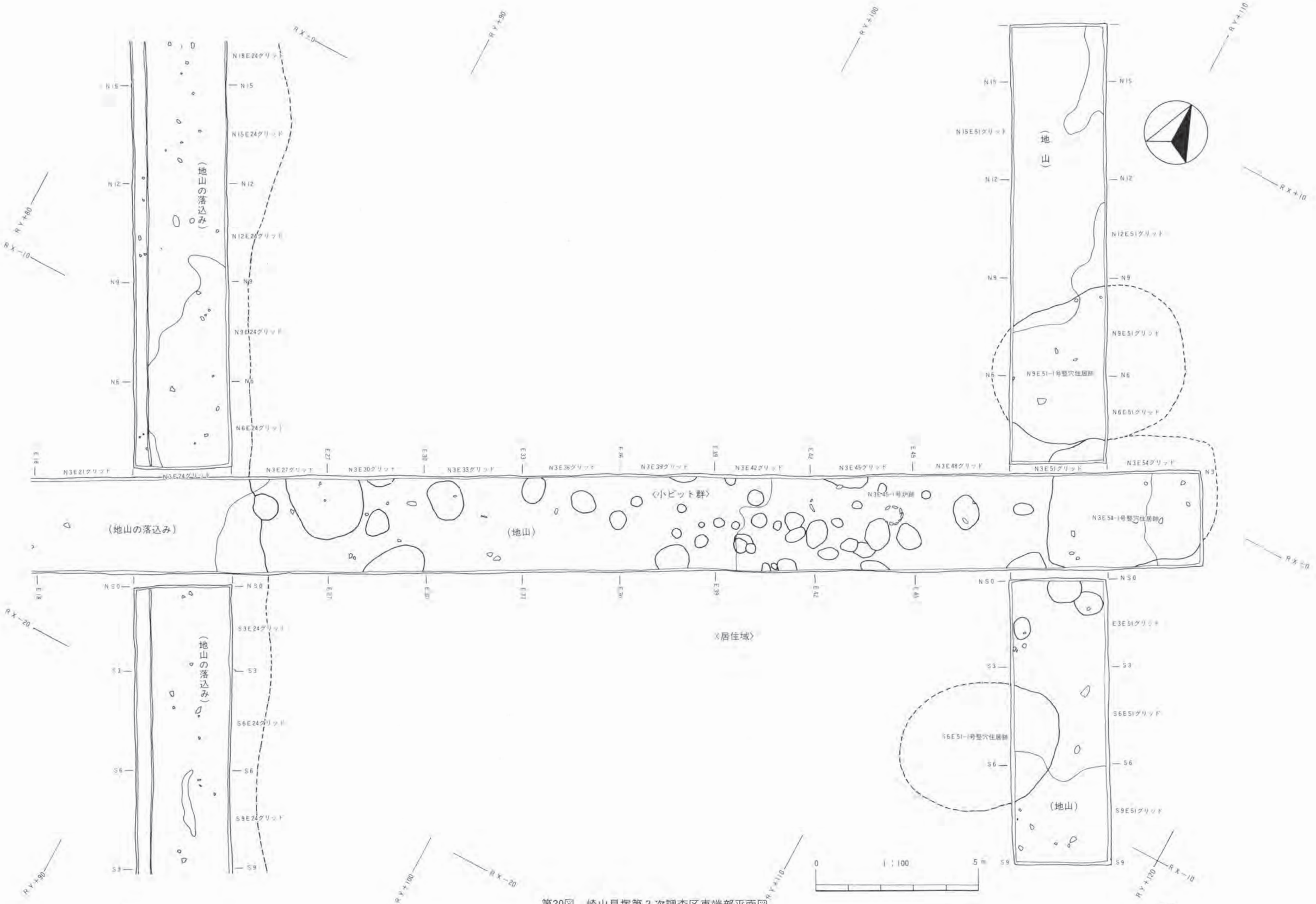
**N3W57－1号竪穴住居跡（？）（第18図）**




第18図　崎山貝塚第３次調査区西端部平面図




第19図　崎山貝塚第3次調査区中央部平面図




第20図　崎山貝塚第３次調査区東端部平面図

Ｎ３W60グリッドからＮ３W51グリッドにかけて地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の東西方向で約 8.5ｍを計る。調査区内の表土中や検出面から第24図33～39などの土器片が出土している。33～36は縄文時代前期に、37～39は中期（ほぼ大木８ｂ式）に伴うものと思われる。

**Ｎ９Ｅ51－１号竪穴住居跡**（？）（第20図）

Ｎ６Ｅ51グリッドからＮ９Ｅ51グリッドにかけて、地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の南北方向で約 4.8ｍを計る。付近からは縄文土器片が出土しているが時期は特定できなかった。Ｎ３Ｅ54－１号竪穴住居跡(?)と重複するが新旧関係は不明である。

**Ｎ３Ｅ54－１号竪穴住居跡**（？）（第20図）

Ｎ３Ｅ51グリッドからＮ３Ｅ54グリッドにかけて、地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の南北方向で約 4.0ｍ、東西方向で 4.8ｍ以上を計る。Ｎ９Ｅ51－１号竪穴住居跡(?)と重複するが新旧関係は不明である。調査区内の表土中や検出面からは大木８ｂ式～大木９式に伴う土器片が出土している。Ｎ３Ｅ51グリッドから大木９式土器片が、Ｎ３Ｅ54グリッドから大木８ｂ式破片が出土しているようである。

**Ｓ６Ｅ51－１号竪穴住居跡**（？）（第20図）

Ｓ６Ｅ51グリッドからＳ９Ｅ51グリッドにかけて、地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の南北方向で 3.6ｍをはかる。付近からは縄文土器片が出土しているが時期は特定できなかった。

**Ｎ３Ｅ45－１号炉跡**（第20図、第24図）

Ｎ３Ｅ45グリッドの地山面上に検出した。東西0.56ｍ、南北0.58ｍを計る。円形の石囲炉であるが南西側の炉石が欠落している。抜きとり穴は確認できなかった。炉床は焼成を受け非常に良く焼けている。

**小ピット群**（第20図）

Ｎ３Ｅ39グリッドからＮ３Ｅ45グリッドにかけて分布する。径 0.2ｍから 0.4ｍくらいの柱穴状ピットを呼称した。また、長軸 0.8ｍから 1.0ｍ程のだ円形土坑もこの付近に密集しているが、両者の時期や性格は異なるものかと思われる。

Ｎ３Ｅ45－１号炉跡や柱穴状の小ピットは〈居住域〉に隣接しているので、おそらくは竪穴住居跡の床面より上が耕作などにより削平されてしまったものと思われた。

調査中には、この様な相定のもとに小ピットの配置（特に炉との関係）に留意して検出に努めた結果、Ｎ３Ｅ45－１号炉跡の北から西にかけて弧状とも見える配置を認めたものの確証は得られなかった。

**N３W３－１号土坑跡**（第19図、第21図）

N３W３グリッドの地山面上に検出したが、土坑域の中央部からやや北に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、開口部径0.94mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。南東側半分を断ち割ったところ埋土中にムラサキインコガイなどにより構成される貝層を検出している。貝層上面で精査を中止したため底面の状況などは不明である。

埋土はA層・B層・C層・D層・E層・F層およびG層（貝層）の７層に大別される。

A１層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし褐色土塊などを含む。土器片や炭化物粒なども含むがあまり多くない。やや柔らかくあまりしまりのない層である。

B層は粘性のあるやや明るい褐色土（地山に類似）を基本土とし黄褐色土塊や褐色土塊などを多く含むが、炭化物粒はほとんど含まない。全体にやや柔らかくあまりしまりのない層である。混入土の状況などにより４層に細分した。

B１層は黄褐色土の混入が最も多く、土器片や炭化物粒をわずかに含む。B２層はB１層に類似するが全体的にやや暗い。B４層は黄褐色土を含まず暗褐色土などを含む層でB層中最も暗い層である。

C層は粘性のある暗褐色土～褐色土を基本土としやや明るい褐色土塊や黄褐色土塊などを含む。全体に柔らかくしまりのない層である。混入土や混入物の状況により３層に細分した。

C１層は暗褐色土を基本土とし炭化物を多量に含む。C２層は褐色土を基本土とし、他の２層より明るい。炭化物粒を少量含む。C３層は暗褐色土を基本土とし、炭化物粒をほとんど含まない。

D層は粘性のある褐色土（地山に類似）を基本土とし暗褐色土塊などを含む。柔らかくしまりのない層である。

D２層はシルト質の褐色土を基本土とし、ほとんど混入土を含まない。

E１層は粘性のあるやや暗い暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。柔らかくしまりのない層である。

F１層はシルト質のやや明るい褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりのない層である。

**貝層**

G１層はムラサキインコガイなどにより構成される貝層である。貝の間にはしまりのないやや明るい暗褐色土などを含むほか多量の炭化物粒を含む。上面を検出したのみで、層厚や以下の層の堆積状況は不明である。

**出土遺物**（第25図１～５）

１は鰭状隆帯の両側に連続する円形刺突文を施すもの。２は頸部に横位に施した沈線より上を擦り消すもの。５は磨消技法によるものである。これら３点は大木10式に伴うものである。

３・４は隆沈線により施文され、大木８ｂ式に伴うものである。４は口縁部把手の破片である。

**自然遺物**

G１層上面をクリーニングした土壌サンプルを１mmメッシュの篩（ふるい）で水洗選別して得られた動

物遺存体を次のとおり同定した。

I　軟体動物門　　MOLLUSCA

i）腹足綱　　GASTROPOPA

1．タマキビガイ　　Littorina brevicula (PHILIPPI)　　1

ii）二枚貝綱　　BIVALBIA

1．イガイ　　Mytilus corscus GOULD　　L 1

2．ムラサキインコガイ　Septifer (Mytil is epta) Virgatus (WIEGMANN)

R 7・L 6

II　節足動物門　　ARTHROPODA

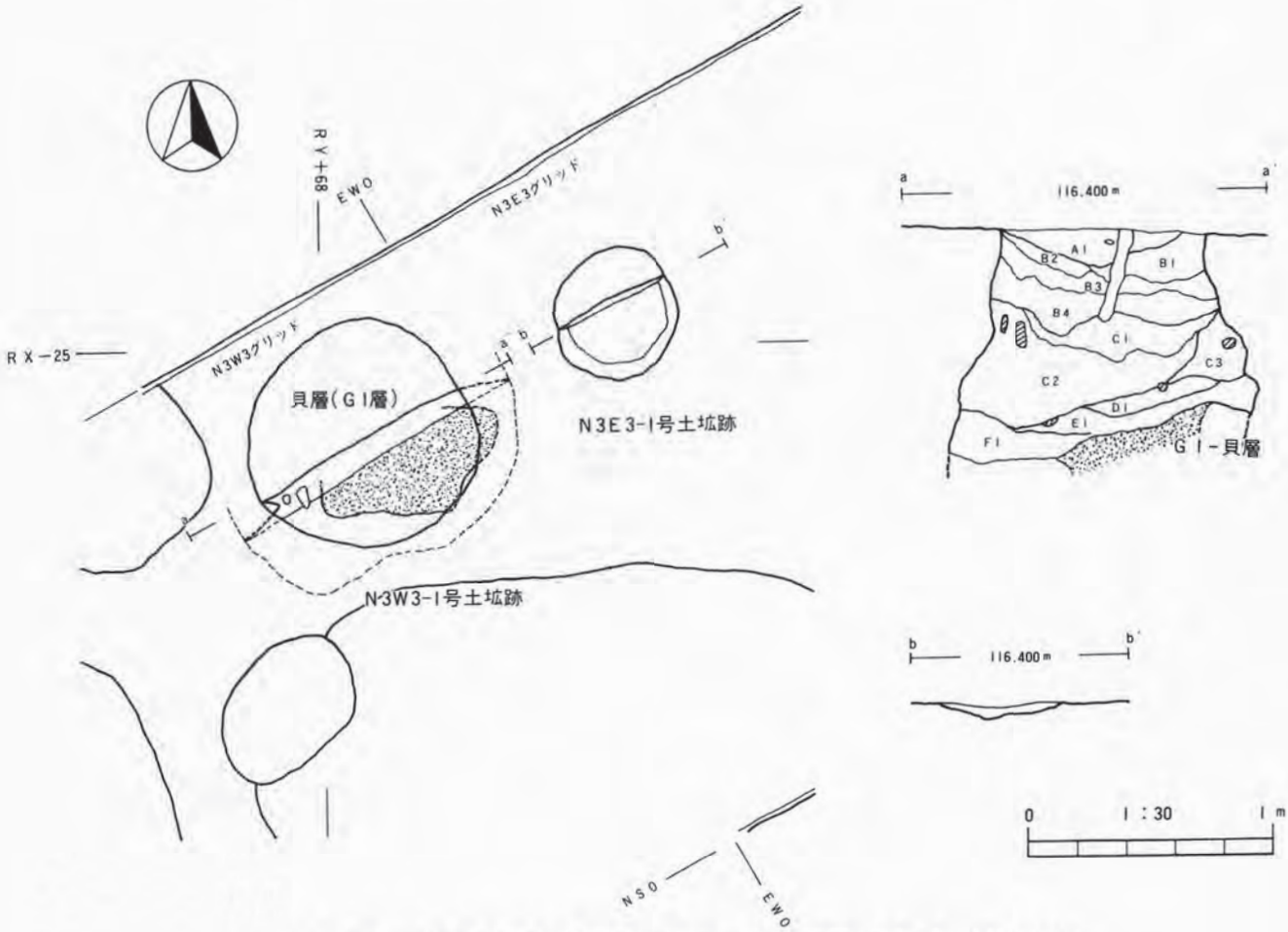
i）蔓脚亜綱　　CIRRIPEDLA

1．チシマフジツボ　　Balauus cariosus (PALLAS)　　(+)

貝層の主体を成す種はムラサキインコガイでイガイがこれに次ぐようである。ただし、実際の組成比率を反映しているかどうかは疑わしい。他の種は少ないようである。

これ以外にもＦ１層中から貝殻片や骨片を検出している。また、Ｃ２層からＤ２層にかけても微量の貝殻片を含むが、サンプリングの際に混入した可能性もある。

植物遺存体ではＣ１層からＧ１層にかけて、クルミ（Juglaus sp.）が出土している。最も破




第21図　崎山貝塚第3次調査N3W3−1号土坑跡・N3E3−1号土坑跡

片数の多いのはＣ１層とＣ２層であるが、小片が多く個体数の算定はできなかった。

**Ｎ３Ｅ３－１号土坑跡**（第19図、第21図）

Ｎ３Ｗ３－１号土坑跡の北東 1.2ｍに位置する。地山面上で検出した浅い皿状の土坑である。平面形はほぼ円形で径 0.5ｍ、深さ0.05ｍを計る。

埋土は単層で、暗褐色土を基本土とし褐色土塊などを多く含む。柔らかくしまりがない。遺物は出土していない。

**Ｎ３Ｅ９－１号土坑跡**（第19図、第22図）

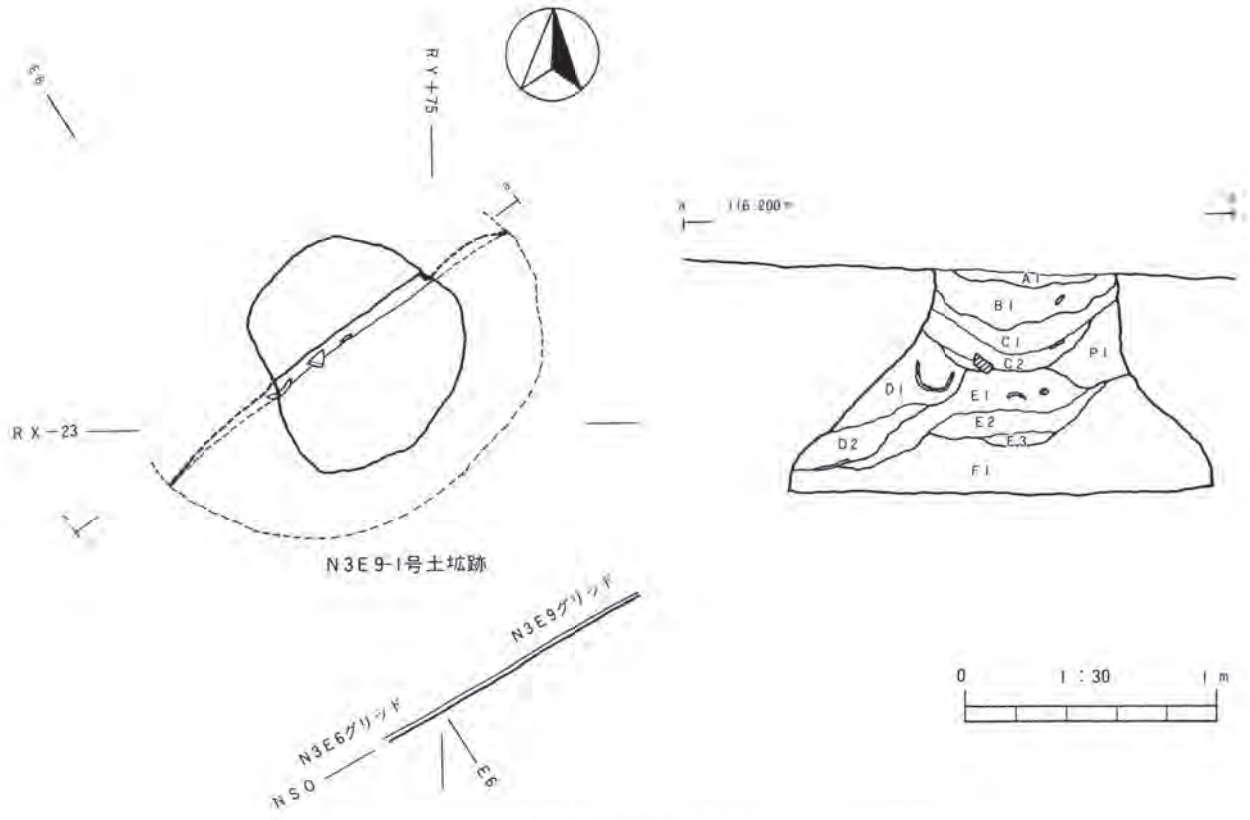
Ｎ３Ｅ９グリッド西半部の地山面上に検出し、南東側半分を断ち割っている。平面形はやや不整の円形で、断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦であるが柱穴等の付属施設は検出されなかった。

埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層・Ｅ層・Ｆ層の６層に大別される。

Ａ１層は粘性のある暗褐色土を基本土とし、わずかに褐色土塊などを含む柔らかくしまりのない層である。炭化物粒を少量含む。

Ｂ１層は粘性のある褐色土を基本土とし、わずかに黄褐色土塊などを含むやや柔らかくしまりのない層である。炭化物粒を少量含む。

Ｃ層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし褐色土塊を微量含む柔らかくしまりのな




第22図　崎山貝塚第３次調査Ｎ３Ｅ９－１号土坑跡

い層である。３層に細分されるが、Ｃ２層が最も明るい。また、全層とも炭化物粒を多く含むがＣ３層が最も多い。

Ｄ層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む柔らかくしまりのない層である。炭化物粒を多く含む。２層に細分されるがＣ２層は混入土を多く含む。

Ｅ層は粘性のある暗褐色土～褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを含むやや柔らかくしまりのない層である。３層に細分されるが、上層から下層へ次第に明るくなる。また、炭化物粒の含有量はＥ１層が最も多いが下層へ次第に少なくなる。

Ｆ１層は底面に堆積する厚い層である。粘性のある黄褐色土（地山に類似）を基本土とし、褐色土塊を微量含む層で、固さやしまり具合は中程度である。

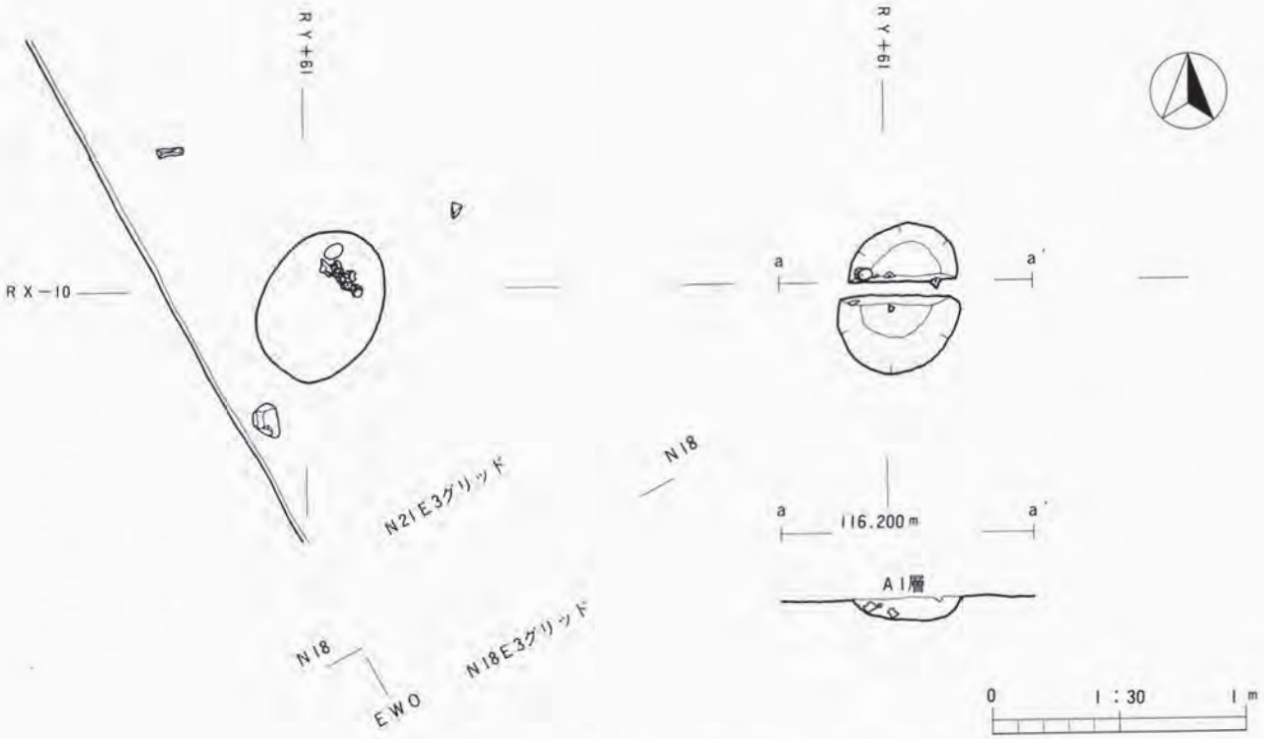
**出土遺物**（第25図６～９）

６は口縁部がわずかに外反する深鉢で、体部に磨消し技法によりＬ文字(?)を施文する。無文帯の端部には鰭状隆帯が施されている。７は頸部から体部にかけて屈曲する深鉢である。口縁部文様帯にはノ字状の鰭状隆帯が施される。また、口縁部文様帯の下端には円形の連続刺突を伴う隆帯が横位に施される。８、９は体部の破片であり、いずれもＲの撚糸文を地文としている。

**N21W３－１号土坑跡**（第19図、第23図）

N21W３区西端部のⅣ層上面に検出した。平面形はだ円形を呈する浅い皿状の土坑で、南北0.6ｍ、東西0.45ｍ、深さ0.1ｍを計る。

埋土はＡ１層のみである。Ａ１層は粘性のある暗褐色土を基本土とし、少量の黒褐色土塊な




第23図　崎山貝塚第３次調査N21W３－１号土坑跡

どを含む。やや柔らかくしまりのない層である。

**自然遺物**

埋土中から縄文土器片が出土しているが磨滅しており時期を特定できなかった。

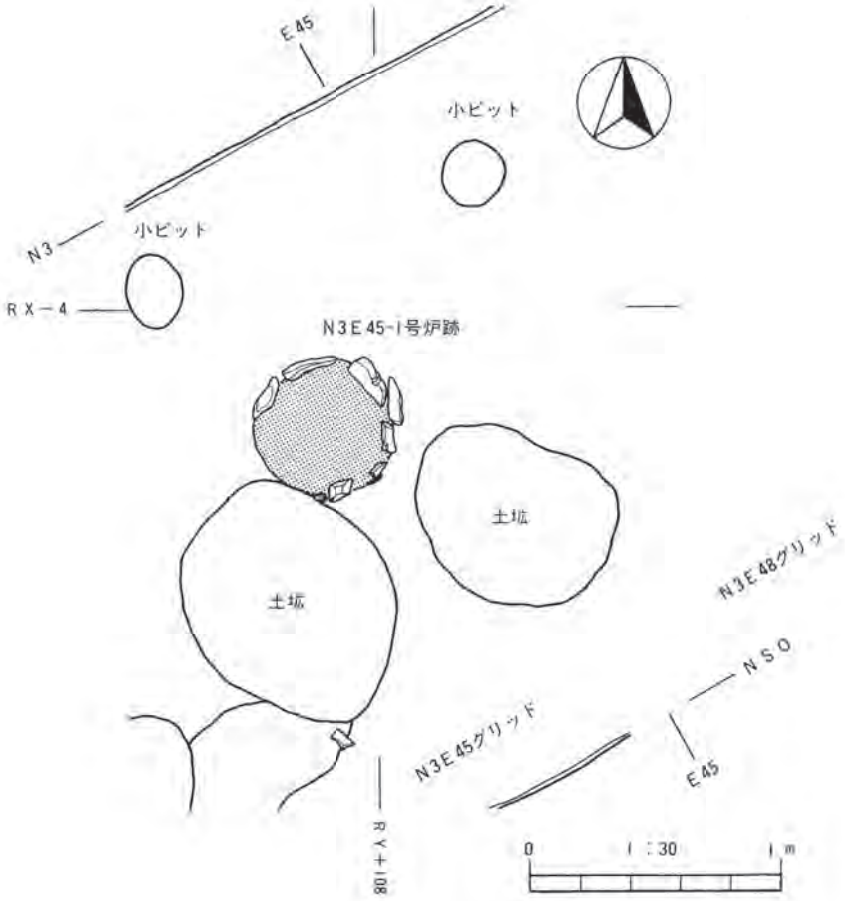
また、埋土の北半部を中心に保存状態の良好なマグロ椎骨の集積がみられた。このため土坑の埋土をすべて採集して持ち帰り、篩い分けを行った。

マグロ（Thunnus sp.）は、クロマグロかと思われる大形の個体で、腹椎が1点、尾椎が10点出土しているが何個体分であるのかは不明である。

尾椎のなかには何らかの刺突具による径4㎜ほどの貫通孔を有するものが6個あり、他のものもすべて欠損している。貫通孔は椎骨の臼部を貫通するものと、側面を貫通するものの2種がみられる。これらは解体後に穿たれたものかと思われる。

タイ類（Pagrus sp.）は右主上顎骨が1点出土している。マダイかと思われるが端部を欠くので不明である。これら2種の他は貝殻片、骨片など一切出土していない。

この土坑を覆うⅢ層も一部篩い分けを行ってみたところ、骨片や貝殻片を微量含んでいたが同定のできるものはなかった。




第24図　崎山貝塚第3次調査N3E45－I号炉跡

### (6) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文時代前期から晩期、さらには弥生時代にまでも及ぶが主体となるのは縄文時代中期のものである。

出土状況は、居住域や土坑域などの遺構の密集する地点で出土量が多く、遺構の希薄な地点でやや少なくなる傾向がみられた。

層位的にはⅠ層（表土）から出土したものが最も多い。Ⅱ層は縄文土器片などの他に近世かと思われる陶磁片などが出土している。Ⅲ層は縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺物がわずかではあるが出土している。

#### (a) 土器（第25図～第27図）

1～9は土坑に伴ったもので前述してある。11～27はN3E51－1号竪穴住居跡(?)に伴う、あるいは周辺から出土したものである。11、12は同一個体かと思われるが大木9式に伴うもので、隆起線の両側に幅の広い沈線状の磨消帯が伴う。口縁部文様帯は構成されず、口縁部から直接体部文様帯となっている。13～16、18～20、22、24～27は隆沈線により渦巻文や懸垂文などを施すもので、大木8b式に伴うと思われる。27はつば付土器の把手部の破片である。21はだ円形の連続刺突文を施すもので大木8b式～大木9式に伴うと思われる。23はキャリパー形深鉢かと思われる破片で大木8a式～大木8b式に伴うと思われる。

28～30はN3W63－1号竪穴住居跡(?)付近から出土したもので、沈線や隆沈線により施文され大木8b式に伴うと思われる。

33～39はN3W57－1号竪穴住居跡(?)付近から出土したものである。33～36は縄文時代前期に伴うと思われるものであるが、37～39は大木8b式に伴うと思われるものである。

40～151 は遺構外から出土したものである。40は沈線により施文され、縄文時代中期中葉に伴うと思われる。

41、43は弥生時代に伴うと思われる高杯の破片である。 **弥生時代**

42は大洞A′式または弥生時代に伴うと思われる高杯が浅鉢の破片である。

44、46～49は縄文時代晩期に伴うと思われる。 **縄文時代晩期**

44は大洞A′式に伴うと思われる高杯の脚部破片である。46、47は大洞A式～大洞A′式に伴う壺の口縁部破片である。48、49は大洞B－C式に伴うと思われる深鉢の破片である。

45、50～65は縄文時代後期に伴うと思われるものである。 **縄文時代後期**

51～59は沈線により曲線的な文様を施すものを一括した。51、52は同一個体かと思われるもので、沈線により波状文を施す。

45、61、62は数条の平行沈線を施し、幅5㎜程度の帯縄文を直線的に施すものを一括した。

45、62は帯縄文の途中に孤状の沈線を配し長楕円文をつくっている。

50は外反する口縁部の破片であるが、口縁部に平行する沈線を配し、上位を縄文帯とし、下位を無文帯としている。体部の文様については不明である。

60、64は壺のような器形の肩部破片である。隆起線により施文される。

65は注口土器や壺のような器形で胴が強く張り出すものの底部破片であるが底径が極めて小さい。

**縄文時代中期**

66～143 は縄文時代中期に伴うと思われるものである。

66、68は大木10式に伴うと思われるもので鰭状隆帯などを施文する。

67、69～76、80は磨消し技法による曲線的な区画文を施すものなどで、ほぼ大木10式～大木9式に伴うものと思われる。

77～88は磨消し技法により、縦位のだ円形区画文などを施すもので大木9式に伴うと思われる。79、81は隆起線を使用するもの、85は区画文内部に連続刺突文を施すものである。83は底部の破片である。

89～137 は隆沈線や沈線などにより渦巻文、懸垂文などを施文するもので大木8ｂ式に伴うと思われる。今回の調査では最も出土点数が多かった。器形を大まかに分類すると、口縁部の内湾する大形の深鉢（89、90、102、111など）、口縁部の外反する大形の深鉢（92～94など）口縁部が真直あるいはわずかに外（内）傾する大形の深鉢（95～102など）、口縁部の内湾する中～小形の深鉢（106など）、口縁部の外反する中～小形の深鉢（104、108など）となるが、浅鉢などは欠落しているようである。

口縁部は平縁のものが最も多いが、90、91のように山形の大波状口縁となるものや、99、100のように台形の波頂部をもつものなどもある。

モティーフは前述したもののほかに、132のように平行沈線によりU字形の施文をするものや134のように沈状(?)の文様を施文するものがある。また、123は隆沈線を横位に施すが、キャリパー形深鉢となる可能性もある。

これらは 123など一部のものを除いて大木8ｂ式の最も新しいタイプのものである。

138～140はほとんど調整されない隆起線を施文するもので大木8ａ式に伴うと思われる。

138、139は口縁部の外反する小形の深鉢で、いずれも口縁に平行した横位の隆起線が施される。140は口縁部がわずかに内湾する小形の深鉢で、隆起線により円文などを施す。

141、142は口縁部を複合（折り返し）とし、縄文原体の圧痕を施すものである。141は斜位に、142は口縁に平行して平痕を施す。これらは大木7ｂ式に伴うものと思われる。

143は口縁が波状を呈するもので、口縁に沿った山形の平行沈線文や渦巻文などを施し、大木7ａ式に伴うものと思われる。

**縄文時代前期**

144～150は縄文時代前期に伴うと思われるものである。

144は口縁部の波頂部に円形のボタン状貼付を施し大木5式に伴うものと思われる。

145～147は胎土に繊維を含まない土器で地文だけのものである。145は強く屈曲する器形のもの、146は結束のある羽状縄文を施すもの、147は撚糸のような地文を施すものである。

148～151は胎土に繊維を含む土器である。148は不整撚糸を施すもの、149は押引きによるもの、150はＬ－Ｒ単節斜縄文を施すもの、151はＲ撚りの所謂「ぴっちり縄文」を施すものである。148はほぼ大木2式に、他のものは大木1式以前の土器型式に伴う。

152は円形の装飾を持つものであるが、裏面の状況により土器等の本体より剝落したものと思われる。

第25図　崎山貝塚第3次調査出土土器(1)

第26図　崎山貝塚第3次調査出土土器(2)

第27図　崎山貝塚第3次調査出土土器(3)

(b) **石器**（第28図～第33図）

今回の調査区内から出土した土器は前述したように縄文時代前期～弥生時代にわたる。石器については個々の時期を特定することが困難であるため一括して記述する。また、定形的なものはほとんど図示したが、使用痕のある剥片の一部と剥片のすべてをはぶいた。様々な器種のものがあるが、調査面積の割には出土量が少ないかもしれない。

**剥片石器**（1～26）

出土した剥片石器は石槍、石鏃、金錐、石匙、掻器、削器および使用痕のある剥片などである。

石槍（1、2）　　2点とも柳葉状を呈する。1はやや細味の先端部破片で2はやや幅の広い基部破片である。

石鏃（3～10）　　3、4、6は凹基で、先端部から基部まで直線的な側縁となる。3は両面に、6は片面に第一次剥離面を残す。5も凹基であるがわたくりの深いものである。7はやや不整形であるが平基の三角形鏃である。片面に大きく第一次剥離面を残す。8は基部を一部欠くが、ゆるやかに膨らむ凸基で先端部から基部まで直線的な側縁となる。9、10は有茎であるが、9は茎部の作り出しがやや不明瞭となるもの、10は二等辺三角形の尖頭部に茎部がつくもので尖頭部と茎部が極めて明瞭なものである。

石錐（11～13）　　穿孔部とつまみに適した基部から成り、ほぼ全面を調整を施すもの（12）、基部にも調整を施すもの（13）の2種に分けられる。

石匙（14）　　所謂「横形石匙」であるが、つまみ部が中央よりやや偏する。下端部を片面調整し、掻器様の刃部を作り出している。周縁の調整は、つまみ部を除き概して雑であるため、両面とも第一次剥離面を大きく残している。

掻器（15～17）　　定形的な掻器（エンドスクレーパー等）ではないが刃部の形態から掻器とした。いずれも両面に大きく第一次剥離面を残す。下端部に剥片自体の屈曲を利用し、わずかに調整を加えただけの刃部を持つ。

削器（18～23）　　形態や調整方法など一様ではないが、側縁に刃部をもつものを一括した。18は両面調整により周縁を調整するものであるが、片面に自然面を、もう一面に第一次剥離面を大きく残す。19は側縁の下半から下端部にかけて調整するものであるが、欠損のため全体の形状は不明である。20、22、23、26は側縁にわずかな調整を加えただけのものであり、各々の形状は不定形である。21は両側縁に片側から調整を施すもので、下半部を欠失する。

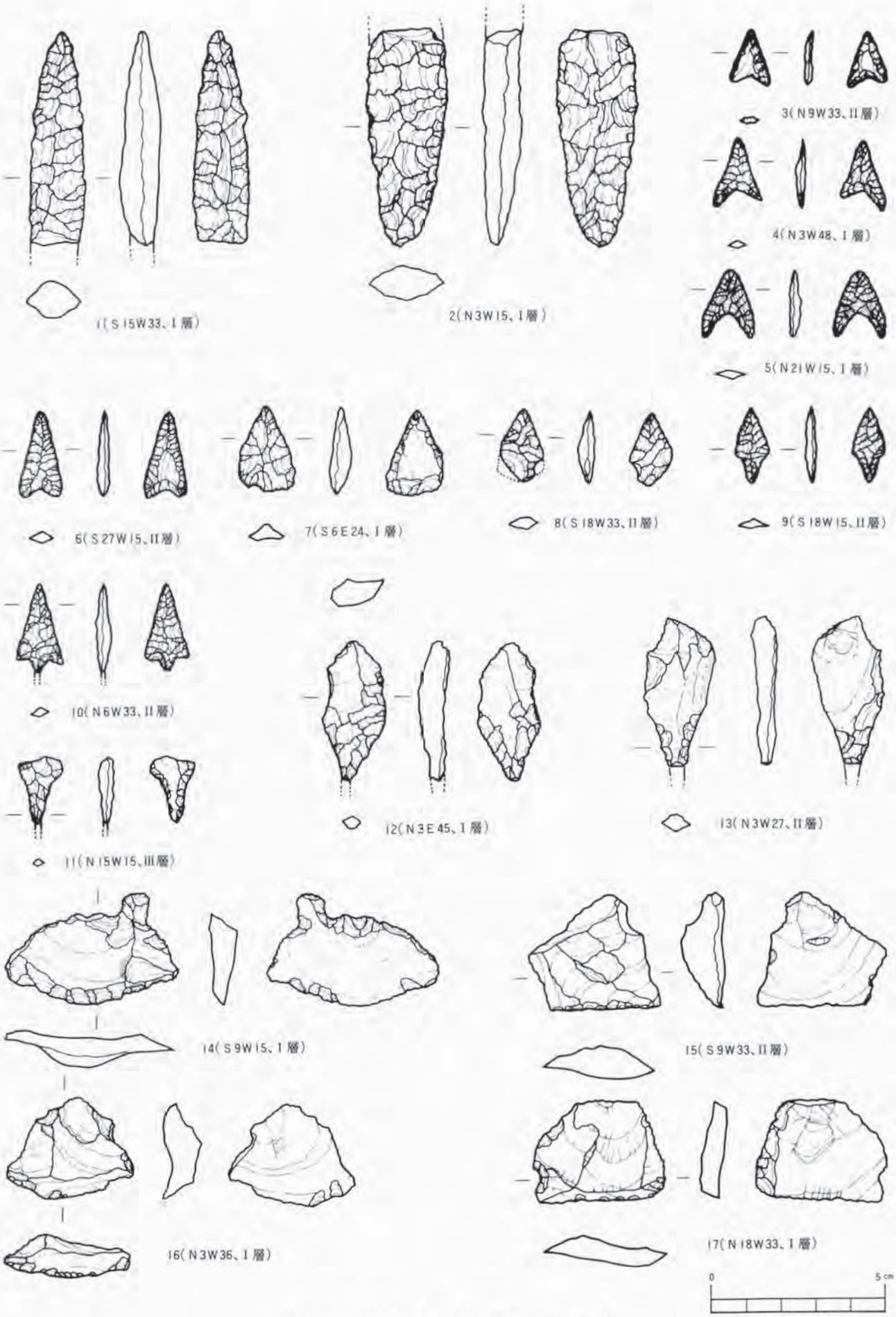
使用痕のある剥片（24、25）　　図示したものは2点のみであるが、これ以外にも多数出土している。

24、25は断面三角形の剥片を利用するもので、側縁に使用痕と思われる細かい剥離が伴う。

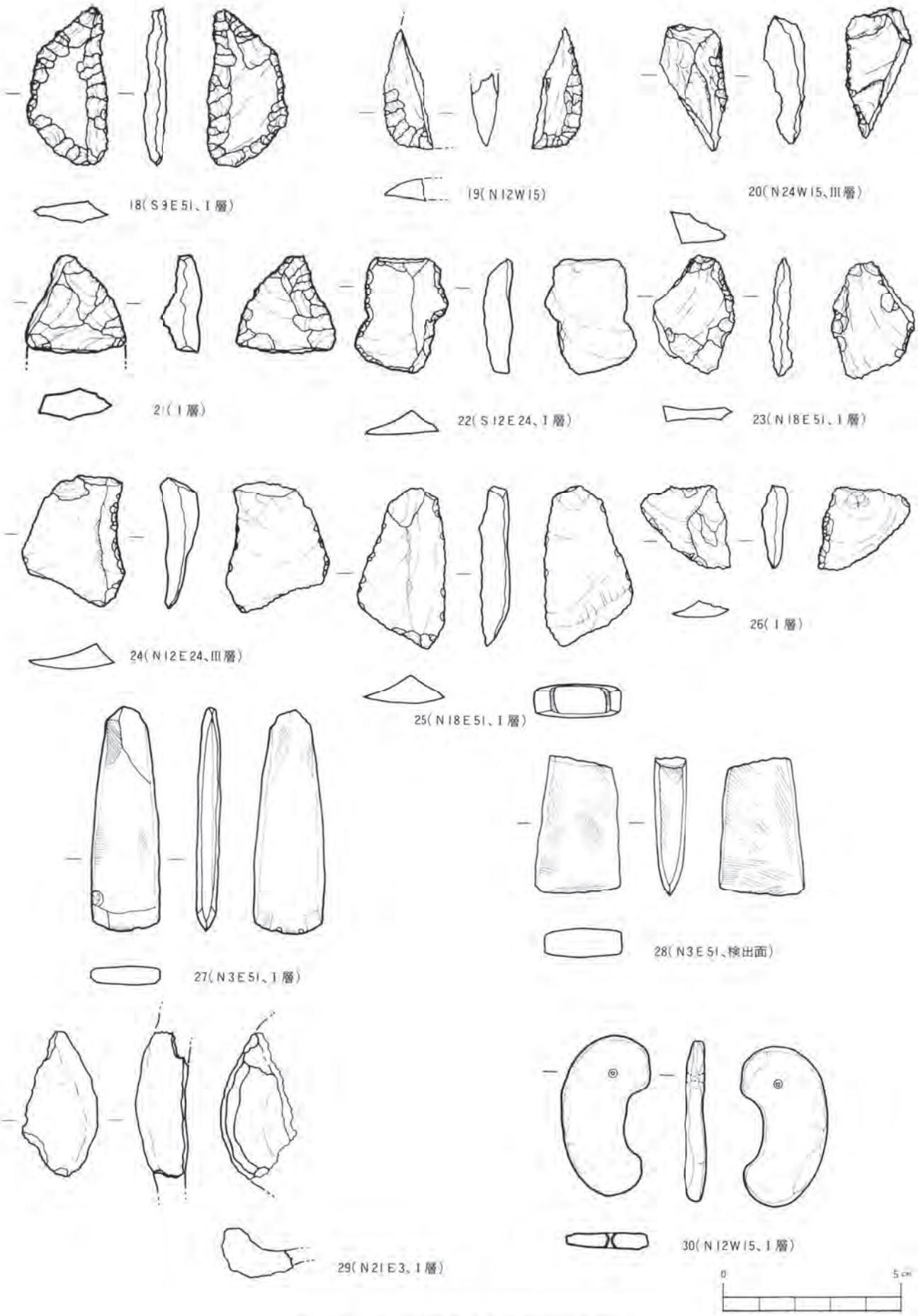
**礫石器**（27、28、31～57）

出土した礫石器は小形磨製石斧、磨製石斧、打製石斧、敲打磨石類、敲石、凹石、砥石、石皿などである。

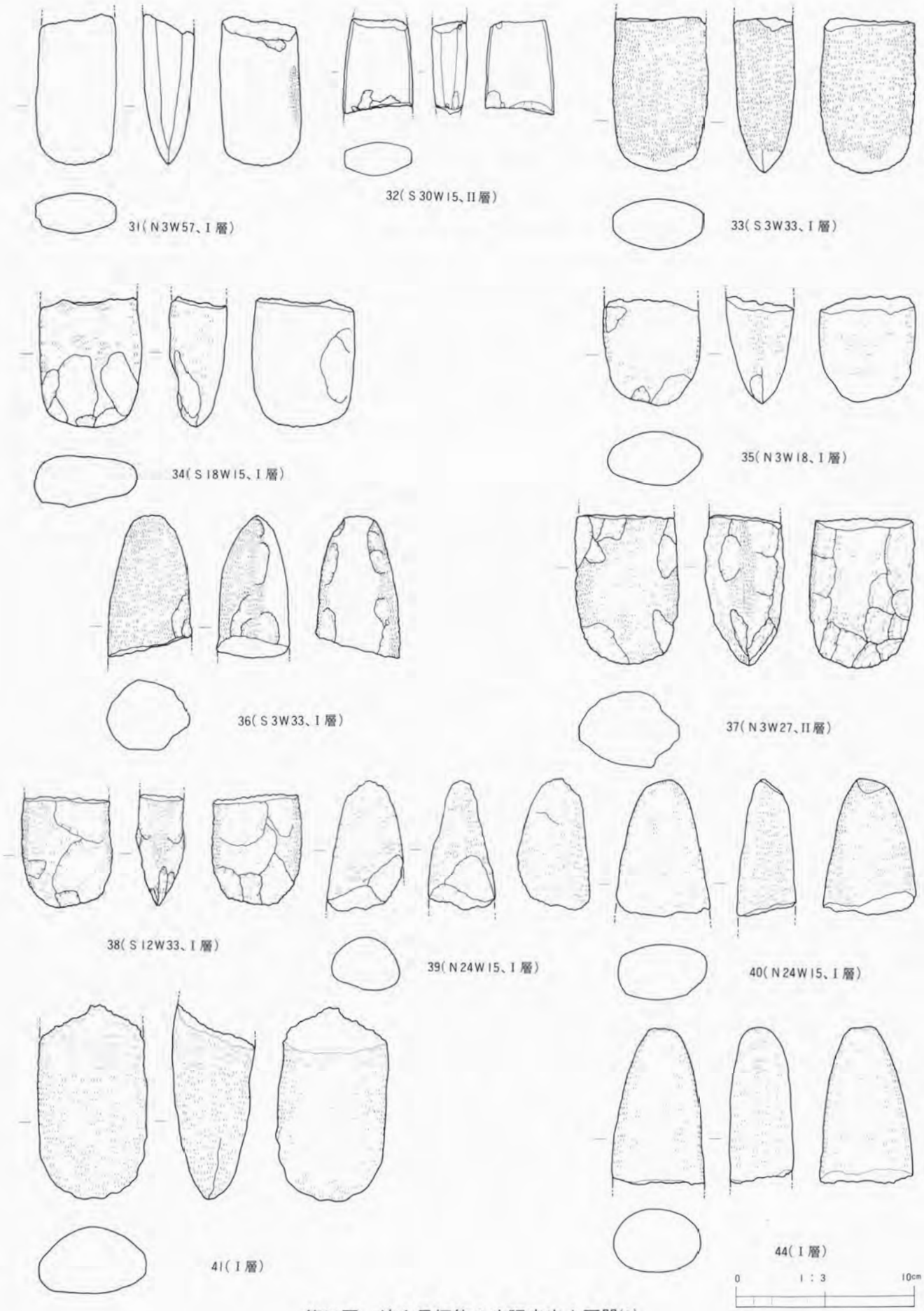
小形磨製石斧（27、28）　　いずれも小形で両刃の磨製石片である。擦切磨製によるかと




第28図　崎山貝塚第3次調査出土石器(1)




第29図　崎山貝塚第3次調査出土石器(2)




第30図　崎山貝塚第3次調査出土石器(3)

思われるが調整が丁寧であり擦切痕は確認されない。28は欠損後に割口の周縁を調整し再利用したものである。

磨製石斧（31～43）　比較的多数出土している。大半は製作途中に欠損したもの、あるいは最終的な研磨を行わなかったか不完全であったものである。欠損後に再利用されたものも多い。これらの資料から大まかな製作過程を想定してみると、素材となる原石の選定→荒割りによる剥離成形→敲打整形（調整）→研磨という工程が基本になる。

31、32は全面にわたり丁寧に研磨されたものである。

33～37は敲打整形後の研磨が不完全で、器面に敲打痕を残すものである。33は刃部付近のみを研磨するもの、34、36は片面のみを研磨するものである。36、37は欠損後に敲石として使用したもので、側面に敲打痕と敲打に伴う剥離がみられる。

38～43は敲打整形時の破片である。全面にわたり敲打されるが、かすかに成形時の剥離がみられるものもある。38は欠損後に敲石として再利用されたものである。

打製石斧（44）　やや大形の刃部付近の破片である。磨製石斧の成形段階の可能性も考えられる。

特殊磨石（45、46、48）断面三角形の自然礫の側縁に機能磨石を有する。46は機能磨面（A面）の両側に調整磨面（B面）が伴う。また、48は片側に調整磨面（B面）、片側に剥離（調整痕）が伴う。45は調整磨面が伴わず小剥離が伴うが使用痕か調整痕か不明である。

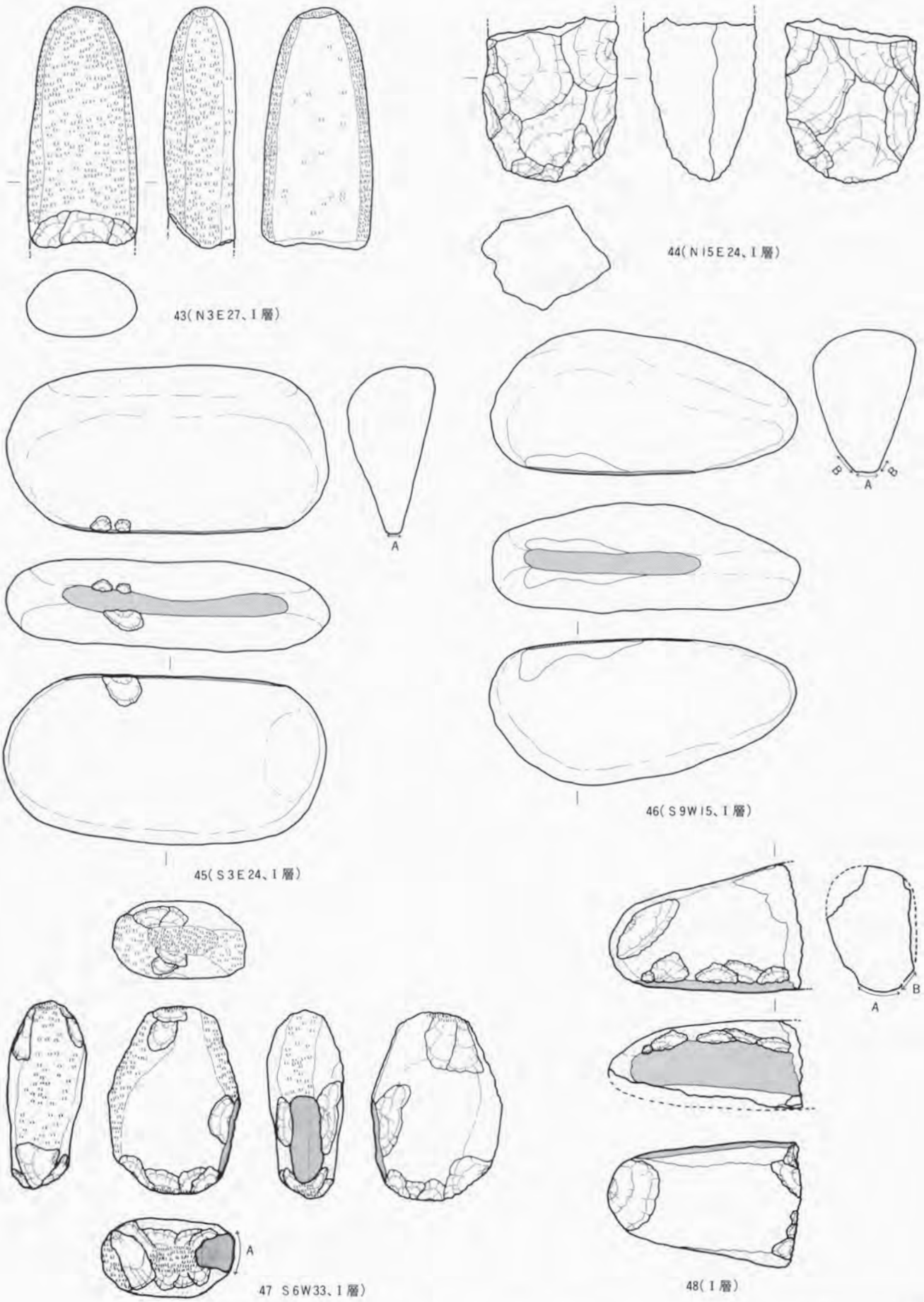
敲打磨石（47）　不整形の自然礫の周縁を使用する。一側縁（アミ部）は敲打磨面として使用しているが、長軸方向の両端部は敲石として使用されているため敲打痕とこれに伴う剥離がみられる。

敲石（49）　扁平な自然礫の周縁を使用するが、特に長軸方向の両端部の使用痕が著しく、剥離が伴っている。

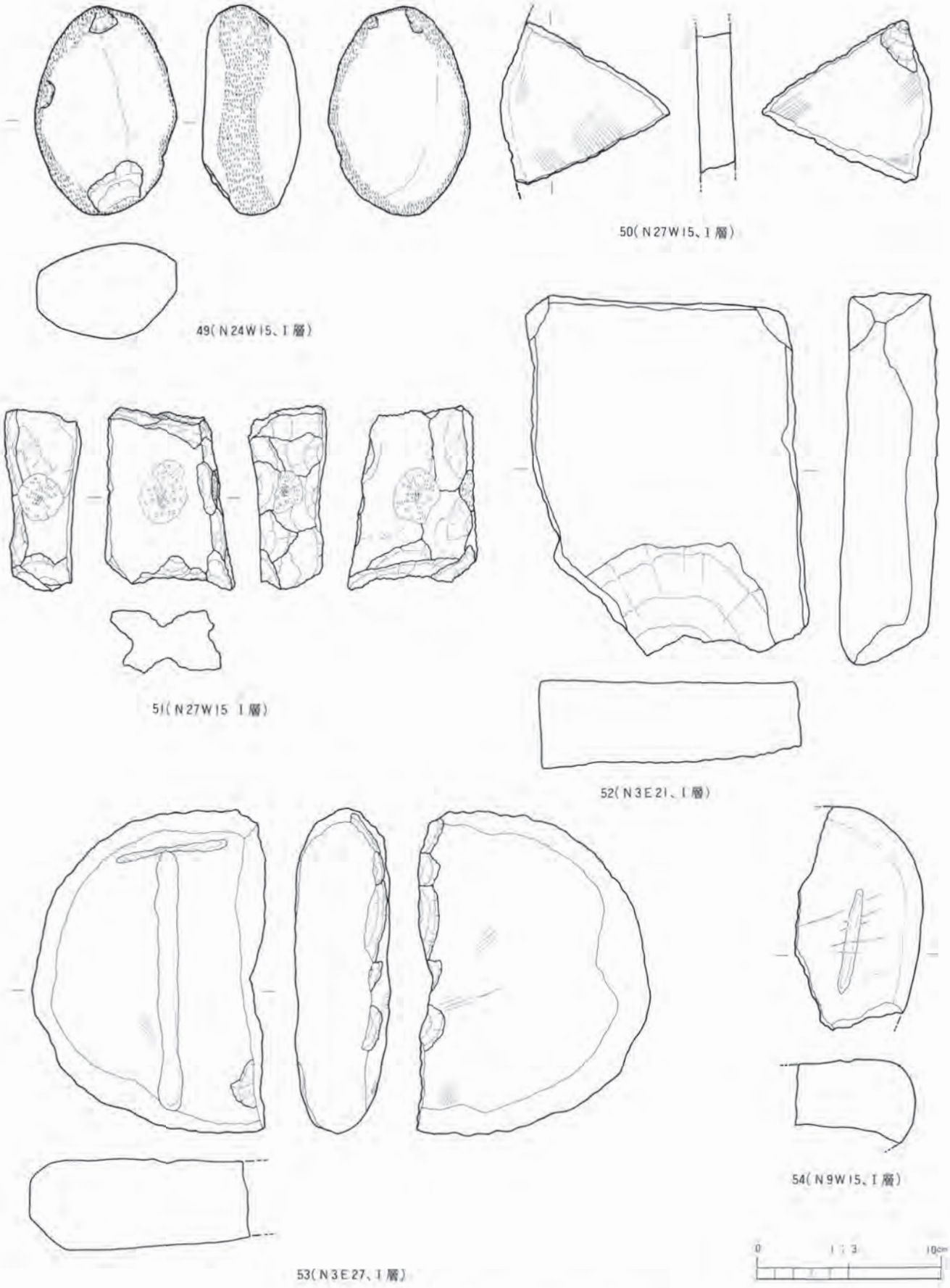
凹石（51）　四面すべてを使用している。また、全面に成形時の剥離がみられる。砂岩質の石材を使用している。

砥石（50、52～57）　砂岩質の石材を使用している。52、55などの大形のものは石皿として使用された可能性もあるが、形態が石皿状を呈していないことや、磨面が他の砥石と変わらないことから一括した。平坦な磨面を持つものと、53、54、56のように浅い溝状の使用痕を持つものの２種がある。

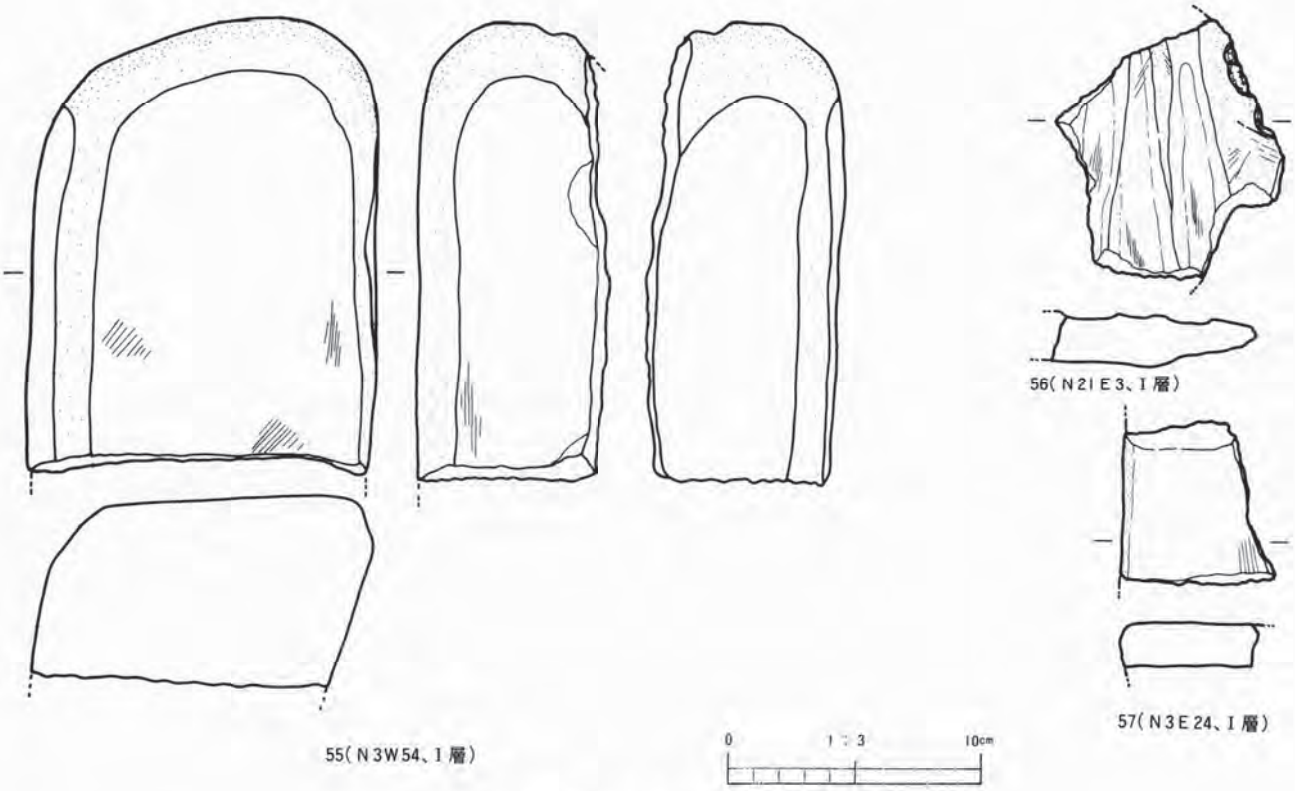
これらのほかに図示できなかったが、砂岩質の石材を使用するものの破片が多数出土している。大半が砥石か石皿の破片と思われる。




第31図　崎山貝塚第3次調査出土石器(4)




第32図　崎山貝塚第3次調査出土石器(5)




第33図　崎山貝塚第3次調査出土石器(6)

**土製品、石製品**（第29図）

29は土製品であるが、手づくねにより浅い皿状のものを作り出している。現存部のみでは他のものより欠落した一部であるのか、これで完結するものかは不明である。

30は粘板岩質(?)の石材を用いて作られた勾玉である。長さ 4.5cm、最大幅 2.4cm、厚さ 0.6cmを計る。形状は勾玉そのものだが、厚さが 0.6cmと極めて薄く、玉というよりは板状の垂飾品といった感じである。頭部の穿孔は両側から成されるが径が 0.2cmとやや小さい。

これらはいずれもI層からの出土であり所属時期を確定することはできない。29はおそらく縄文時代に伴うものかと思われるが、30は縄文時代～弥生時代、さらには平安時代（土器片が南斜面のボーリング坑から出土）までの時間幅を考える必要がある。

(7) **ボーリング調査**（第13図、第34図、第35図）

発掘調査と併行して南側斜面のボーリング調査を実施している。これは第１次調査、第２次調査で検出した貝層や自然遺物包含層の広がりを確認するとともに、新たな貝層や自然遺物包含層の検出を目的とした。

ボーリング坑の命名については第２次調査時に調査区周辺にＢＰ－１～ＢＰ－10のボーリング坑を穿っていたため、これとの重複を避け、今回はＢＰ－21～ＢＰ－37とした。

ＢＰ－１～ＢＰ－10は第２次調査区周辺の状況を探るために実施しているが、ＢＰ－21～ＢＰ－34は第１次調査区周辺の状況および第１次調査区と第２次調査区の間の状況を探ることを目的とした。また、ＢＰ－35・ＢＰ－36は第２次調査区の斜面下部および水田面の状況を探るために実施した。同様にＢＰ－37は第１次調査区下部の水田面の状況を探るために実施した。

これらのボーリングにより採集した土壌はすべて持ち帰り１㎜メッシュの篩で水洗選別している。この結果南側斜面にはかなり広範囲に自然遺物包含層が分布していることがわかった。

まず、Ｄ２区からＢＰ－33までの横断面でみると、表土の直下に地山が現われる尾根部分と包含層などが発達する谷部分が交互に出現しているのが観察される。つまり、Ｄ２区～ＢＰ－9・ＢＰ－21・ＢＰ－23・ＢＰ－27～29・ＢＰ－31が尾根部分で、Ｄ１区～Ｃ区・ＢＰ－22・ＢＰ－24～ＢＰ－25・ＢＰ－31が谷部分になっている。

第２次調査区付近の谷部分は比較的規模も大きく幅30ｍほどである。Ａ１区では良好な貝層を確認しているが、この両側のＤ１区やＣ区にも自然遺物が包含されていた。

また、第１次調査区付近にも広く自然遺物包含層が分布していることが確認された。特に、ＢＰ－30では約80㎝の厚さにわたり自然遺物が包含されていた。

両者の中間に存在する谷は規模が小さいこともあり、自然遺物を包含する層も比較的薄く、包含量も少ない。

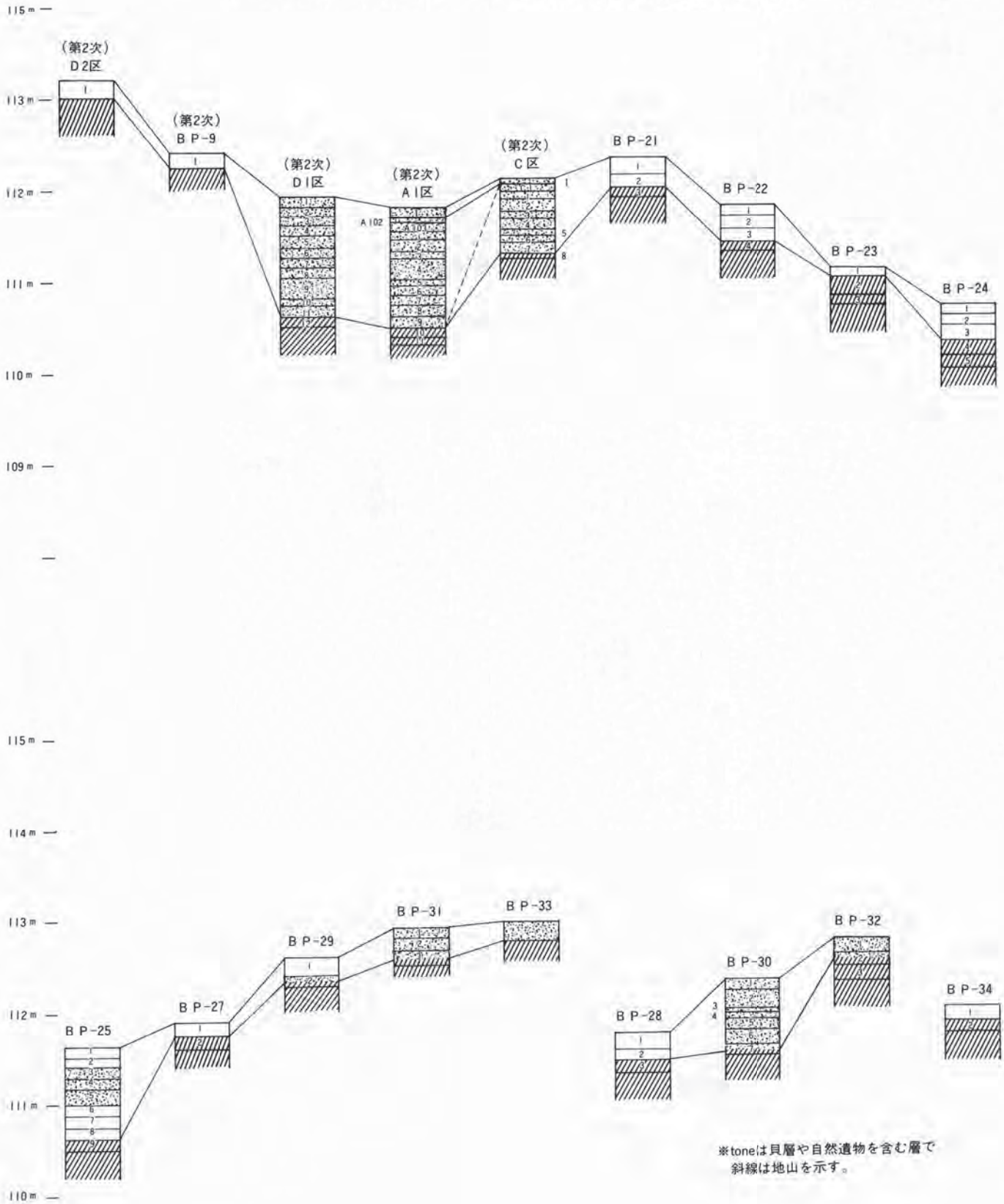
次に縦断面でみると、第２次調査区周辺ではＢ区～Ａ１区に貝層があり、Ｅ区、ＢＰ－35、ＢＰ－36にまで自然遺物が包含されていた。Ｅ区の上層は黒褐色土～暗褐色土層で比較的新しい時期の堆積だと思われるが、下層は自然遺物包含層となっている。また、水田面に設定したＢＰ－36からも自然遺物が検出されている。

第１次調査区周辺では斜面の上端部を中心に自然遺物包含層が形成されるが、斜面下端部のNo.３Ｇの一部や、水田面に設定したＢＰ－37からも自然遺物が検出されている。

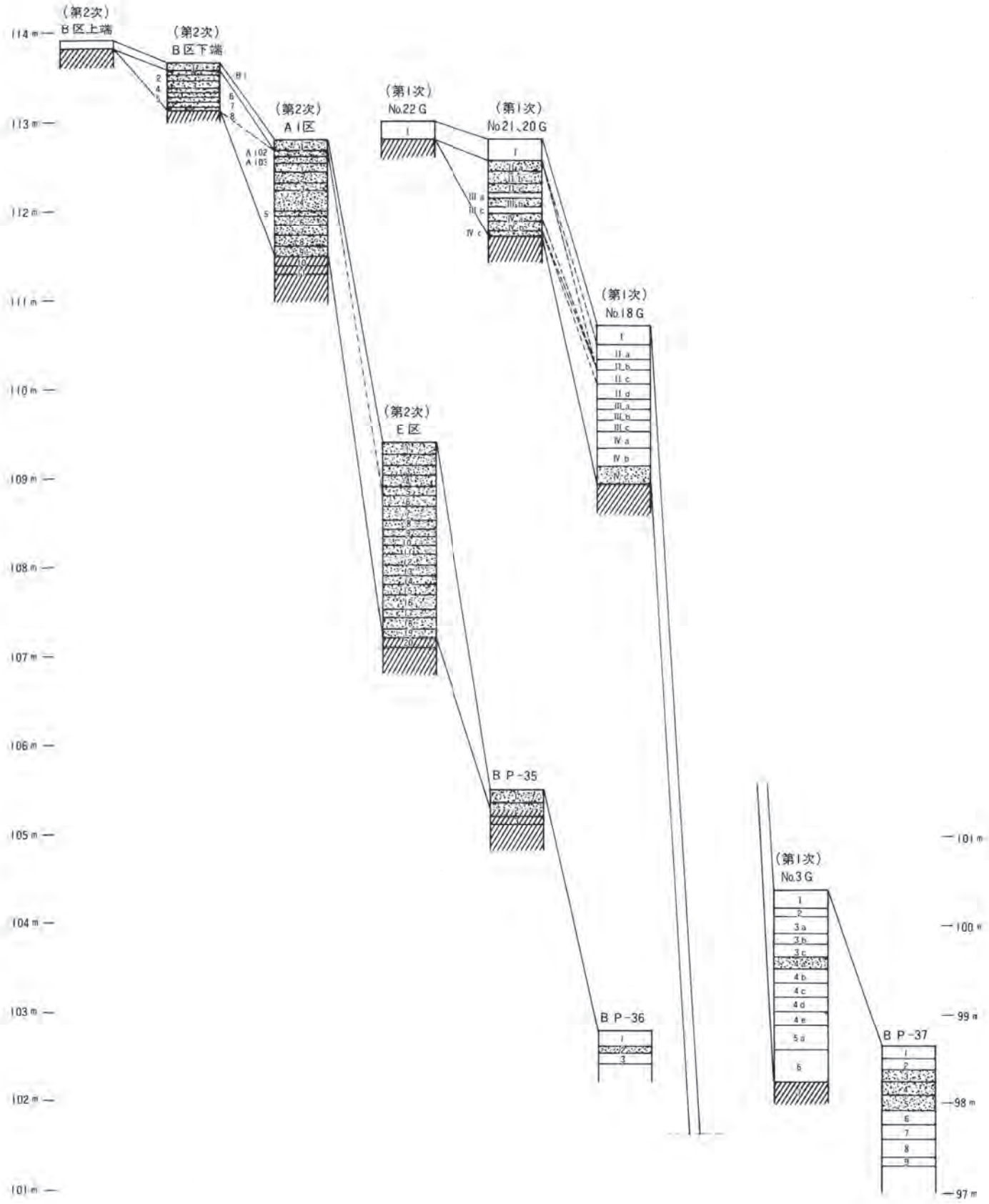
以上の成果を要約した模式図を第12図に示した。図の濃いtoneの部分が貝層や比較的包含量の多い自然遺物包含層の範囲である。また、薄いtoneの部分は包含量の少ない自然遺物包含層（註１）の範囲である。斜面の下端部や水田面下から検出された少量の自然遺物は斜面上部の貝層や自然遺物包含量から流れ落ちて二次的に堆積した可能性が大きい。しかし、このように少量の骨片や貝殻片が残るのはおそらく土壌などの周辺部の環境が良好な為で、今後獣骨などの集積が新たに発見される可能性が大きくなった。また、ＢＰ－４－３から平安時代と思われる土師器甕の破片が出土している。

---

（註１）崎山貝塚の貝層や自然遺物を包含する層は、貝層、混土貝層、混貝土層などといった従来使用されて来た用語では説明が難しいので、新たに土層の分類や用語を検討中である。




第34図　崎山貝塚南斜面ボーリング柱状図(1)




第35図　崎山貝塚南斜面ボーリング柱状図(2)

### (8) 北側斜面の貝層（第13図、第36図）

北側斜面の中央部からやや東寄りに貝殻片などの散布する地点を確認している。地表面での範囲は径約10mほどであるがボーリングを実施していないため実際の範囲や層厚は不明である。

この地点は畑として耕作されていたために上層部の攪乱が著しく地表面で骨角器や魚骨・巻貝類などが多数表面採集できるほどであった。

#### (a) 土器（第36図）

付近から表面採集した土器片を図示する。1～4は磨消し技法により縦位のだ円形区画文などを施すもので大木9式に伴うものである。5は横位に施した2条の沈線間を磨消し、刺突文を充填するものである。これも大木9式に伴うものと思われる。6、7は隆沈線や隆起線で施文されるもので大木8b式に伴うものと思われる。8、10は口縁部を折り返す粗製深鉢である。9、11～14、16は地文だけの粗製深鉢であるが、口縁部の外反するものと内湾するものの2種がある。12は綾絡のような原体を用いておりほぼ大木10式に伴うものかと思われるが、他は前述した土器型式に伴うものと思われる。

#### (b) 骨角器（第36図）

3点図示したが、これ以外に19に類似するものの小片1点とチヂミボラを穿孔した垂飾品と思われるものを採集している。

**骨ベラ**

17はシカの左側中足骨を使用する骨ベラで、素材を前後・左右に四分割したものの前面－左側を使用している。素材の打割はクサビ状の工具を使用しているものと思われ剝離痕が観察される。近位端を基部とし、遠位部を刃部としているが、刃部はやや厚く両刃となる。刃部付近は丁寧に調整されており、また使用痕と思われる横方向の細かい線条痕が多数観察される。側縁の調整は粗雑である。

**角ベラ**

18は鹿角製の角ベラであるが基部を欠損するために全体の形状は不明である。海綿体部分を除去し緻密質部分のみとした鹿角を内外両面から擦り切っている。器体部への整形はほとんど行われていない。先端部には弧状の刃部があり使用痕と思われる細かい線条痕が観察される。刃部の調整は両面から成されているが、内面からの調整が強く片刃状を呈している。

**叉状角製品**

19は半分以上を欠くため全体の形状が不明であるが、鹿角製の叉状角製品である。外面は良く研磨されており非常に丁寧な作りであり、内面は海綿体部分がくり抜かれている。端部は幅1.5cmをタガ状に削り残し、器体部に沈線を施す。また、実測図左側に2個の貫通孔、右側に1個の貫通孔と径1.7cmほどの大きな孔が穿たれている。

これらの骨角器は前述した土器型式（大木8b式～大木10式）にほぼ伴うものかと思われる。

#### (c) 自然遺物

付近から表面採集した資料と、表土を4850cc採取して水洗選別して得られた資料から成る。前者を表採資料、後者をサンプリング資料と呼ぶ。同定された資料は腹足類、二枚貝類、節足動物、棘皮動物、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類から成る。

なお、動物遺存体の同定や分析に関し、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、岩手県立博物館熊

谷常正氏、陸前高田市立博物館佐藤正彦氏、東北学院大学学生熊谷賢氏、東北大学学生高橋一成氏の諸氏には指導、助言をいただき、一部の資料の同定までお願いした。
以下同定できたものの種名を記す。また、来年度以降当該地点のボーリング調査などを予定しており、今後新たな種名が追加されるものと思われるので随時追補してゆきたい。

〈崎山貝塚北側斜面貝層出土動物遺存体種名一覧〉

I　軟体動物門　MOLLUSCA

i）腹足綱　GASTROPODA

| | | |
|---|---|---|
| 1 | クロアワビ | Nordotis discus (REEVE) |
| 2 | シボリガイ | Patelloida pygmaea signata (PICSBRY) |
| 3 | シロガイ | Collisella pelta shirogai HABE et Ito |
| 4 | コウダカアオガイ | Notoacmea concinna (LISCHKE) |
| 5 | クボガイ亜科の一種 | Tegulinae gen. et sp. indet. |
| 6 | タマキビガイ | Littorina brevicula (PHILIPPI) |
| 7 | クロタマキビガイ | Neritrema sitkana (PHILIPPI) |
| 8 | レイシガイ | Reishia bronni (DUNKER) |
| 9 | イボニシ | R. clvigera (KUSTER) |
| 10 | チヂミボラ | Nucella heyseana (DUNKER) |
| 11 | エゾチヂミボラ | N. freycineti (DESHAYES) |
| 12 | パツラマイマイ | Discus pauper (GOULD) |
| 13 | オカチョウジガイ | Allopeas kyotoesis (PILSBLY et HIRASE) |
| 14 | ベッコウマイマイ科 | Helicarionidae gen. et sp. indet. |
| 15 | ナタネガイ科 | Punctidae gen. et sp. indet. |
| 16 | オカモノアラガイ | Succinea lauta GOULD |
| 17 | アオモリマイマイ | Euhadra sundhendrdiana Aomoridnsis (DULICK & TILSBRY) |
| 18 | ホソオカチョウジガイ | Opeas pyrgula (SCHMACKER et BOETTGER) |

ii）二枚貝綱　BIVALVIA

| | | |
|---|---|---|
| 1 | イガイ | Mytilus corsucus GOULD |
| 2 | エゾイガイ | Crenomytilus grayanus DUNKER |
| 3 | ムラサキインコガイ | Septifer (Mytilisepta) virgatus (WIEGMANN) |
| 4 | マガキ | Crassostrea gigas (THUNBERG) |
| 5 | チリハギガイ | Lasaea undulata GOULD |
| 6 | アサリ | Ruditapes philippinarum (ADAMS et REEVE) |
| 7 | コタマガイ | Gomphina (Macridiscus) melanaegis ROMER |
| 8 | シオサザナミガイ科の一種 | Psammobiidae gen. et sp. indet. |
| 9 | ニッコウガイ科の一種 | Tellinidae gen. et sp. indet. |
| 10 | オオノガイ | Mya (Arenomya) aremaria oonogai MAKIYAMA |

II　節足動物門　ARTHROPODA

第36図　崎山貝塚北斜面貝塚出土遺物

i ) 蔓脚亜綱　CIRRIPEDIA

1　チシマフジツボ　Balanidae cariosus (PALLAS)

III　棘皮動物門　ECHINOERMATA

i ) 海胆綱　ECHINOIDEA

1　キタムラサキウニ　Strongylocentrotus nudus (A.AGASSIZ)

IV　脊椎動物門　VERIEBRATA

i ) 軟骨魚綱　CHONDRICHTHYES

1　板鰓亜綱の一種　ELASMOBRANCHII order indet.

ii ) 硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

1　マイワシ　Sardinops melanosticta (TEMMINCK et SCHLEGEL)

2　カタクチイワシ　Engraulis japonicus (TEMMINK et SCHLEGEL)

3　サケ科　Salmonidae gen. et sp. indet.

4　サバ属　Scomber sp.

5　マダイ　Pagrus major (TEMMINCK et SCHLEGEL)

6　カサゴ科　Scorpaenidae gen. et sp. indet.

7　アイナメ　Hexagrammos ofakii JORDAN et STARKS

8　ヒラメ　Paralichthys olivaccens (TEMMINCK et SCHLEGEL)

iii ) 爬虫綱　REPTILLIA

1　ヘビ科　Colubridae gen. et sp. indet.

iv ) 鳥綱　AVES

1　ガン・カモ科　Anatidae gen. et sp. indet.

v ) 哺乳綱　MAMMALIA

1　ムササビ　Petaurista leucogenys (TEMMINCK)

2　イノシシ　Susscrofa LINNE

3　シカ　Cervus nippon TEMMINCK

**貝類**（腹足綱、二枚貝綱）

貝層を構成する基本的な種はイガイ、エゾイガイ、ムラサキインコガイ、マガキなどの岩礁性二枚貝類であるが、サンプリング資料では圧倒的にムラサキインコガイが多い。しかし、これらに伴ってわずかではあるが砂泥底性のアサリ、オオノガイ、シオサザナミガイ科や砂底性のコタマガイが出土している。シオサザナミガイ科としたものはNuttallia属で、イソシジミかエゾイソシジミと思われる。また、ムラサキインコガイの足糸に付着するチリハギガイもわずかではあるが出土している。

腹足綱は表採資料には比較的多かったもののサンプリング資料ではさほど多くなかった。最も多い種はチヂミボラで、エゾチヂミボラとタマキビがこれに続き、クボガイ亜科やレイシガイ、イボニシなどは極端に少なくなる。クボガイ亜科としたものはクボガイやコシダカガンガラなどであるが、いずれも殻頂部のみで種までは同定できなかった。これらはいずれも岩礁性巻貝である。

| No. | 種　　名 | ブロックサンプル | 表面採集 |
|---|---|---|---|
| 1 | アワビ | 2 | 1 |
| 2 | シボリガイ | | 1 |
| 3 | シロガイ | 1 | |
| 4 | コウダカアオガイ | | 2 |
| 5 | クボガイ亜科 | 1 | 2 |
| 6 | タマキビガイ | 5 | 24 |
| 7 | クロタマキビガイ | | 4 |
| 8 | レイシガイ | | 1 |
| 9 | イボニシ | | 1 |
| 10 | チヂミボラ | 2 | 41 |
| 11 | エゾチヂミボラ | | 28 |
| 12 | パツラマイマイ | 49 | 1 |
| 13 | オカチョウジガイ科 | 6 | |
| 14 | オカチョウジガイ | 2 | |
| 15 | ベッコウマイマイ科 | 11 | |
| 16 | ナタネガイ科 | 20 | |
| 17 | オオコハクガイ | 12 | |
| 18 | オカモノアラガイ科 | 5 | |
| 19 | オカモノアラガイ | 1 | |
| 20 | アオモリマイマイ | 1 | |
| 21 | ホソオカチョウジガイ | 7 | |
| 1 | イガイ | L 2 | L1 |
| 2 | エゾイガイ | R 2 L 1 | L1 |
| 3 | ムラサキインコガイ | R205 R248 | R2、L3 |
| 4 | マガキ | | R1、L1 |
| 5 | チリハギガイ | R 2 L 5 | |
| 6 | アサリ | R 2 | R2、L4 |
| 7 | コタマガイ | | R2、L1 |
| 8 | エゾイソシジミ | | L1 |
| 9 | ニッコウガイ科 | | R1 |
| 10 | オオノガイ | | R1、L1 |
| 1 | チシマフジツボ | (+) | (+) |
| 1 | ヘビ科 | 椎骨3 | |
| 1 | ガン・カモ科 | 尺骨R1、上腕骨L1 | 尺骨R1<br>尺骨R1 |
| 1 | ムササビ | | 下顎骨R1<br>下顎切歯R1 |
| 2 | イノシシ | | 下顎前臼歯(P1) |

| | 前上顎骨 R/L | 主上顎骨 R/L | 歯骨 R/L | 角骨 R/L | 舌顎骨 R/L | 角舌骨 R/L | 前鰓蓋骨 R/L | 主鰓蓋骨 R/L | 口蓋骨 R/L | 上擬鎖骨 R/L | 上後頭骨 | 前頭骨 | 第1脊椎骨 | 腹椎 | 尾椎 | 尾部棒状骨 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| サメ目(表面採集) | | | | | | | | | | | | | | | | | 椎骨1 |
| マイワシ(ブロックサンプル) | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | 6 | 10 | | |
| カタクチイワシ(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | 2 | 8 | | |
| サケ科(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | | | | 椎骨1 |
| サバ(小)(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| マダイ(表面採集) | 1 | 1 | 3 | | | 1 | 1 | | 2 | | 3 | 2 | | | 1 | | |
| | | | 1 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | |
| マダイ(ブロックサンプル) | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | |
| タイ類(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 遊離歯7 |
| カサゴ科(表面採集) | 1 | | | | | | | | | 1 | | | 1 | 1 | 2 | | |
| カサゴ科(ブロックサンプル) | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| アイナメ(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | 4 | 1 | | |
| ヒラメ(ブロックサンプル) | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |

表Ⅰ　北斜面貝層出土自然遺物

これらのほかに微少な陸産巻貝類がサンプリング資料から多数検出されている。バツラマイマイが、圧倒的に多い。ナタネガイ科、オオコハクガイ、ベッコウマイマイ科、ホソオカチョウジガイなどが続く。表土のサンプリング資料であるため現生種が混入している可能性がある。

**節足動物、棘皮動物**

チシマフジツボがかなり多量に混入している。また、わずかではあるがムラサキウニと思われる殻板や棘が少量出土している。

**魚類**

出土量はあまり多くない。基本的な組成はマイワシ・カタクチイワシ・サバの幼魚などの小魚とカサゴ科・アイナメの岩礁性底生魚とマダイから成る。ヒラメやサケ科は極端に少ない。また、マグロやカツオなどの回遊魚は欠落している。

マダイは表採資料には多かったもののサンプリング資料ではさほどではなかった。

**爬虫類**

出土点数は極めて少なく、ヘビ科の椎骨を3点同定したのみである。3点ともほぼ近似する大きさなので同一個体の可能性も考えられる。

**鳥類**

ガン・カモ科のみを同定したが出土点数は少ない。サンプリング資料の尺骨と上腕骨はやや大きくマガモクラスの種と思われるが、表採資料の尺骨はやや小さくコガモクラスの種と思われる。

**哺乳類**

出土点数は極めて少なくわずかに3種を同定したのみにとどまる。ムササビは右下顎骨と右下顎犬歯を同定したが両者の大きさがほぼ同じであり同一個体である可能性が大きい。イノシシは下顎の第1前臼歯（P1）を同定したのみである。シカは骨角器として加工されたもののみであり前述した。

以上であるが、第2次調査地点の貝層に比して、貝類が多く魚類、哺乳類が少ないことが指適できる。第2次調査地点の貝層でも主体となる貝類はイガイ、エゾイガイ、ムラサキインコガイなどの岩礁性二枚貝であり、これに若干量の岩礁性巻貝類が加わるが全体的に個体数は少なく当地点の貝層のようにムラサキインコガイが極端に多出することはなかった。　また、砂底性や砂泥底性の貝類は全く含まれていなかった点などが異なる。

魚類については両地点の表土から出土したものを比較すると第2次調査地点では出土点数も多く、貝層の主体を成す構成要素であるのに対し、北側斜面の貝層では点数や種が極端に少なく、大型回遊魚などのように全く欠落しているものもありさほど重要視されていないようである。

哺乳類も少なくわずか3種のみである。

節足動物、棘皮動物、爬虫類、鳥類は両地点ともほぼ同じような出土量である。

# III　調査のまとめ

**大付遺跡第３次調査**

第３次調査区は遺跡のほぼ中心部に位置し、第１次調査区（Ａ地点）にも近接することから竪穴住居跡や墓坑跡の存在が予想されたが、調査の結果検出されたのは不整だ円形を呈する土坑跡３基と小ピットや焼土遺構であった。土坑跡は極めて短期間のうちに掘り込み、埋め戻されたものであるが性格、用途については全く不明である。

本遺跡での調査はいずれも小規模なものが多く、遺跡の全体像をつかむだけの情報量はまだ蓄積されていない。今後も調査を継続して明らかにして行く必要がある。又、貝層や自然遺物を包含する地点も前述したようにほぼ目当がついたので、今後機会があればボーリング調査などにより再確認する事にしたい。

**トロノ木Ｉ遺跡第８次調査**

第８次調査区はトロノ木Ｉ遺跡の南端部に位置し、遺跡の南端部の状況を探ると共に、付近に存在するとされる「崎山館」の手がかりをつかむ事を目的とした。調査の結果遺構は検出されず、遺物も縄文土器片がほんのわずか出土したのみであった。トロノ木Ｉ遺跡の縄文時代集落は本調査区以北に広がる事が判明したが、「崎山館」については依然全く不明なままである。

**崎山貝塚第３次調査**

第３次調査区は台地のほぼ中央部にトレンチを設定し、遺構の検出に努めた。検出された遺構群は前述したように、中心部に土坑域、外側に地山の落込み、更に外側に居住域という構造をとる。土坑域には立石が伴っており、大正13年に柴田と小田島が来跡した折にもこれを確認している。ただし、現在は１基のみしかないがかつては２基立っていたようである。地元の人の話では１基は耕作中に抜き去ったとの事である。

土坑域はフラスコ状土坑、浅い皿状土坑、礫を伴うだ円形土坑（墓坑？）などにより構成される事がわかったが、これ以外のタイプの有無がまだ確認できていない。

居住域については今のところ縄文時代中期中葉の竪穴住居跡しか確認できていない。更に居住域の外側はどうなっているのか不明である。

この様に集落の大まかな構成はわかったものの細部については遺構の精査を実施していないので不明である。

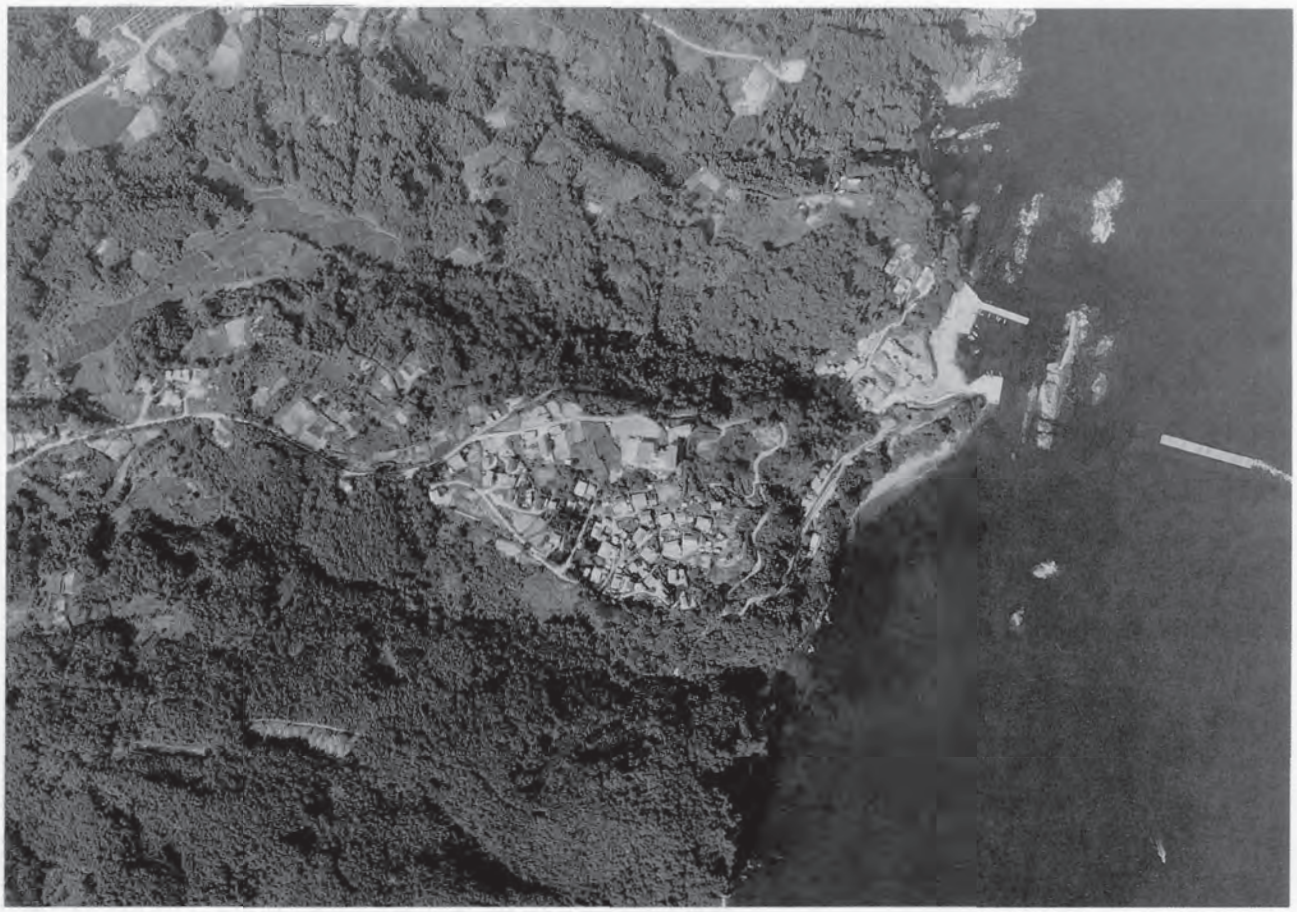
今後の調査は遺構と貝層や自然遺物包含層などを含めた遺跡全体がどのように変遷していったのかを探ることも目的とする必要がある。

最後に、今回の調査では縄文時代後期、晩期、弥生時代、平安時代の遺物が得られ、また、南側斜面には一部水田面までも含めて広範囲に自然遺物包含層などが分布している事が確認された。今後はこれらの新知見も考慮した調査も必要となった。

# 写　真　図　版

# 第１図版

崎山遺跡群航空写真（北北西から）



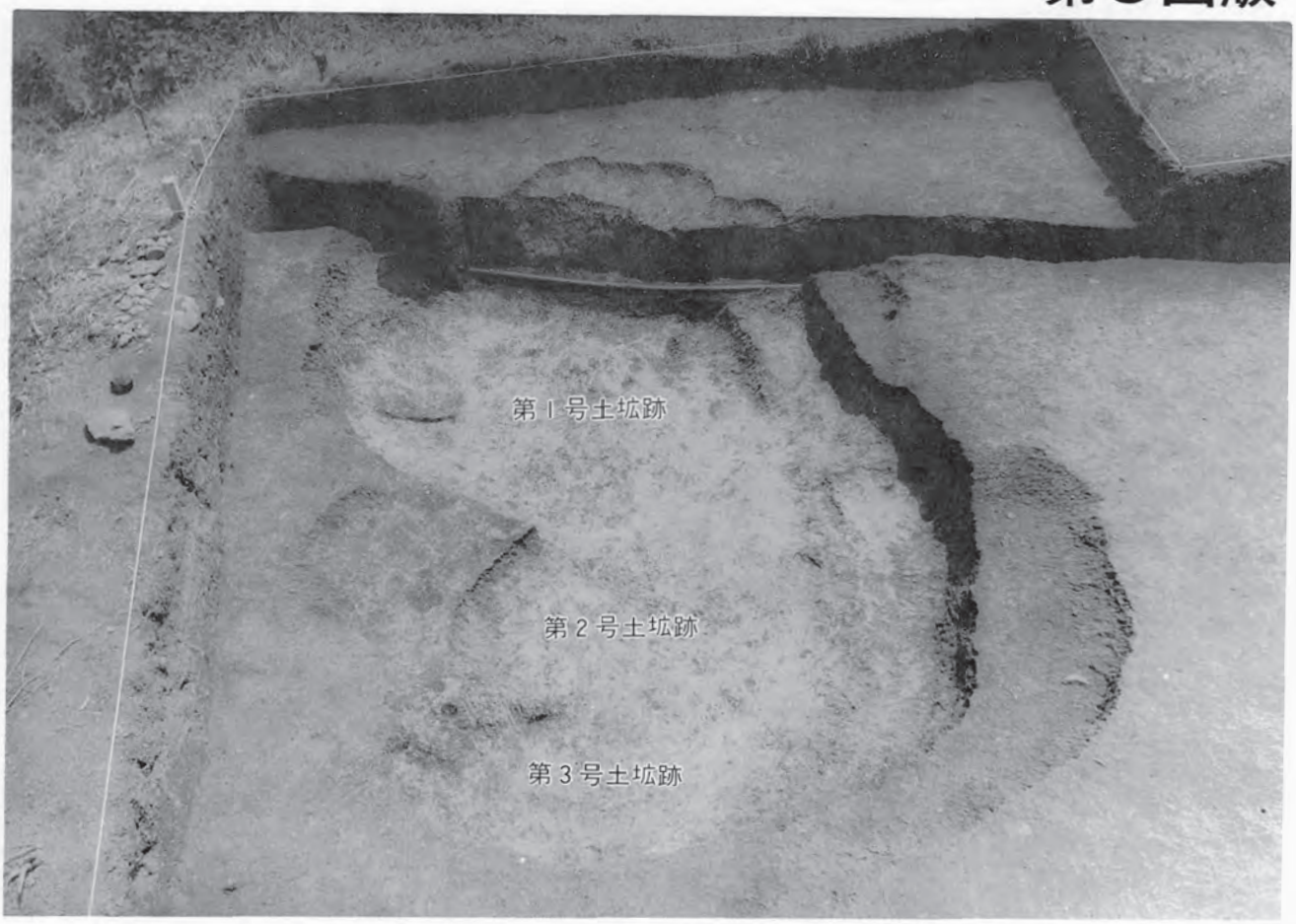
大付遺跡垂直写真

# 第２図版

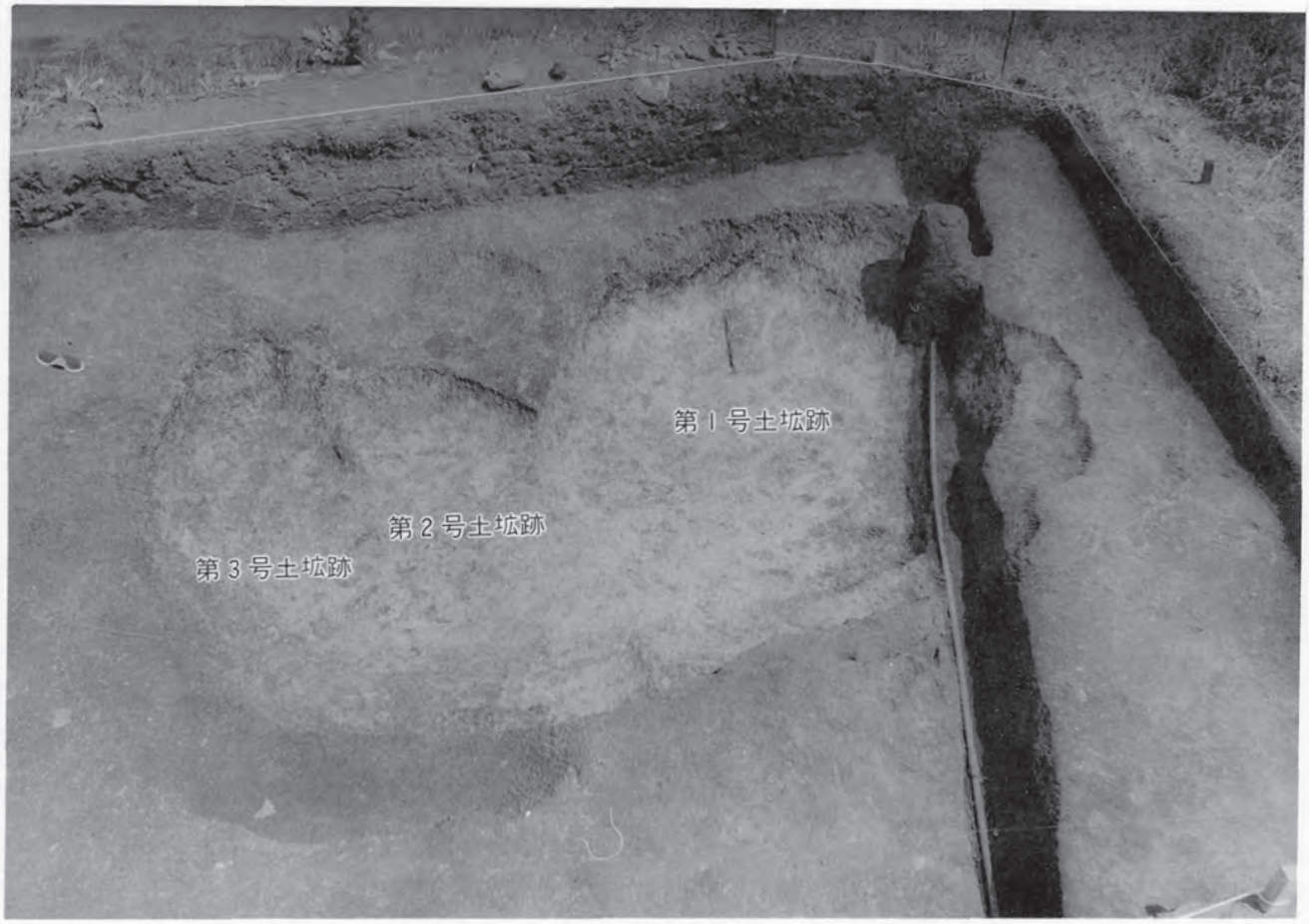
大付遺跡第３次調査区遺構検出状況（南西より）

大付遺跡第３次調査区遺構検出状況（南より）

# 第３図版




第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡




第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡

# 第４図版

第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡堆積状況（Ｂ層、Ｃ層）

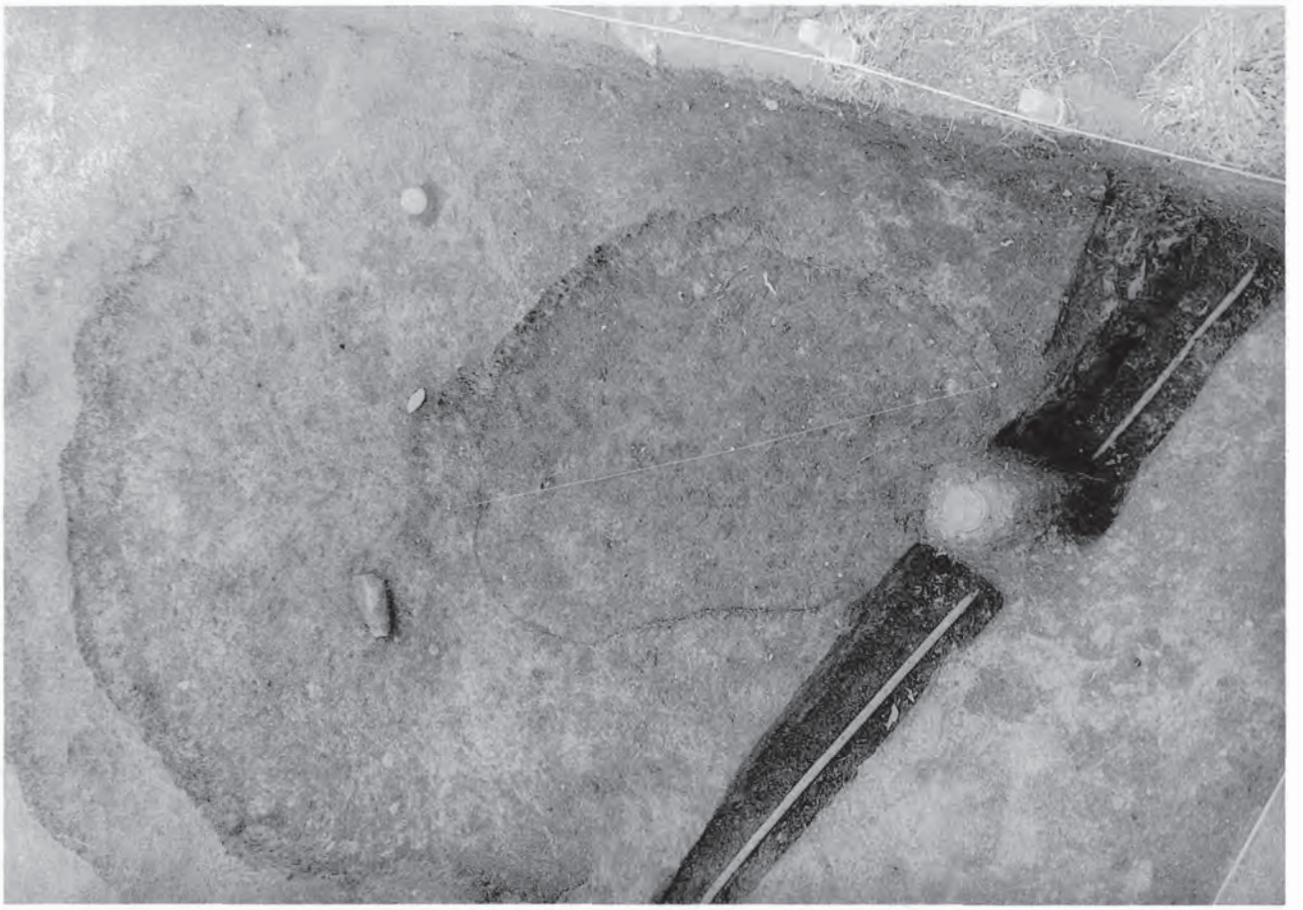
第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡堆積状況（Ｂ層、Ｃ層）

第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡堆積状況（Ａ層）

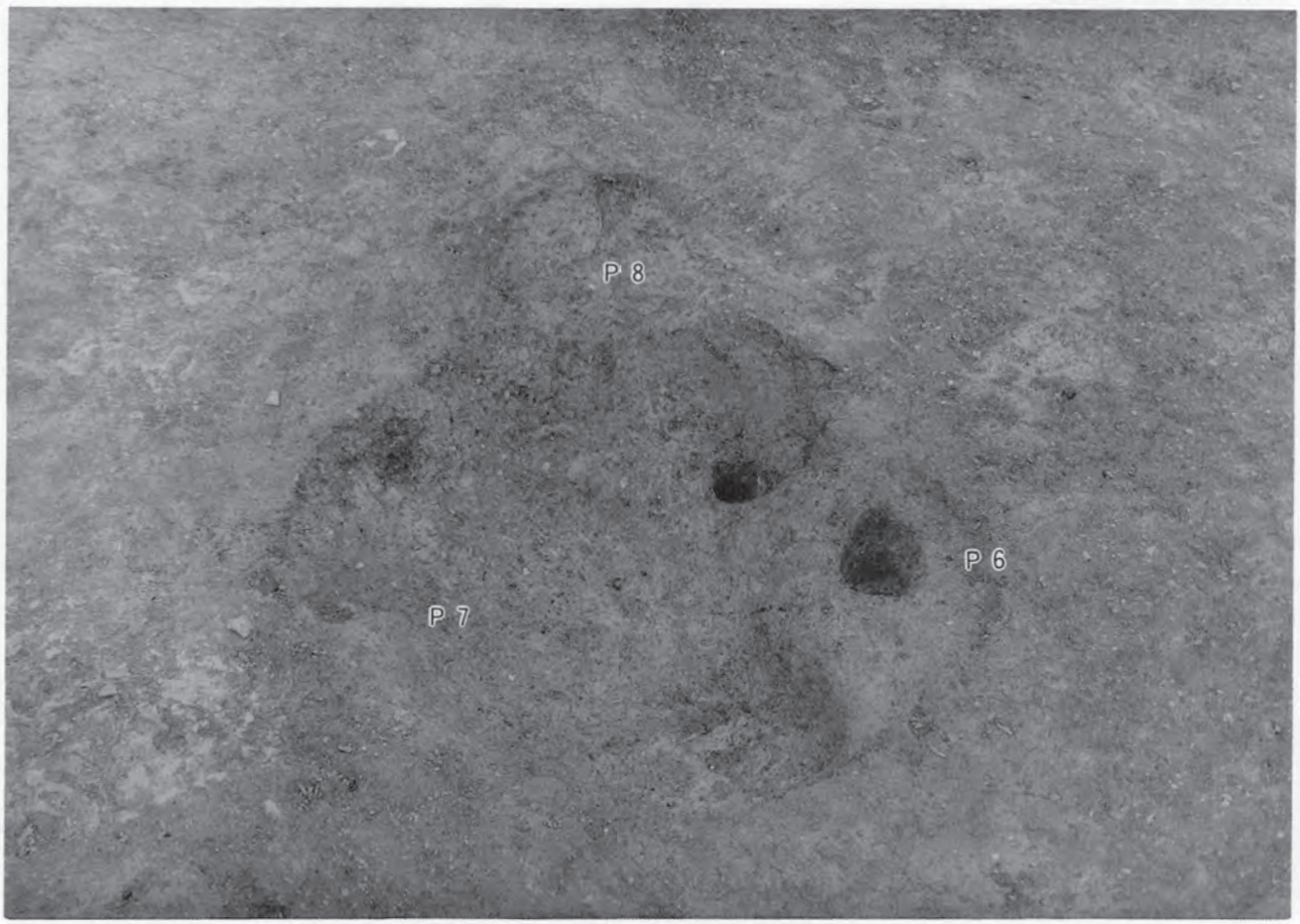
第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡堆積状況（Ａ層）

# 第６図版

第１号土坑跡、第２号土坑跡、第３号土坑跡堆積状況（Ａ層）



第１号土坑検出状況



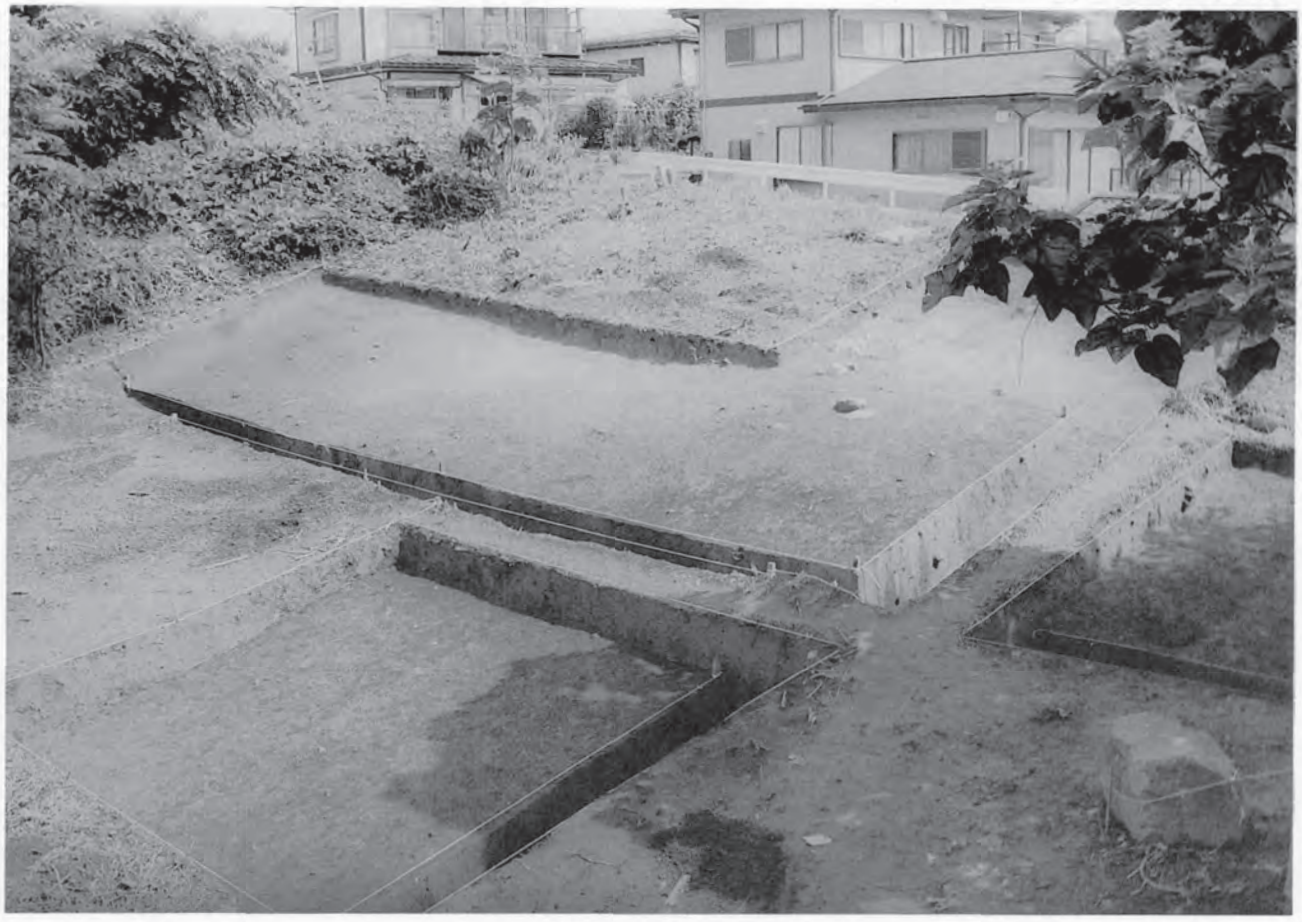

Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８堆積状況

Ｐ７、Ｐ８堆積状況

# 第８図版

P 4、P 5

P 1、P 2、P 3



トノロ木Ⅰ遺跡第８次調査区全景（西より）

トロノ木Ⅰ遺跡第８次調査区全景（西より）

# 第10図版

N－S　Section堆積状況

N－S　Section堆積状況

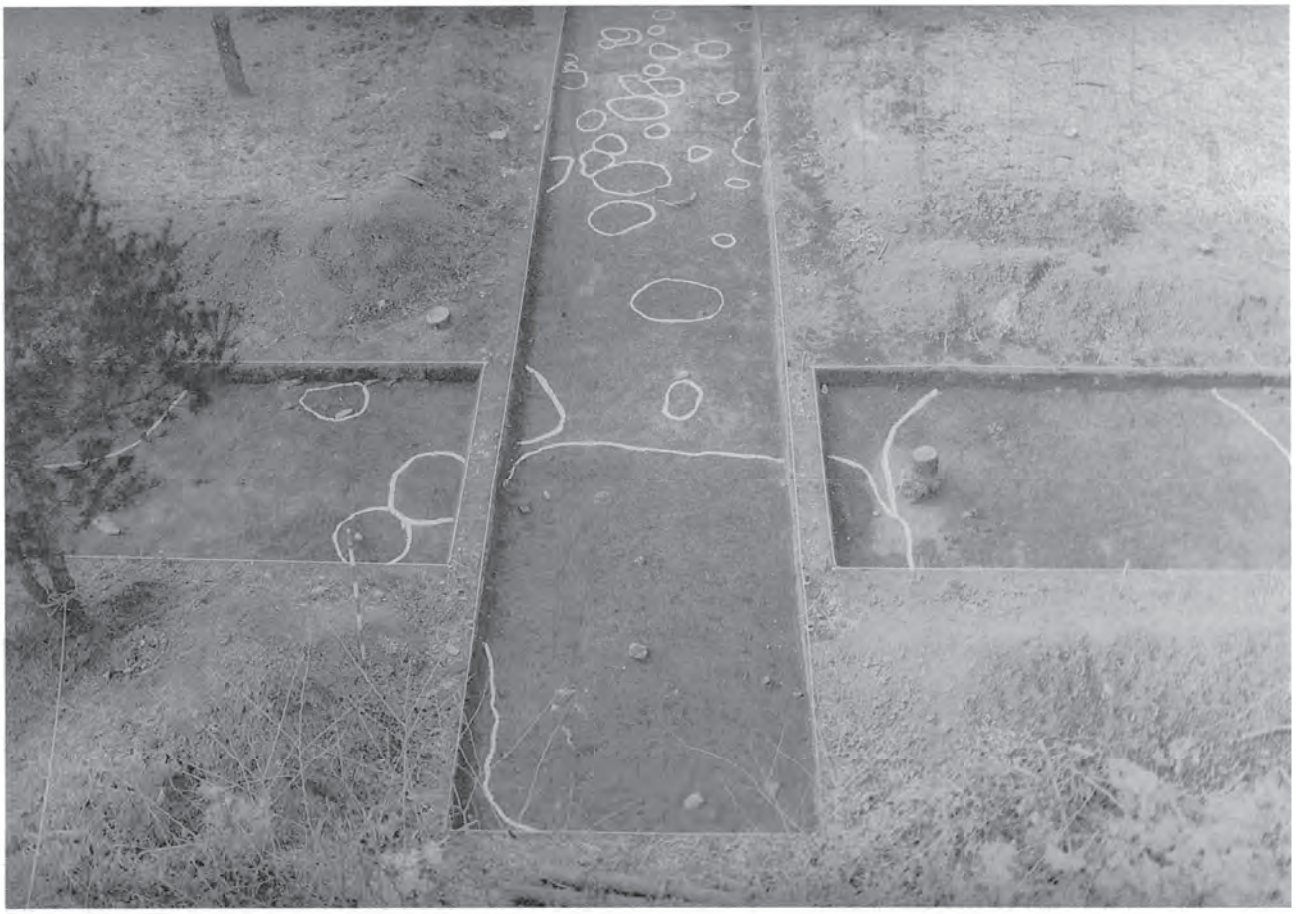
# 第11図版

E－W　Section堆積状況

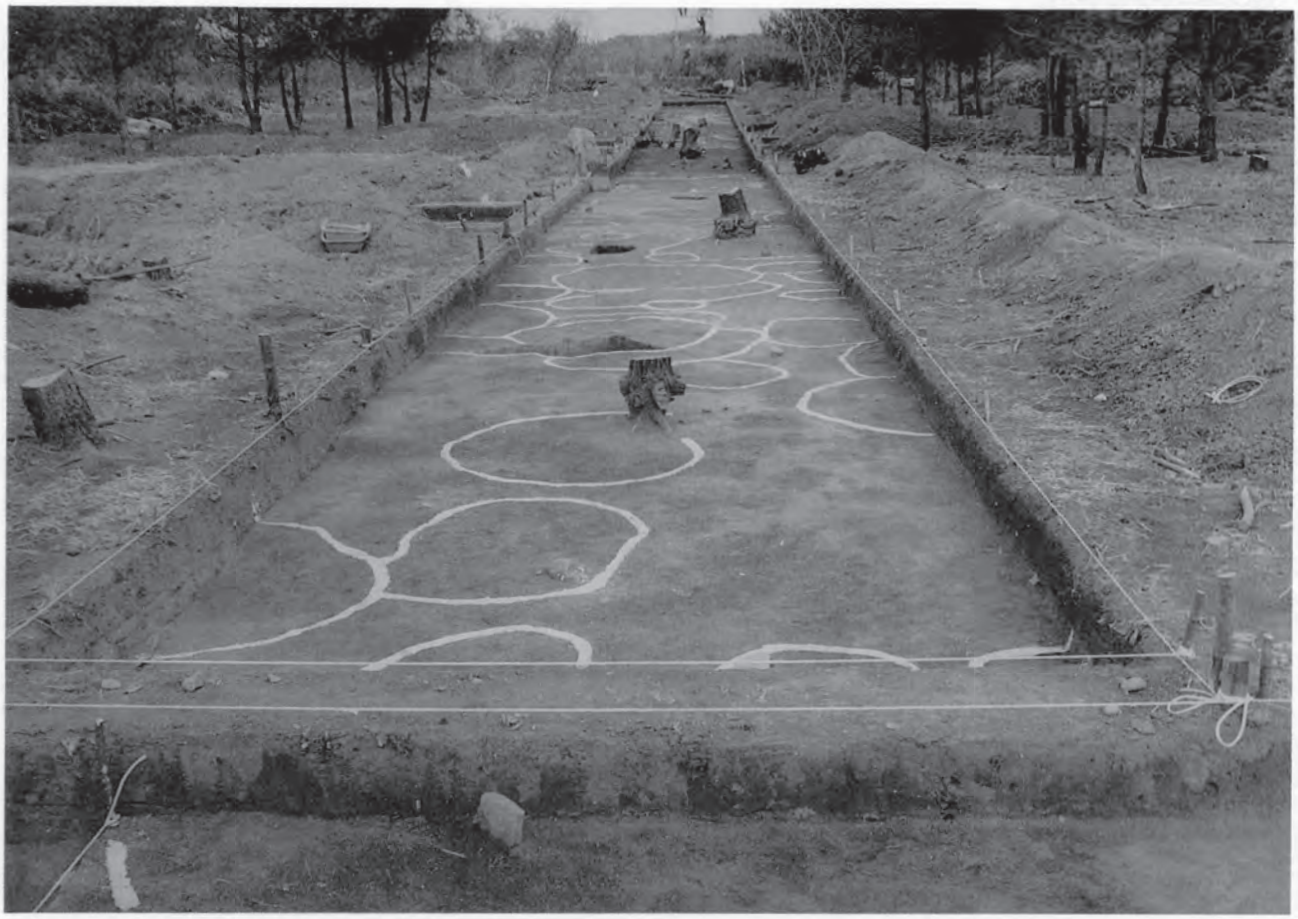
E－W　Section堆積状況

# 第12図版

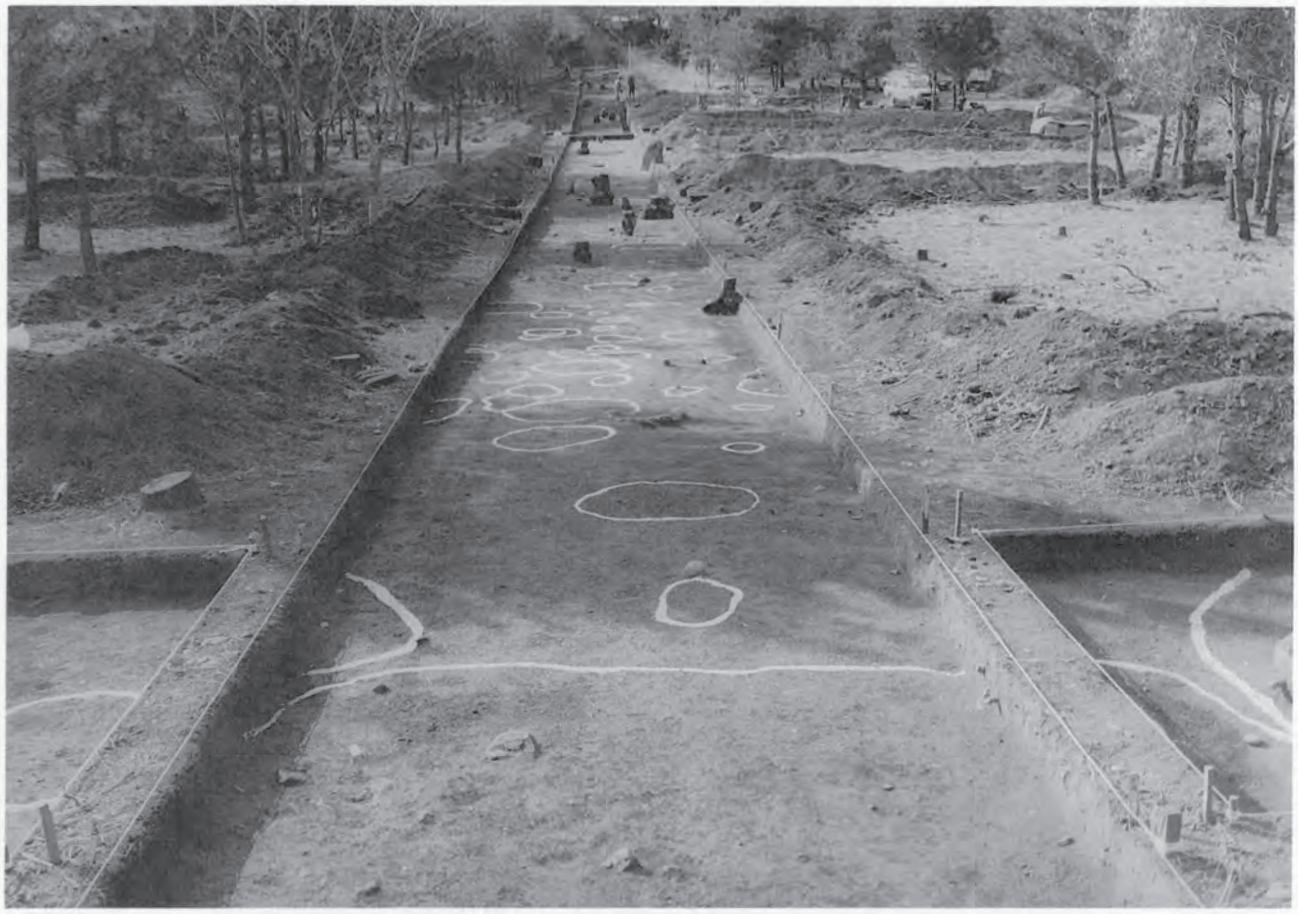
崎山貝塚第３次調査区全景（北東より）



崎山貝塚第３次調査区全景（北東より）



調査区中央部（土坑域）遺構検出状況（南西より）



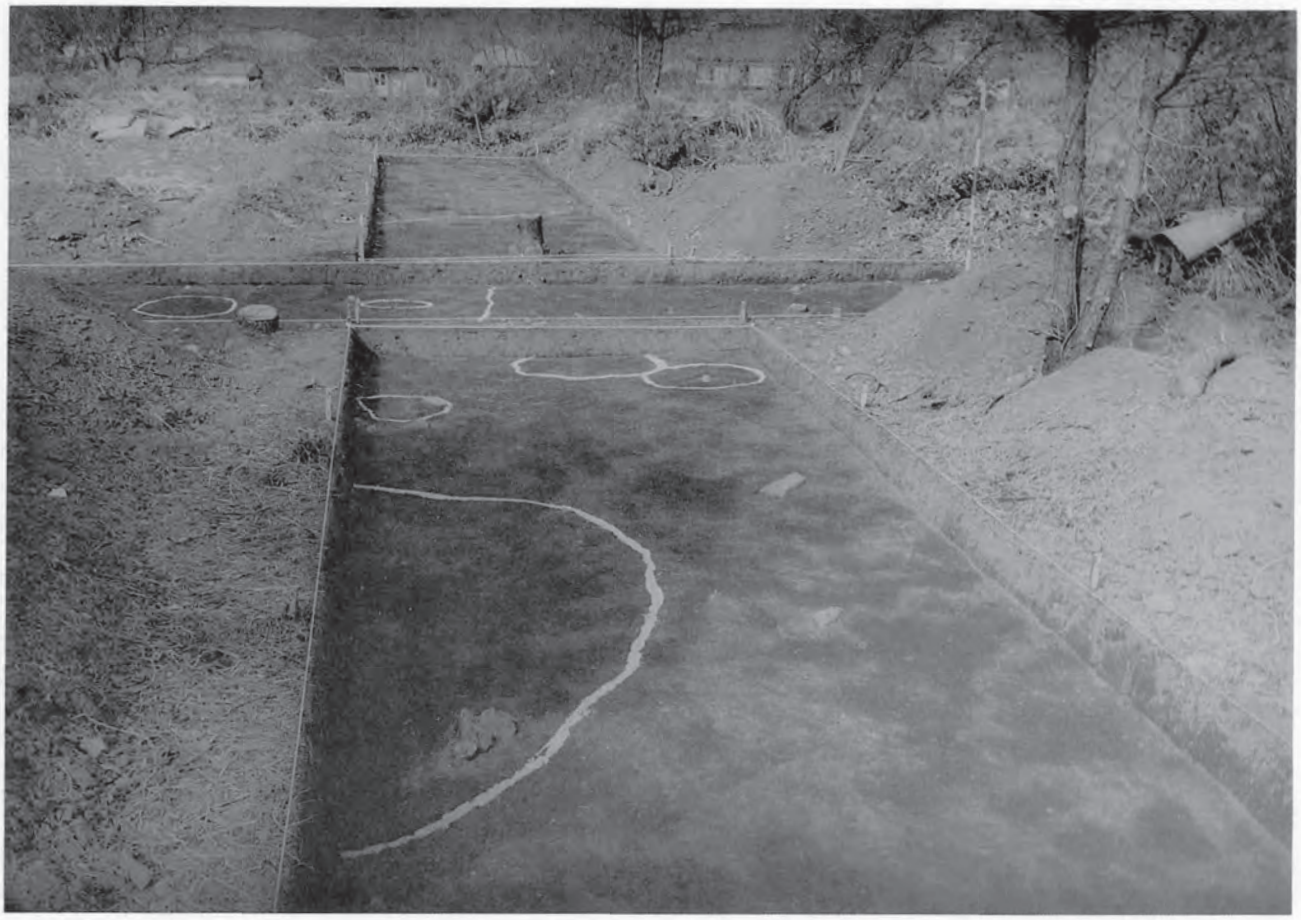
調査区東半部(居住域～土坑域)遺構検出状況(北東より)

# 第14図版

N 3 W15～S30W15付近遺構検出状況（西より）

N21E 3～N 3 E 3付近遺構検出状況（南東より）

# 第15図版



N21E51～S 9 E51付近遺構検出状況（南東より）

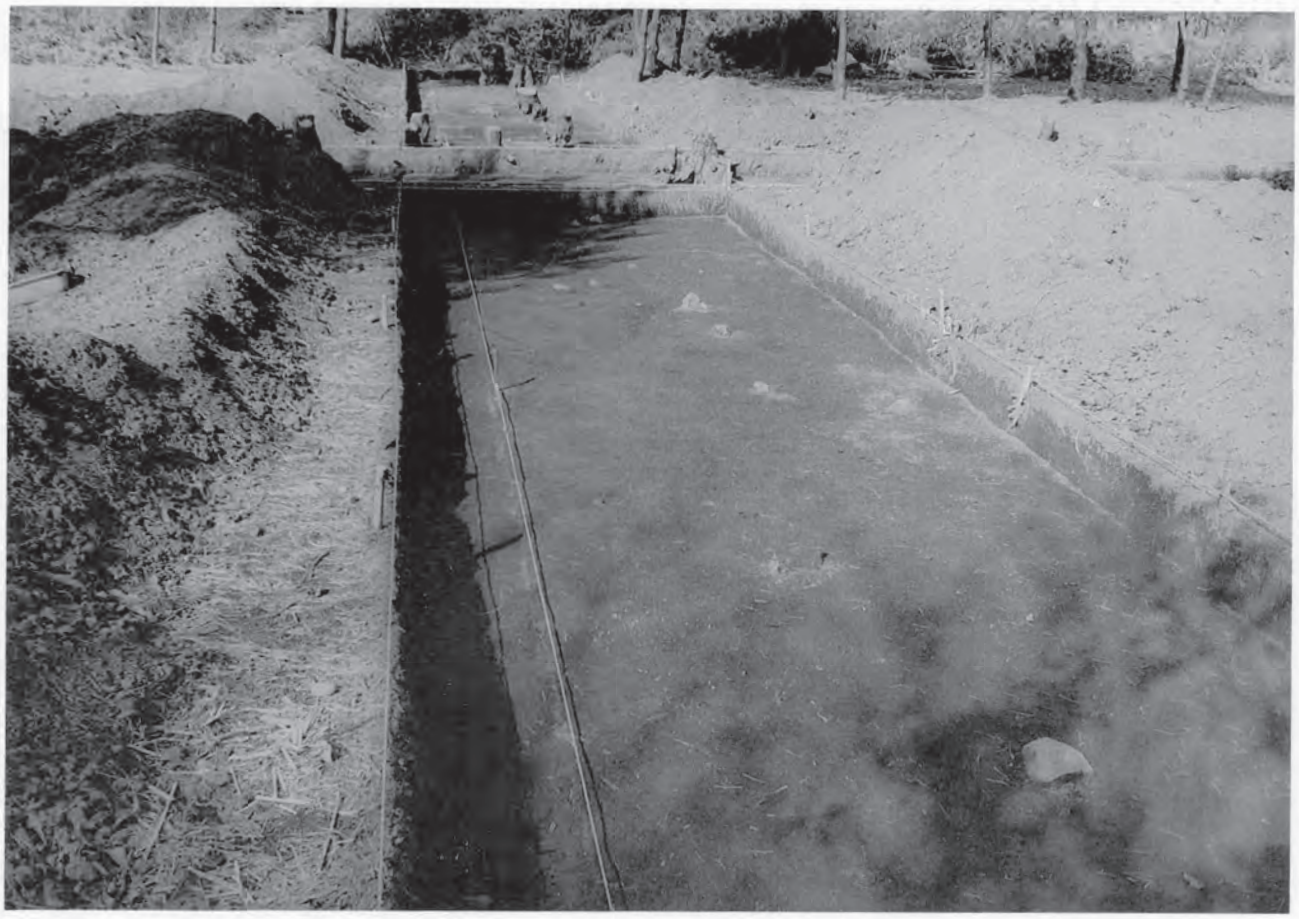
N 3 W66～N 3 W51付近遺構検出状況（北東より）

# 第16図版

N27W15～N 3 W15付近検出状況（南東より）

N21W15～S30W15付近検出状況（北西より）

# 第17図版



N21E24～S 9 E24付近検出状況（南東より）

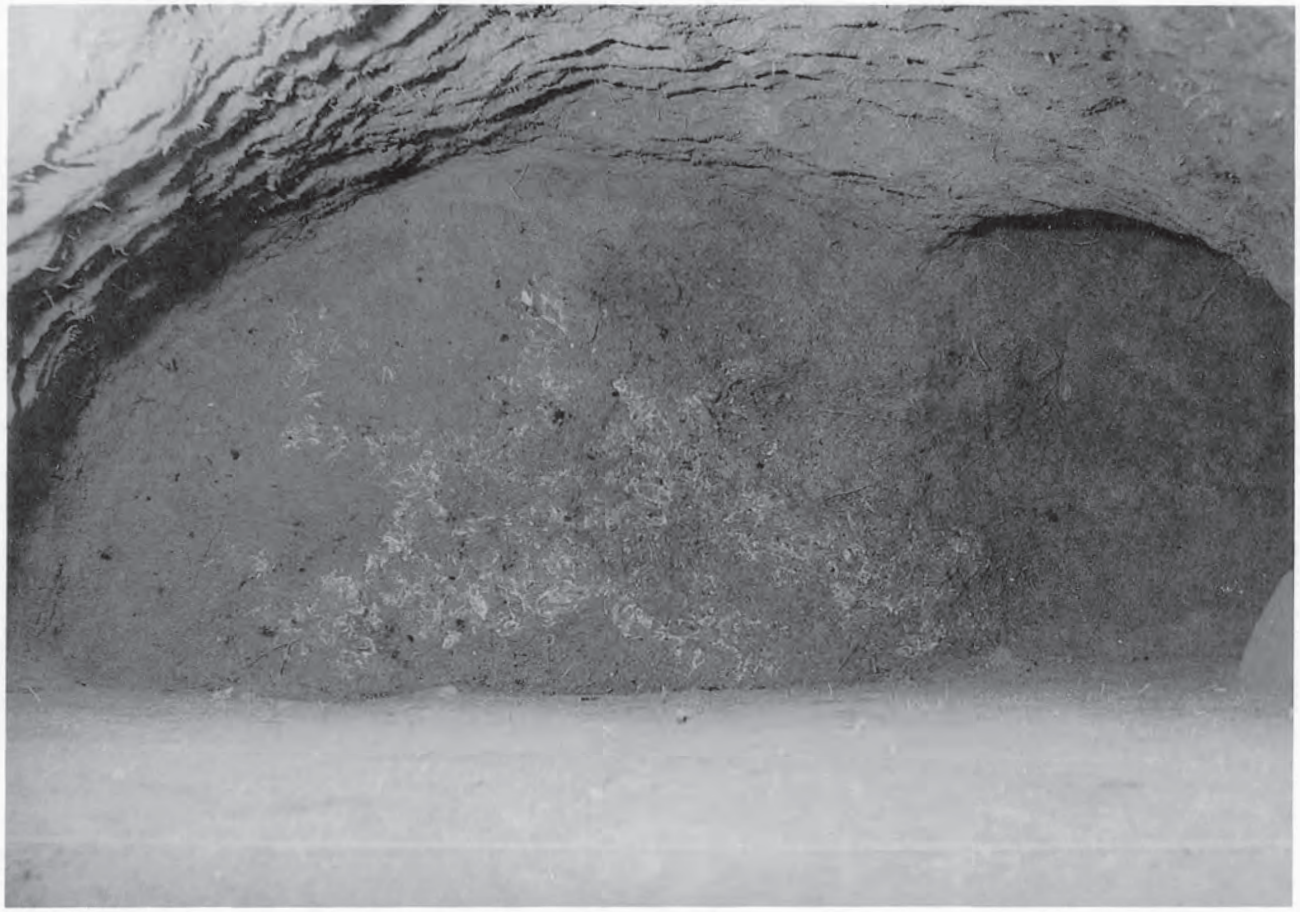
N15W33～S24W33付近検出状況（北西より）

# 第18図版

S 3 W33～S 24W33付近遺構検出状況（北西より）

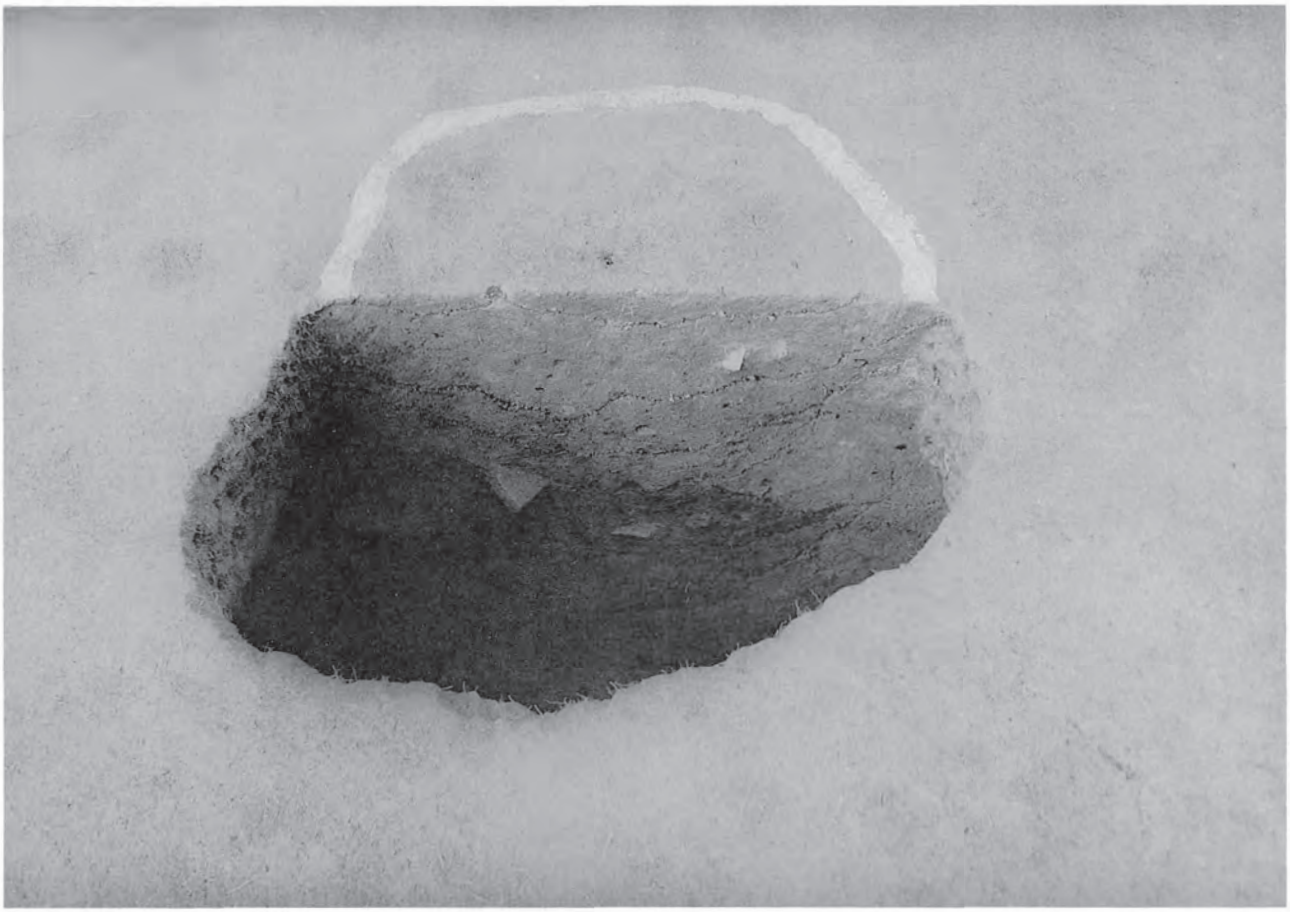
N 18W33～N 3 W33付近検出状況（南東より）

N 3 W 3 − I 号土坑跡堆積状況

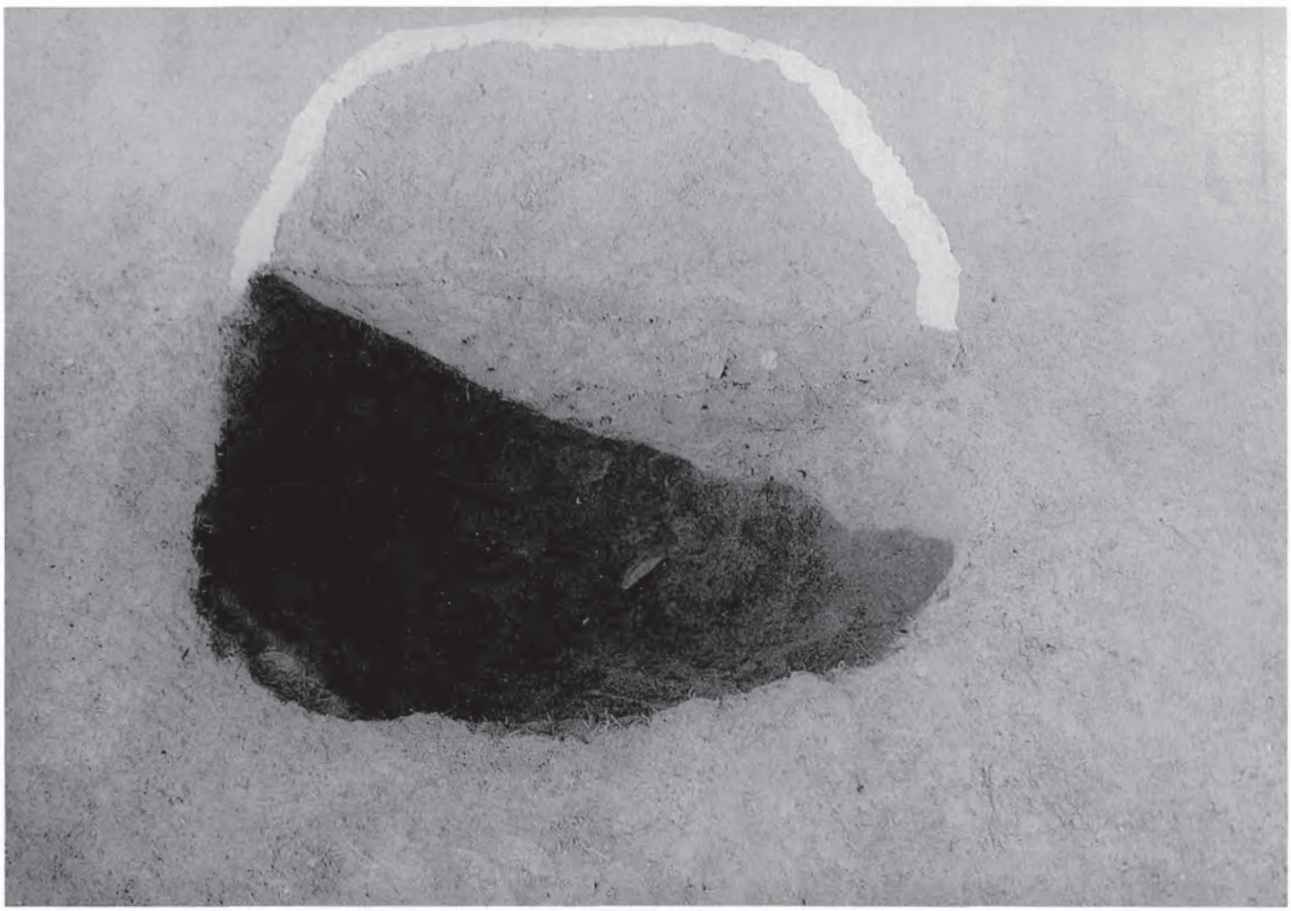


N 3 W 3 − I 号土坑跡貝層検出状況

# 第20図版



N 3 E 9 － I 号土坑跡堆積状況



N 3 E 9 － I 号土坑跡遺物出土状況

N21E3－1号土坑跡マグロ椎骨出土状況

N21E3－1号土坑跡堆積状況

# 第22図版

S 3 W15－1号土坑跡検出状況

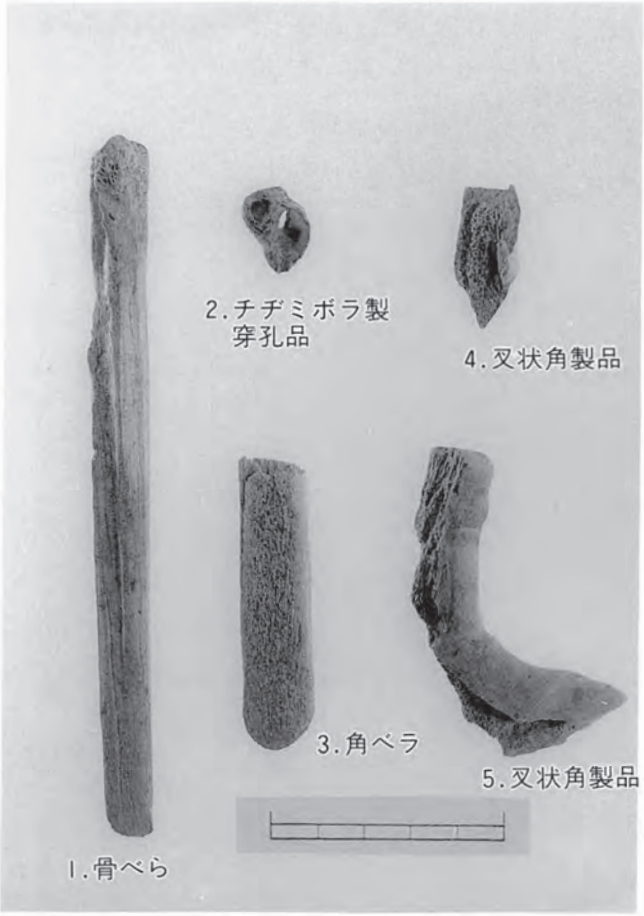
S 6 W15－1号土坑跡検出状況

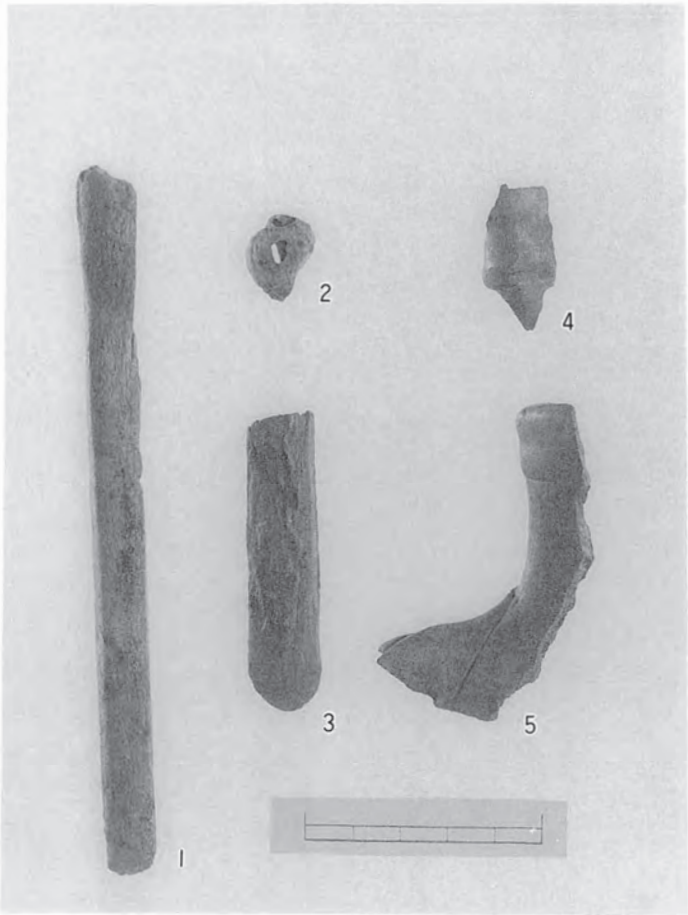
S 6 W15－2号土坑跡検出状況

S 6 W15－3号土坑跡検出状況

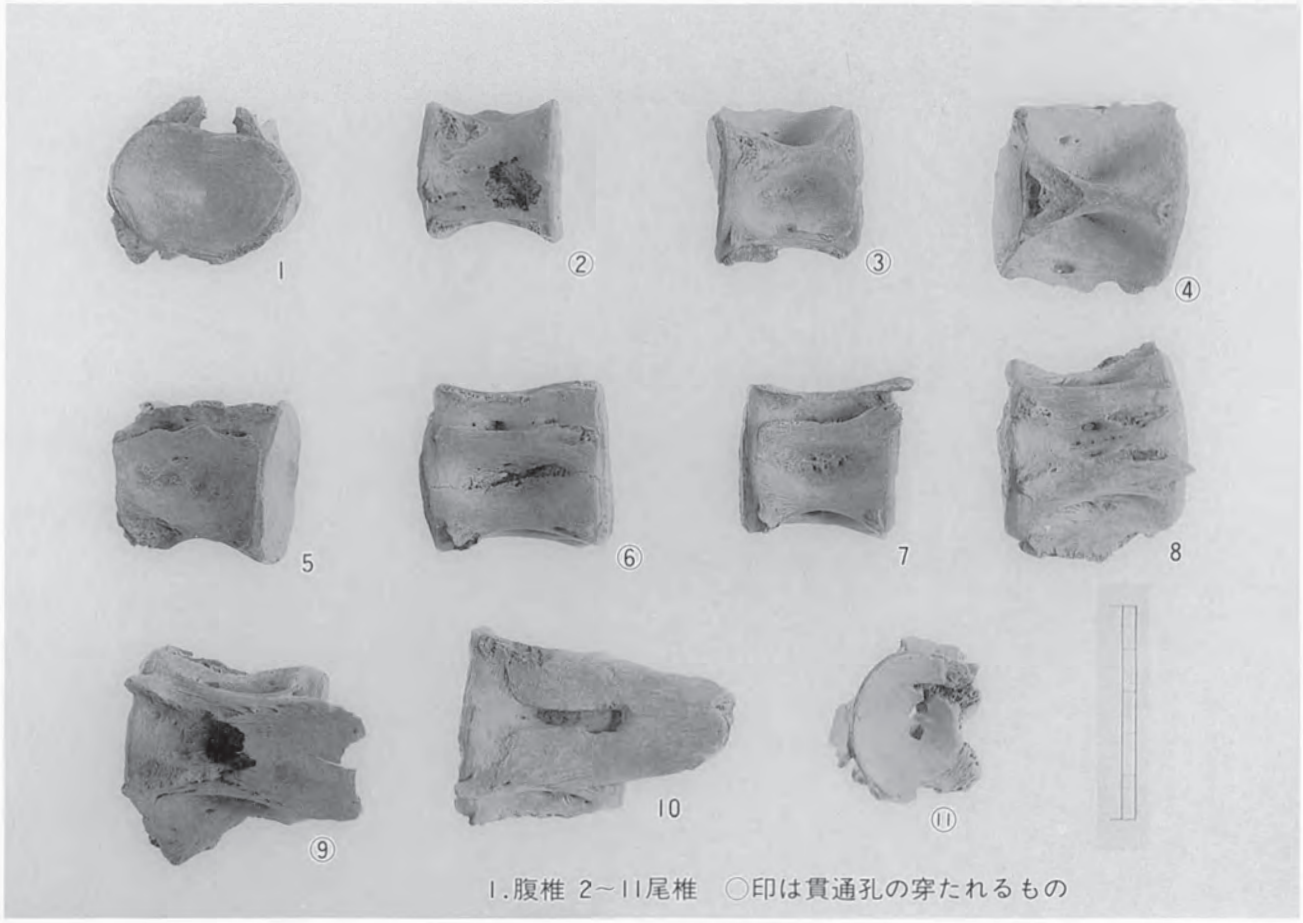
# 第24図版

N３E９－立石検出状況

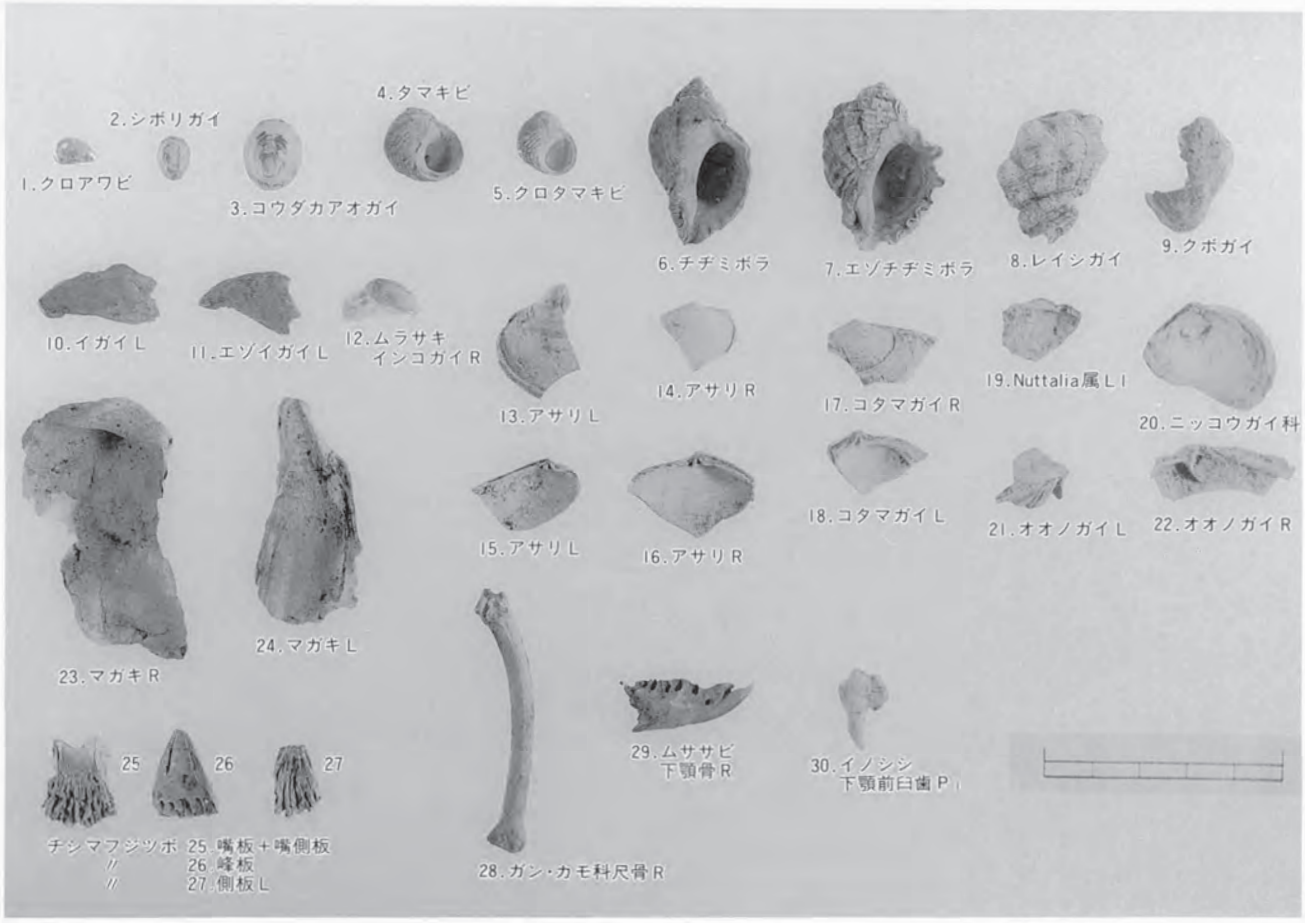



北斜面貝層出土骨角器類




N21E3－1号土坑跡出土マグロ椎骨




北斜面貝層出土自然遺物

宮古市埋蔵文化財調査報告書18

# 崎山遺跡群III

—昭和63年度発掘調査概報—

1989.3

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町２番１号

印　刷　　株式会社　文　化　印　刷
岩手県宮古市大通２丁目５の２